

564
63

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

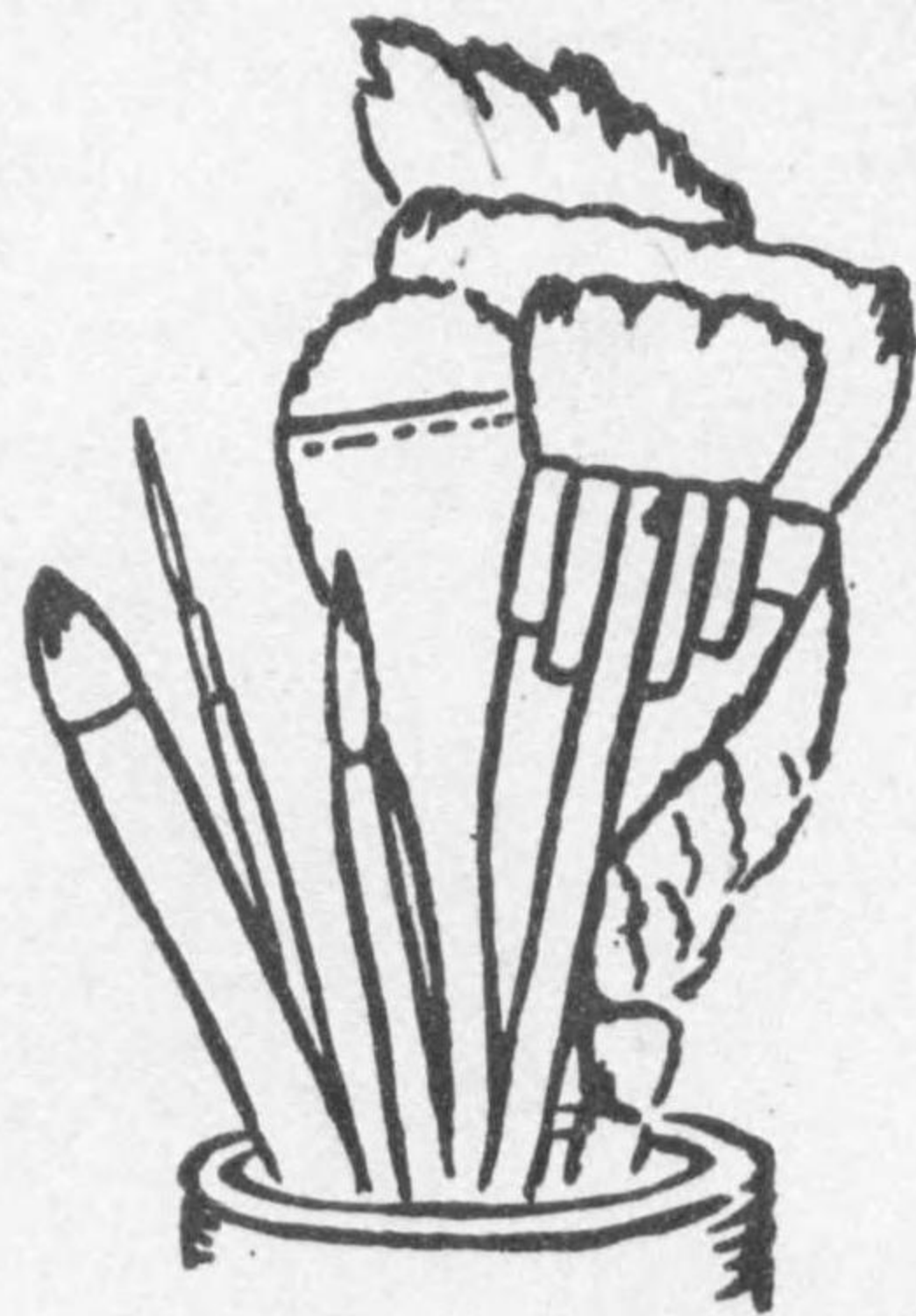
始





子供に楷書
日本文の楷書方

上翠風若

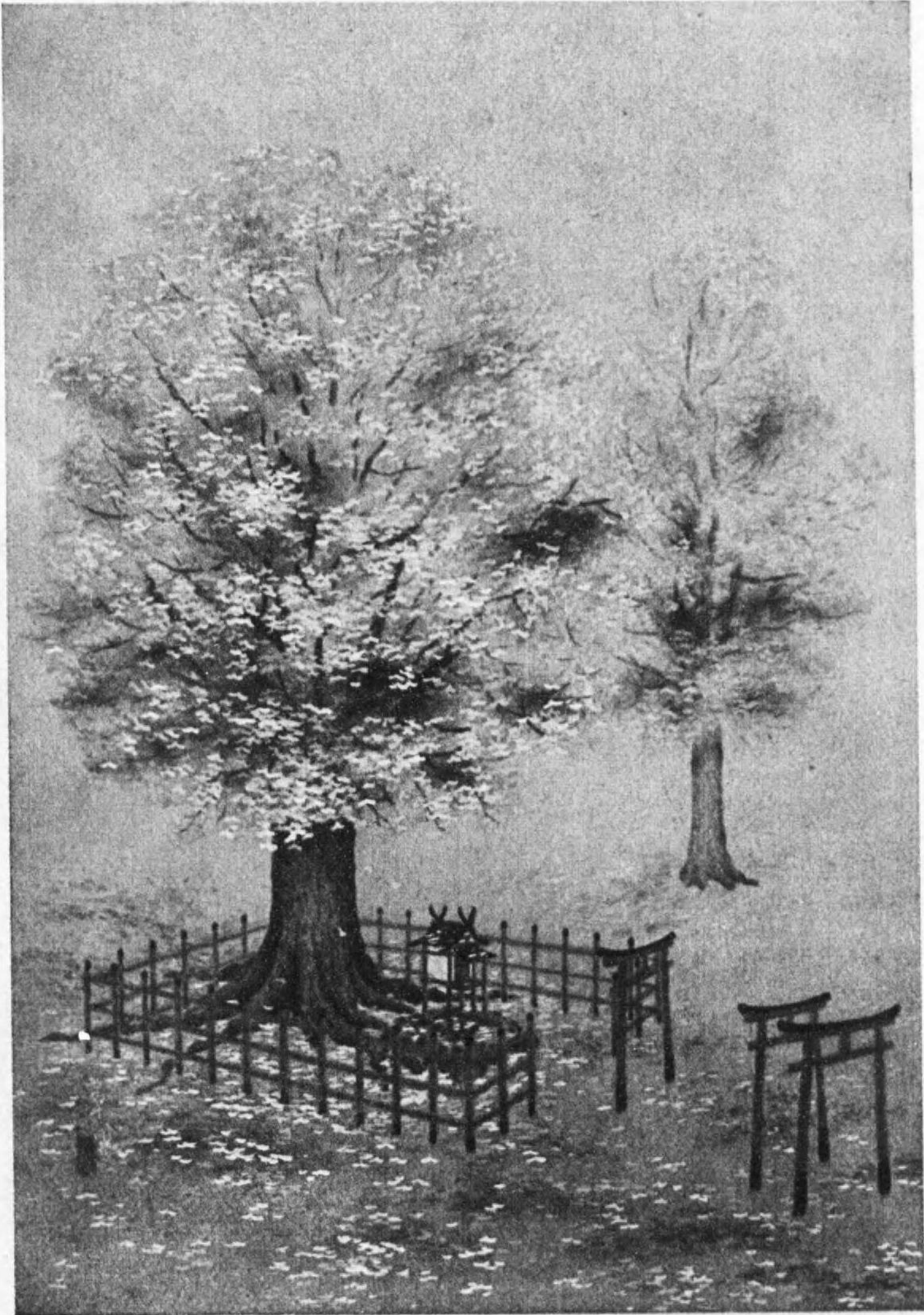


東京
誠文堂發行

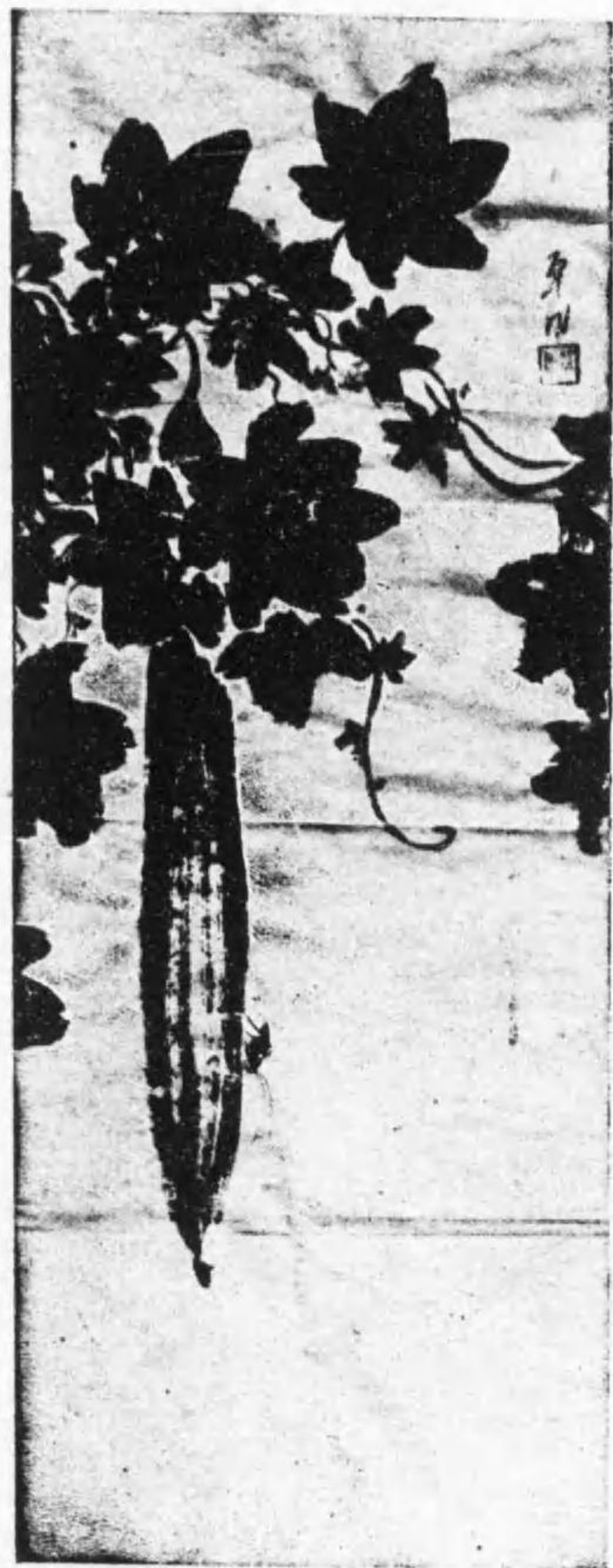
大正

15. 10. 14

内交



葉 落



瓜 糸



柿

はしがき

本書は、素人であつて娛樂半分に、日本畫を描いて見ようとする人々及び、少年少女諸君が、これから日本畫の稽古を始むる、其手引たらむとして書いたものであるから、能ふ限り専門的方則を避け、平易にして且つ迅速に日本畫を習得し、少し器用な方であつたら、展覽會等へも、出品する事が出来るやうにもなされてあります。

併し廣汎極りなき、日本畫習業上の全般から見ると、本書の如きは其門戸を覗いたに過ぎないのであります。實は孰れの修業に於ても、門戸へ近づきまての道程が至難であつて、それから先は可なり進み易いものであるから、本書によつて習畫上の門戸に近づいた諸君は、その殿堂へと突進されたがよい、殿堂は、喜んで諸君を迎へるてありませう。

はしがき

大正十五年六月

市外西ヶ原の僑居に於て

著者識す

子供に描ける日本畫の描き方 目次

日本畫と流派 一

多數の流派——やかましかつた狩野派——流派の爲めに畫を描いて居た昔の畫家——西洋畫の感化による新しい研究——次第に失はれて行く流派

最初は何から描くか 七

最初のお手本——最初に必要な用具——お手本の寫し方——附立——寫生——寫生から畫になるまで——省略の仕方

日本畫の用具 二四

いろ／＼な筆——刷毛——硯——墨——繪具皿——筆洗と水匙——乳鉢と乳棒——土鍋——膠——印押へ——印褥——印肉と肉池——雅印——燒筆——羽箒——定規——毛氈——杵——敷板——假張——皿棚

目次

繪絹其他畫を描く材料種々

繪絹——綉絹——唐紙——畫仙紙——烏子紙——屏風——屏風の額仕立——額——衝立——色紙——板

日本畫の繪具

紺青——群青——薄群青——白群青——藍——綠青——黃綠青
若葉綠青——雌黃——黃土——石黃——朱——朱土——丹——洋紅——猩臙脂——岩朱——岱赭——茶綠青——群綠青——茶白綠青——金茶綠青——黑群青——珊瑚末——瑪瑙末——水晶末——大理石末——雲母泥——金泥——銀泥——金箔——金砂子——銀箔——胡粉——墨——繪具入れ

繪具の溶き方

膠水の作り方——礬水の作り方——礬水の引き方——絹へ礬水を引くには——礬水を引き終つたら——紙に礬水を引く法——胡粉の溶き方——紺青其他岩繪具の溶き方——白群青と白綠青

の溶き方——黄土——石黃——猩臙脂——黃臙脂——藍と洋紅
岱赭——雌黃——朱——雲母泥——金泥と銀泥の溶き方——金箔と銀箔の押し方——金・銀砂子の振り方

繪具の掛け合せと下塗

具——具墨——朱の具——丹の具——洋紅の具——黄土の具——岱赭の具——赭黃の具——雌黃の具——草の具——艶黒——藍墨——岱赭墨——朱墨——臙脂墨——黃草——紺青・群青・白群青と下塗——綠青と下塗——茶綠青と下塗——黃綠青と下塗——金泥と下塗——銀泥と下塗

畫を作る順序

小下圖——構圖——草稿のつけ方——草稿の繪を紙や絹へ寫すには

繪具の塗り方

地隈——着衣——顔と手足(返り隈、暈し方)——毛髮

花と樹木の描寫法 一一

朝顔——夕顔——けし——菖蒲——蓮——牡丹——菊——ダリ
ヤ——紅葉——櫻——つじ——樹木を描く前の觀察——最初
は枯木の寫生から——梅——松——柏——梧桐

山水の寫生 一三〇

山——川——森林——原野と農村——海濱——雲(卷雲、積雲、層雲、
雨雲)——雨——雪——夜

人物と動物の寫生 一四二

風俗畫(モデル使用、木炭畫の寫生)——歴史畫——動物の寫生(昆蟲、鳥
類、獸類)

日本畫の線と陰影 一五九

日本畫の線(美しい浮世繪の線、白描法)——西洋畫の線(デッサン、裝飾畫、
ペン畫)日本畫と陰影

表装の話 一五〇

大和表具——明朝風表具——丸表装——燈補繪の表具——輪補
繪の表具——刳拔表装——畫き表具——中縁——上下——柱——
——一文字——風帶——軸——金襴——緞子——都緞子——揉紙
——箱書——折紙

落款と雅號と畫題 一六一

落款——落款に用ふる文字は——雅號を書いて雅印を押すには
——雅號の話——畫題

展覽會の話 一七一

帝展——院展——二科——研究的に見る展覽會——展覽會へ出
品するには

日本畫に志す人々に 一八二

畫家と修養——美術學校と私塾——形をくずした繪と正しい繪

子供に描ける
日本畫の描き方

田上翠風著



日本畫と流派

一日に日本畫と云つても、さまざまの流派があつて、畫風など非常に違ふ所があるの、同じ日本畫でも、斯うも違ふものかと思はれる位です。その流派といふのは、巨勢派、土佐派、明兆派、雪舟派、狩野派、圓山派、四條派、浮世繪などいふのがそれで、まだく此外にも多數の流派があり、或ものは盛んに、或ものは衰へ、また或ものは影を潜めて、一人も衣鉢を繼ぐものがないのもあります。



(派光明) 筆 光 明



(派舟雪) 筆 舟 雪

さて此流派といふものはどうして出来たものかと云ひますに、それは彼のさゝやかな谷間の泉が、流れくゞて末は河となり、その河が幾條もの、支流をなしてゐるのと同じやうなものであつて、始めは一つ流れてあつたのが、永い間には變化し、分離して、それが一種の型をなして、動かし難いものとなり、斯うして、新たな流派が生れ、而していくつにも分れたのです。



(派野狩) 筆 信 元 野 狩



(派山圓) 筆 舉 應 山 圓

昔はこの流派といふものが、大層やかましくて、例へば、狩野派の如きは、少しでも他流を真似るやうな事があると、忽ち破門されるといふ鹽梅でありました。それで一度弟子入をしたら、たとへ其流派の畫が厭になつても、其門にある以上、どこまでもそれを守つて、行かなければならなかつたのです。だから狩野派に學んだ人だと、どの弟子もどの弟子も、同じ畫の描き方をなし、またその先生の畫も、先生の同輩の畫も同じ



(派條四) 筆春吳村松

型です。

これは必ずしも狩野派ばかりにきまつたわけではありませぬ。或流派では、初代、二代、三代と襲名してゐるのがありますが、餘程其道に通じた人でないと、どれが初代の



描いたものか、又は三代が描いたのか分らない位です。彼等は少しでも先生の筆法を真似て、先生の通りに描けるのを誇りとし、又名人とされて居たので、これは止むを得ない事でありますが、これでは、何の爲めに畫を描くのか分らないのです。藝人が師匠ゆづりの藝を受け継いで、そのまゝ弟子へ教へ込み、その弟子がまた後生大事に其藝を守ると、少しも選ぶ所がなく、まるで流派の爲めに畫を描いて居るやうなものです。畫といふものは獨創的のものであつて、各人各容、違ふ所がなければならぬのです。そして自己の爲めに描かなければならぬのです。だから流派に拘泥するといふ事は、自己の藝術を開く上からも、藝道から云ふても、喜ばしい事ではありません。

併し近年は西洋畫の感化を受け、これに目を醒したのか、一般に開放的になつて、特種のものゝ外、流派などに拘泥するものがなく、自からの短を棄て、競ふて他流の長をとる様になつたので、研究する上にどれだけ自由で、且つ藝道の促

進をなしつゝあるか分らないのです。

斯うして各人が心の赴く所に従つて、思ひくの研究をするので、昔の様に一派を代表する大家が、だんく減つて行くので、了ひには其流派を傳へるものがなく、次第に失はれゆくのは、聊か惜しいやうにも思はれますが、一方には又、新らしい研究を試みて、新機軸を出す者が出来るから、結局同じわけて、寧ろ喜ぶべき傾向と云はねばなりません。兎に角吾々の新らしい時代には、流派などいふ島國的根性はこれを棄て、廣く他の長をとり、日本畫をして、世界の舞臺に立たしむるやうにしなければなりません。

最初は何から描くか

最初のお手本

繪の稽古をするには、最初人の描いたものについて、熱心にそれを寫して見ることがよい。寫すお手本は、何でもよいから自分の好きなものを撰び、少しでも早く、形が出来るやうに努めるのです。併し何でもよいと云つても、成べく日本畫の用ひ、日本畫の筆法を學ぶやうにせねばなりません。最初お手本として重寶なものは、雑誌の口繪や表紙繪、浮世繪の版畫など良いお手本です。此様なものを盛んに模寫して居ると、形も出来るやうになれば、又彩色の仕方なども知らずく覺えるのです。

お手本の模寫をすると共に、傍ら寫生をして見るのです。寫生をするには、洋

畫家が用もふるスケッチブックを懐ふくにして、手當てあたり次第しだい何でもスケッチして見るのです。

此様このやうにお手本てほんによつて、形かたちや、色彩しきさいや、筆法ひつぽうなどを知り、寫生しゃせいによつて實際じつさいに就つての寫うつし方かたを知る、これが繪ゑを初はじめるに一番いちばん入り易やすい道みちであるのです。

最初に必要な用具

繪ゑを初はじめた當坐たうざは此様このやうな簡單かんたんなものを描かき、たとへ立派りつぱなものを描かいて見みようとしても、出で来るものではないから、用具ようぐなども有あり合あはせのものと間に合あはせ、不足ふそくのものだけ求もとむればよい。最初さいしよ必要な用具ようぐは、硯すゝり、墨すみ、筆ふで、繪刷毛ゑはけ、紙かみ、スケッチブック、筆洗ひつせん、繪具皿ゑぐいざら、繪具ゑぐい、手本てほん、これだけあればよいのです。

硯すゝりと墨すみ はあとで本式ほんしきの繪ゑを描かく時とき、良よいのを求もとめる事こととして暫しばらく持ち合あはせの品しなで間に合あはせる。

筆ふで 筆ふでは只ただのお習字筆しよじふでだけでは、彩色さいしきなどが旨うまく描かけないから、彩色さいしきに用もちふるのを一二本ほんと、線描せんがきに用もちふるもの大小だいせう一本ほんづゝ求もとめたがよい。

繪刷毛ゑはけ 初はじめは餘あまり大おほきなものは描かかないから、必要ひつようもありませんが、刷毛はけはあとで必かならず求もとめねばならぬから、二寸巾位すんはぐらゐのを一本ほん有もつて居ゐると、大おほもの地ぢ塗ぬりをする時とき、大層都合たいそうつがふがよいのです。

紙かみ 紙かみは畫用紙ゑようしでよい、之これだと可かなり大おほきなものが寫うつせて、着色ちやくしやくの時とき皺しわにもならぬから、水張みづはりなどをする面倒めんどうがなく、初學者しよがくしゃにはこれが一番いちばんよいのです。紙かみは此畫用紙このゑようしと、附立つけたてて畫ゑを描かく時とき用もちふる爲ために、唐紙からし、又は畫仙紙ゑわせんしのやうなもの、五六枚まい求もとめて置おくのです。

スケッチブック は手頃てごろのもの一冊さつ。
筆洗ひつせん は本物ほんものでなくとも、井まんぶりで間に合あふから、臺所だいどころから持もつて來きてそれを用もちふればよいのです。

最初は何から描くか

繪具皿は小さなものを五六枚、大きなもの二三枚あればよいのですが、これも適當のものを、臺所から捜せば充分間に合ふのです。

繪具は十二色入位の水彩繪具でも、又は此水彩繪具を模して製へた、顔彩繪具でもよいのです。

手本は前にも述べたやうに、雑誌の口繪や浮世繪の版畫、その他畫帖のやうなものでもよいから、好きな畫を集めて、毎日いろ／＼なものを寫して見るのです。

お手本の寫し方

日本畫は凡て下へ置いて描くものでありますが、此版畫などをお手本として寫すには、机の上でよいから、必要な道具を机の側に揃えて、寫し初めます。最初形を取る時は鉛筆を用ひ、手本通りの輪廓が出来たら、鉛筆の上から墨を以て線描きをなし、線描きが濟んだら、鉛筆のあとをゴムにて消し、羽箒にて紙面の塵

を拂ひ落して彩色を初むるのです。

初め輪廓を取る時、形がむづかしくて、どうしても思はしく寫し取れない時、又はお手本と寸分違はぬものを描きたいと思ふ時は、手本の上に鉛筆にて碁盤目を引き、寫すべき紙の上へも其通りの碁盤目を引き、手本の碁盤目に現はれてゐる形のまゝ寫して行けば、手本と同じ形のもが出来ります。併し此様な寫し方をするのは、何か特別の場合だけであつて、かねてこんな眞似をしてゐると、何時になつても形が取れないから、少し位むづかしくとも、成べく見て描いたがよい。併し初めからそんな手本通りのものが出来る筈はないし、また形は少々違つて居ても、悲觀することはない。段々上手になつて來ると、手本通りのものが、樂に描けるやうになつて來るものです。

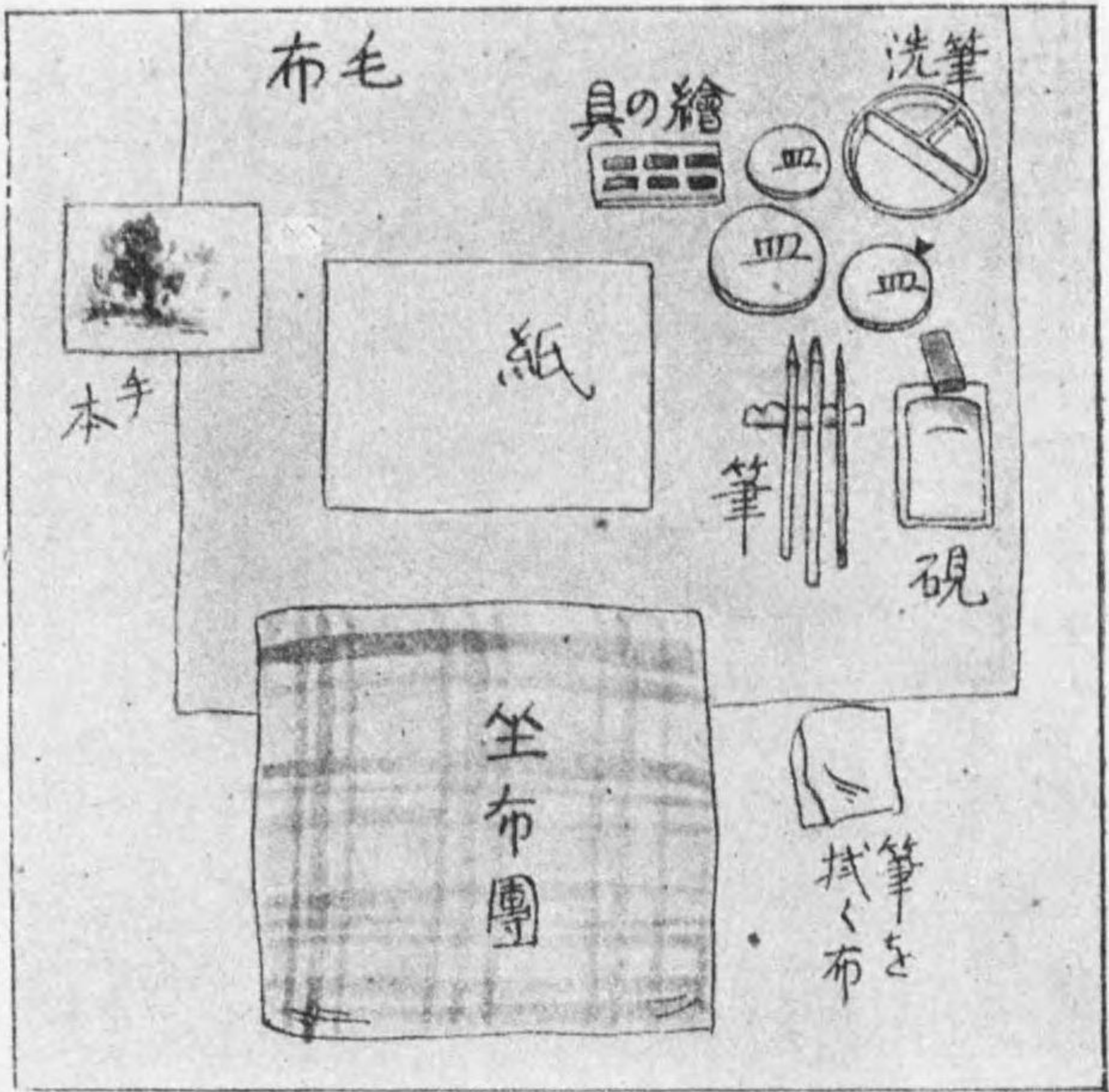
輪廓の線描きが濟んだらば、先づ背景の色を塗り、人物畫であつたら着物を塗り、こゝを描き上げてから、顔や手足などを仕上げるのです。此繪具の塗り方、

最初は何から描くか

其他描寫上の細かい事は總て、あとへ述べてあります。初めの内は何でもよいから、手本通りに彩色をして見るのです。日本畫ではこの様に輪廓を取つて、其上から着色するを勾勒と云ひ、お手本を見て描く事を臨模と云ふのです。

附立

又お手本の畫が山水や花鳥のやうなものであつて、附立(没骨とも書き輪廓を取らずに、墨や繪具を以てぶつけに描いて畫を爲すもの)にて描く場合には、紙は唐紙を用ひ、圖(但し小さなものなら机の上にもよろしい)の様に下へ置いて描くのです。初めの様な勾勒にて畫を描く場合は、形を取る事と、着色の方法とを知り、此附立では筆の持ち方と運び方、それに淡彩の方法等を知るので、附立を以て描く場合は、大體圖にある通りに道具を並べる。圖中毛布とあるは紙を徹して繪具が疊に滲み出たり、又は疊の目が紙面へ現はれたりするのを、防



方べ並の具用な要必にき描立附

ぐに用ふるのであります。一つは、毛布を敷いてあると、毛布の毛の爲めにはちかれて、紙がぬれても下へ附くやうな事がなく、大層描くに都合がよいからです。併し毛布などは價が高いから、何か代用のものを考へ、もし小さなものであつたら、ボール紙のやうなものを敷いても、描けぬ事はありません。

道具を揃えたら坐席に着き、必要なだけ墨を磨り、繪具を溶き、手本を見て静

最初は何から描くか

むづかしい事に思はれますが、馴れて了へば何でもない事ですから、初めから此様な習慣をつけて置いたがよいのです。

又此様な姿勢をして描くのは、必ずしも附立の時ばかりに限つた事ではありません。絹へ向つて本畫を描く場合、線描きをしたり、大筆を用ひたり、又は刷毛を用ひたりするにも、此様な姿勢を採るのです。

附立にて運筆の練習をする時は、手本の筆意を呑み込み、墨の濃淡、線の變化などを細かに觀察して、形に於て、色彩に於て、手本と變りない様に描かねばなりません。

寫生

昔は日本畫の稽古をするに、其多くはお手本を見て、模寫ばかりして居ました。が、近來は西洋畫の感化を受けて、お手本など餘り用ひず、寫生に重きを置く様

になつたので、現代の日本畫家は盛んに寫生を爲すのです。

寫生を爲すに就て、一言述べて置きたい事は、日本畫と西洋畫とは、寫生の目的が違ふ事です。西洋畫では、例へば油繪、水彩畫の如きものは、寫生によつて完全な畫を作るので、寫生したものをそのまま額に入れて眺めるのであります。が、日本畫では、寫生したものを参考として、一つの畫を組み立てるのであります。風景を寫すにも、人物を寫すにも、必要な部分だけ寫せばよいのです。

又寫生には人物や、動物や、花や、樹木や、風景や、建造物等に就て丹念に寫すのと、スケッチブックを以て、簡単な鉛筆のスケッチを爲すのがあります。丹念に寫生をするには、一箇所に一時間も二時間も、場合によつては二日も三日も通ふて仕上げるので、此場合形から色彩なども、實物の通りに寫し取るのです。が、これは密畫を描く場合など、用ふる事が多いのです。

スケッチは、これも製作をする場合の参考の爲めと、一つは形が出来るやうに

最初は何かから描くか

稽古の爲にするのです。スケッチは一目見た時、面白いと思つたものを、即坐に寫し取るのでありますから、物の大體を見て、感じを現はせばよいのです。寫生をするには初めは室内にある、机や、花瓶や、植木鉢の様なものを寫して見、それから戶外に出て、神社の燈籠や、お寺の鐘樓のやうなものを寫し、此様なものに寫し慣れてから、動物園などへ行つて鳥や獸を寫して見たり、それから縁日や活動のやうな所へ行つて、人物のスケッチを試みるもよいのです。

寫生から畫になるまで

一幅の畫を描き上げるには、十分腕が出来た上だと、大概のものは想像でかいても、立派に出来るものでありますが、初學時代には、その様な真似はできないから、お手本によつて畫くより、旨い方法はないのです。而してそのお手本に爲すべきものは、前述の如く實物寫生をしたが一番自由で、また一番慥かでありま



菊花の寫生

う。ここに一幅の畫面へ、菊花を描いて見るとすれば、吾家の花壇の菊や、植木

最初は何から描くか

すか、此寫生に、よつて畫を作る方法を述べませ

屋等の菊について、いろ／＼寫生をして見る。寫生の方法は鉛筆の寫生でよいから、花や、葉や、枝や、幹などを各方面から、幾枚も寫し、簡単な彩色をも施して置くのです。

今度は紅葉を畫いて見ようとするには、これも適當な紅葉を見出し、菊の場合と同じに寫すのです。これは菊や紅葉に限つたことではありません。鳥でも獸でも人でも、此様に寫生をすると、殆んど無盡藏にお手本を得られるのです。此様にして寫生したものを土臺にして、向きを變へたり、枝振りを直したりして、工夫をしながら、一幅の畫に仕立て見るのですが、此方法は、舊式な日本畫の手法や、くだらない雑誌の口繪などを寫すより、描くに面白く、また上達も早いのです。それから日本畫には、一本の草を畫くにも、一葉の木葉にも、筆法や賦彩の方則があつて、これを知るのは容易でなく、且つ新しい日本畫の用式では、舊來の方則に拘泥する必要はないから、こんなものへは頓着せず、只々形が出来るや

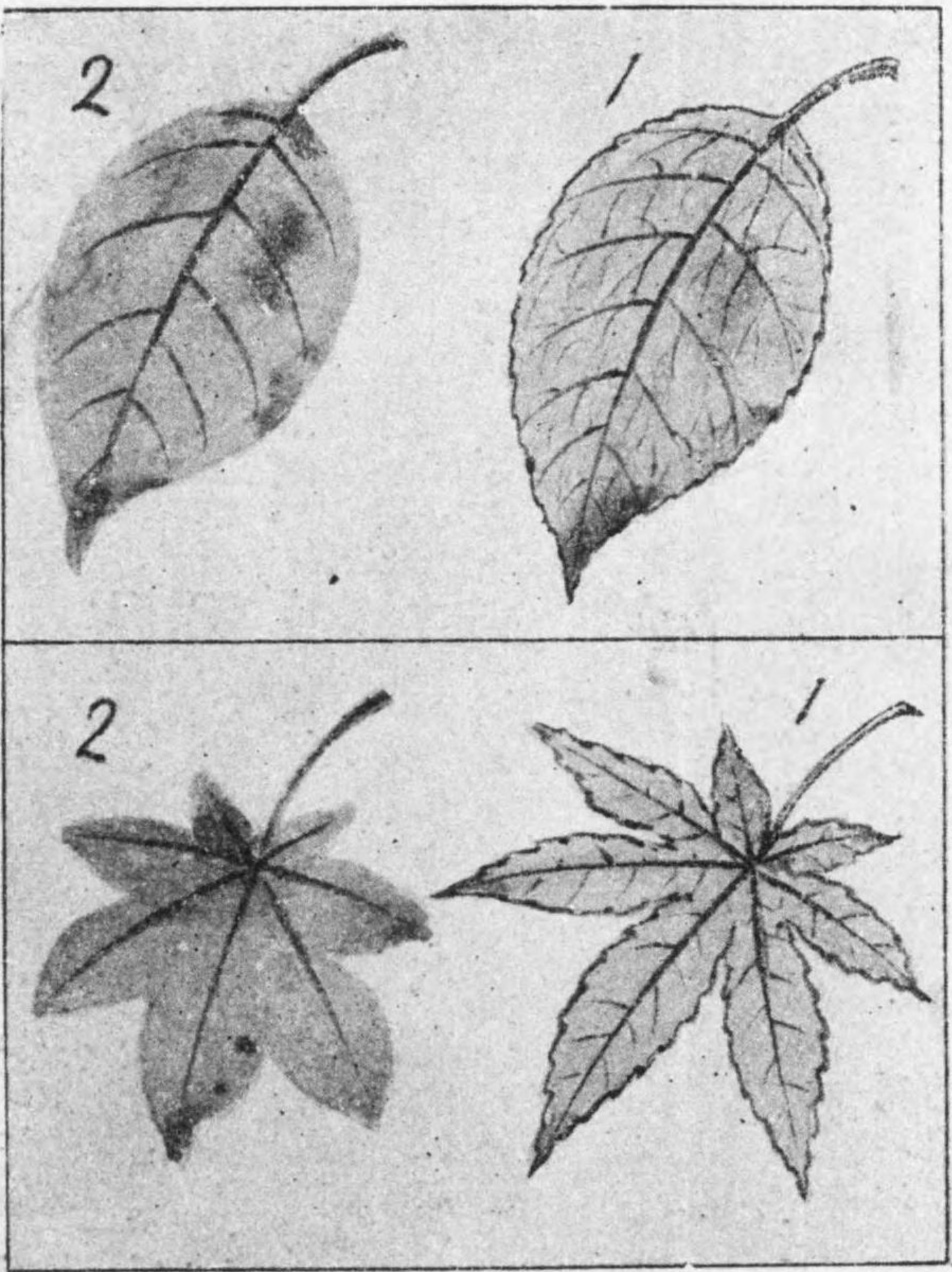
うに、勉めるのが肝心です。尙寫生をするには、季節によつて、または場所によつて、寫したくも得られないものがあります。春の頃菊花を寫して見たくも得られないし、秋になつてから爛慢たる櫻花を寫したくも、それは出來難いことです。また東京住ひをしてゐて、京の大原女を寫生したくも、これも出來ない事です。此様なわけで、寫生は其季節、其場所によらなければ得られない不便があるから、旅行等をした時は必ず土地の風俗を寫し、花時になつて、必要な花を見付けたら、必ず寫生して置くことです。

省略の仕方

寫生をする時細かな部分まで、注意して描くのはよい事ではありますが、併し一幅の畫として、寫生したものから仕上げるには、寫したものをそのまま畫いてはいけません。必ず適當な省略をして畫く事です。併し省略すると云つても、世の

最初は何から描くか

中にあるさまじくな物體を、一體どの様に省略してよいのか、これはなかくむ



省略の仕方

づかしい事でありますから、ほんの一例を挙げ、あとは賢明な皆さんの頭腦によつて、自ら悟つて頂く事にしませう。

したまゝの形ですが、此まゝでは標本圖の様で、何の面白味もなく、また畫の特

圖に示した木

葉1は凡て寫生

有性を發揮して居ません。それで此様なものを描く時は、葉脈の細かい線や、葉のまわりの鋸状をした部分等を略して、總て2の様な描き方をするのです。又草花の花や、葉や、枝など、實際はうるさい程繁つて居て、枝振りなど理想通りの形をして居ないものです。それでこんなものを畫くには、實際は繁つて居ても、適當な部分だけを畫いて、あとは除いた方がよいのです。此省略の仕方は、人の作品を見たり、または展覽會などへ行つて、多數の畫について研究して見ると、ナール程、菊は斯ういふ風に描くものだな、紅葉の枝はかういふ風に畫いてもよいのだな、と合點がゆくものです。

日本畫の用具

皆さんはこれまでの所で、日本畫とは、どんなものであるか、わたり、また有合せの用具をもつて、簡単な描方を試むる事も解つたてありませう。もうこゝまで來ればこつちのものです。これから本式の道具を整へて、本式のものを描いて行かねばなりません。それには先づ用具の一通りを知る必要があるから、順を逐ふてこれを説く事にしませう。

日本畫を本式に描くには、種々雑多な用具が必要であります。左に掲げた用具は、悉く一時に用ふるものでもありませんが、遅かれ早かれ、必要なものばかりであるから、出來得る限り、完備して置いたがよいのです。

筆 筆には彩色筆、線描筆、面相筆、隈取筆、附立筆、泥描などいろいろあり

ます。

彩色筆 彩色筆は専ら、着色の時用ふるものであつて、大小數種類あります。が、大と中を各一本、小を二三本有つて居れば、大概のものに間に合ふのです。

線描筆 線描筆は一名骨描とも云つて、着物の線、其他輪廓を描くに必要です。大小一本づゝあればよろしい。

面相筆 兩相筆は細くて穂の長い筆で、軸の穂に近い部分が、二段になつて毛の硬いものと、軟かいものとがあります。之れは人の顔や手足の線、毛髪、其他

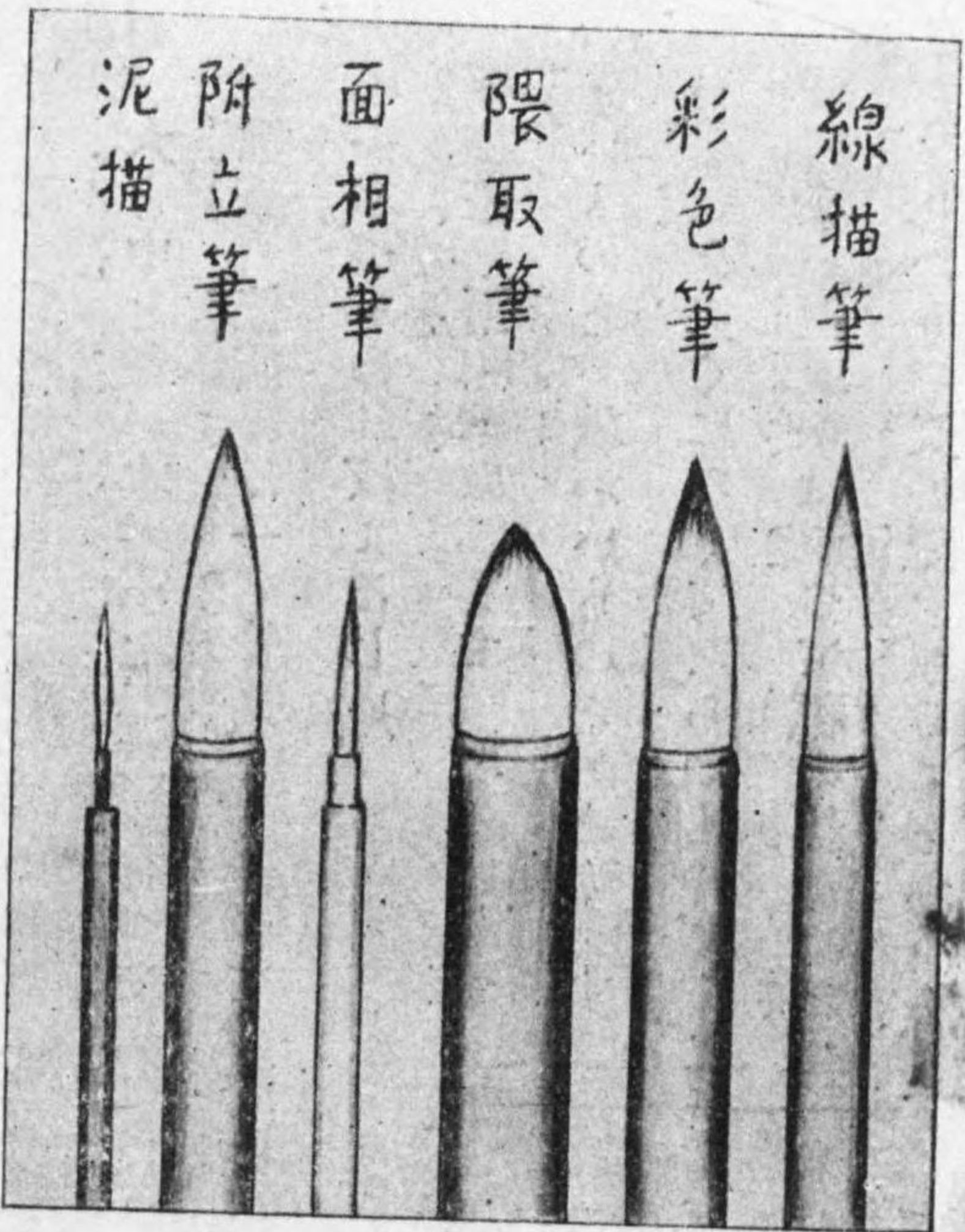
細かな線を描くになくてならぬもので、これも二三本は必要です。
隈取筆 隈取筆は至つて穂の短かい筆で、着色する時水をたつぶり含ませて、色を暈したり、又隈を取るに用ふるのです。大中小各一本づゝは必要です。

附立筆 彩色筆によく似て、毛の剛いもの、軟かいもの、又大小いろいろあります。此れは即席に描き上げる、略畫を描くに必要です。

子供に描ける日本畫の描き方

泥描 金泥や銀泥を描くに用ふる、毛の剛い小さな筆です。泥描き以外毛描きをするに必要です。

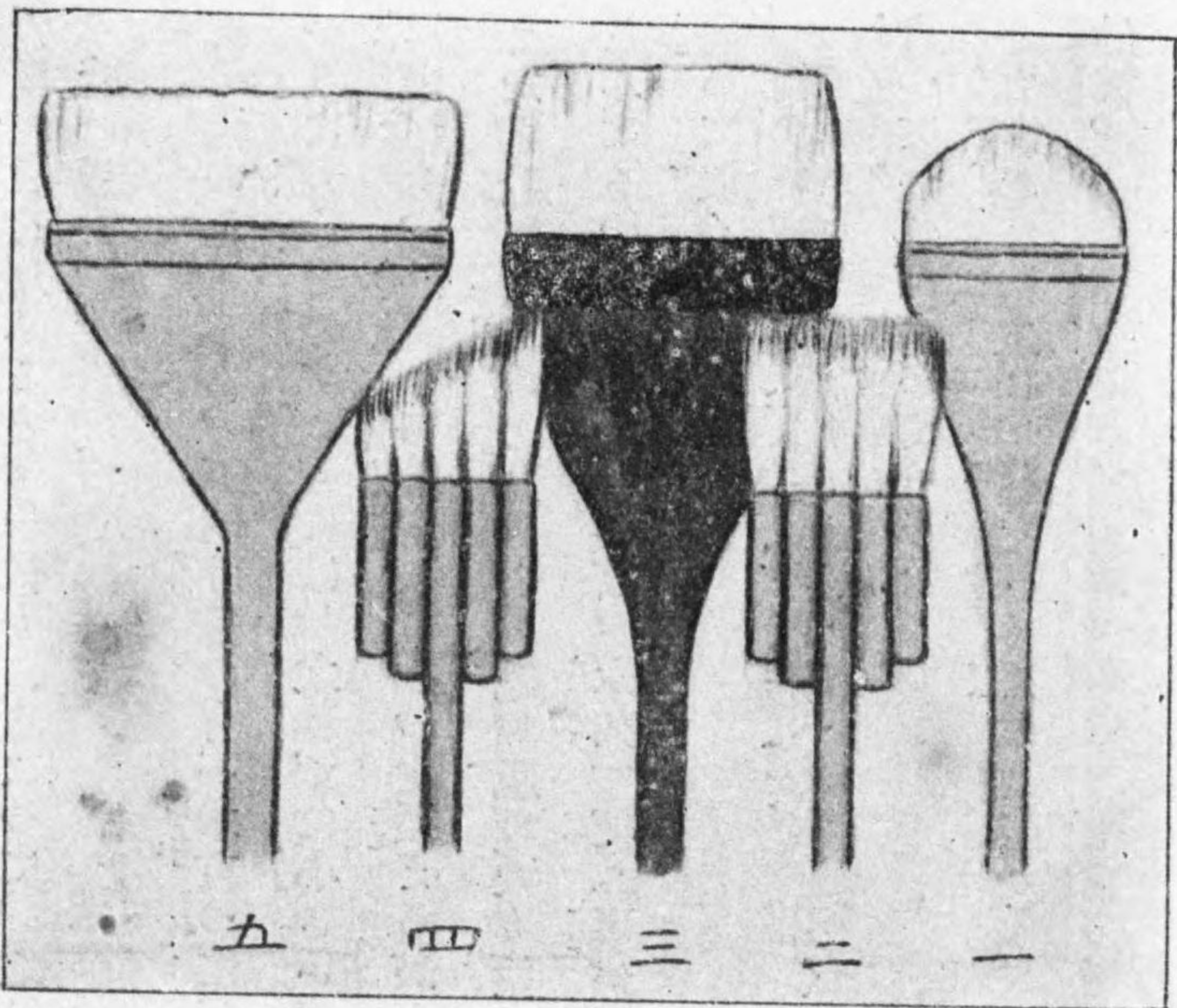
二六



日本畫用筆種々

が、之れも蘭筆と同じやうな所へ、使用する事が出来ます。

蘭筆 一名蘭刷毛 最も云ひ、極めて剛い毛で製えたもので、樹木。巖石などのかすれた所を描くに必要です。一寸巾位のもの一本あればよろしい。
又平筆と云つて、油繪筆に似たものがあります。



日本畫の用具

筆連と毛刷

- 一、丸刷毛
- 二、連筆
- 三、繪刷毛
- 四、片羽連筆
- 五、礬水刷毛

連筆 筆と刷毛の合の子見たやうなもので、筆を連ねて刷毛の形に製えたものです。用途は刷毛と殆んど變りなく、色を暈し、地隈を取るに大層便利です。
此連筆には穂尖が斜めになつて居るのがあります。刷毛の代用もすれば、尖つ

二七

た所だけを用ふると筆の代りにもなつて、之れも便利なものです。

繪刷毛 繪刷毛は巾一寸位から、六七寸位まで數種類ありますが、平生は一寸五分位のを一本と、三四寸位のを一本有つて居ればよいのです。併し六曲屏風のやうな大作を爲す場合には、之れでは小さい事があるから、其時は八寸巾でも一尺巾でも、註文して適當なるものを製えるがよい。

また刷毛は安いものを買ふと、毛が脱けたり塗りが落ちたりして、いやなものです。こんなものは一度需むれば、永久に使ふ事が出来るから、少し高くとも良い品を需めて置く事です。

礬水刷毛 礬水刷毛は紙や絹へ礬水を引くに用ふるのです。三寸巾位のを一本有つて居ればよいでせう。

丸刷毛 附立にて繪を描く時などに必要です。一寸五分巾位のもの一本あれば結構。

硯 成べく品質の良いもの、形は中以上のもの、と云つても、餘り大き過ぎては取扱ひに厄介ですから、中形のがよろしい。

墨 墨は種類によつて、非常に値段に上下がありますが、二挺形(八匁)二圓以上のものであつたら結構です。

繪具皿 繪具皿は口径二寸五分、三寸五分、四寸、五寸、六寸、七寸等種々あります。最初は二寸五分と三寸五分を各十枚、四寸と五寸とを各三枚、七寸位のを一二枚有つて居れば、充分間に合ひますが、密畫で少し大きなものを描く場合には、之れだけでは不自由ですから、必要に応じて殖した方がよいのです。日本畫では、百種近い繪具の半ばは、皿の中へ溶いたまゝ保存して置くので、それは三寸五分位の皿が適當ですから、此位の大きさのものが多數に要るのです。

重ね皿 携帶に便利に製したもので、旅行でもするやうな時でなければ、必要を認めません。

子供に描ける日本畫の描き方

菊皿

一枚の皿を幾つにも仕切つてあるもので、これが一枚あると、小形の皿

數枚の代用が出来るので大層便利で

す。

探幽皿 淡い玉子色をした風雅な

皿で、椀形のもの、平皿とがあり

ます。胡粉や金泥を溶くによいもの

です。

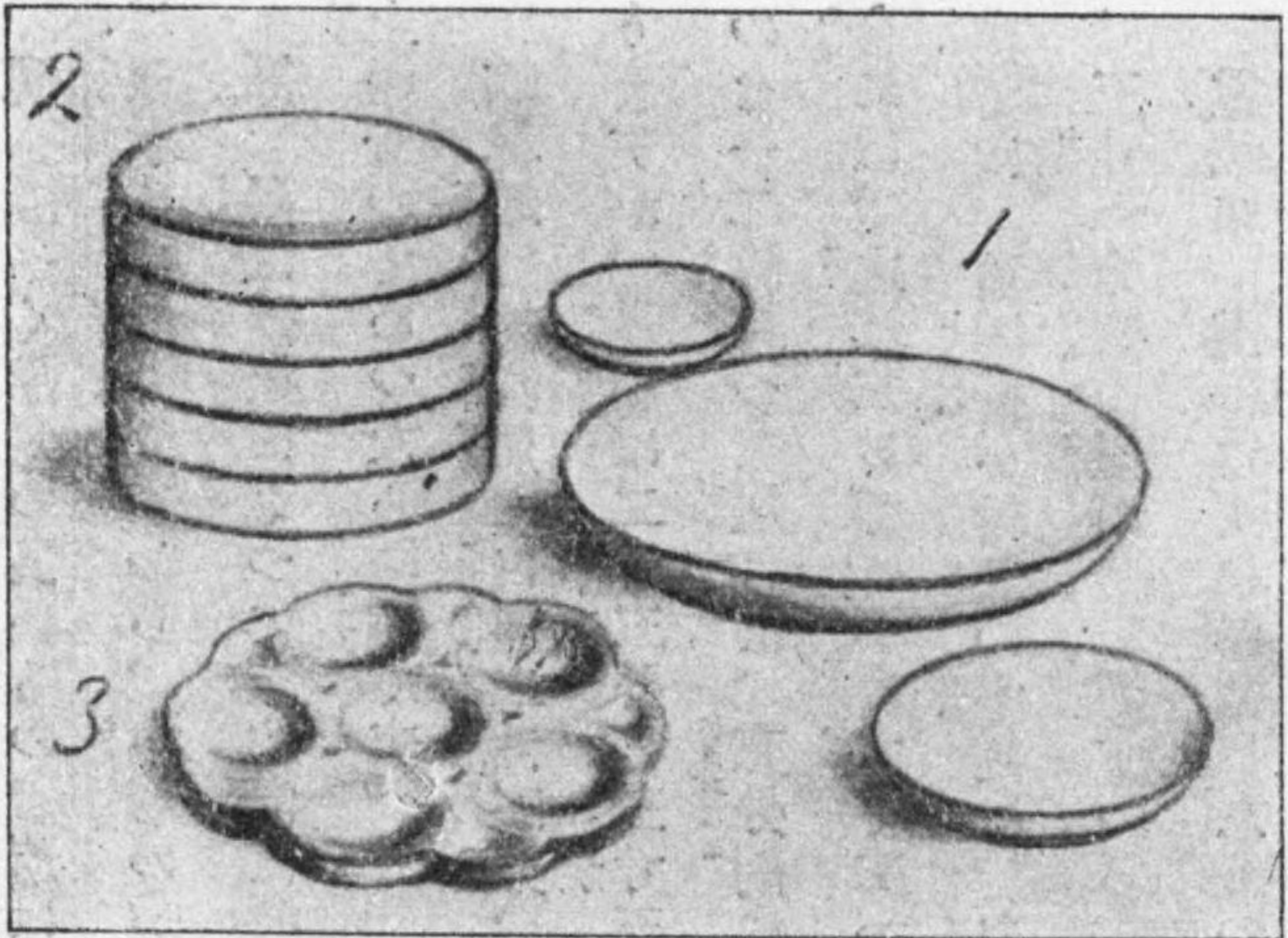
筆洗と水匙 筆洗には丸形と角形

磁器と銅製とがありますが、磁器

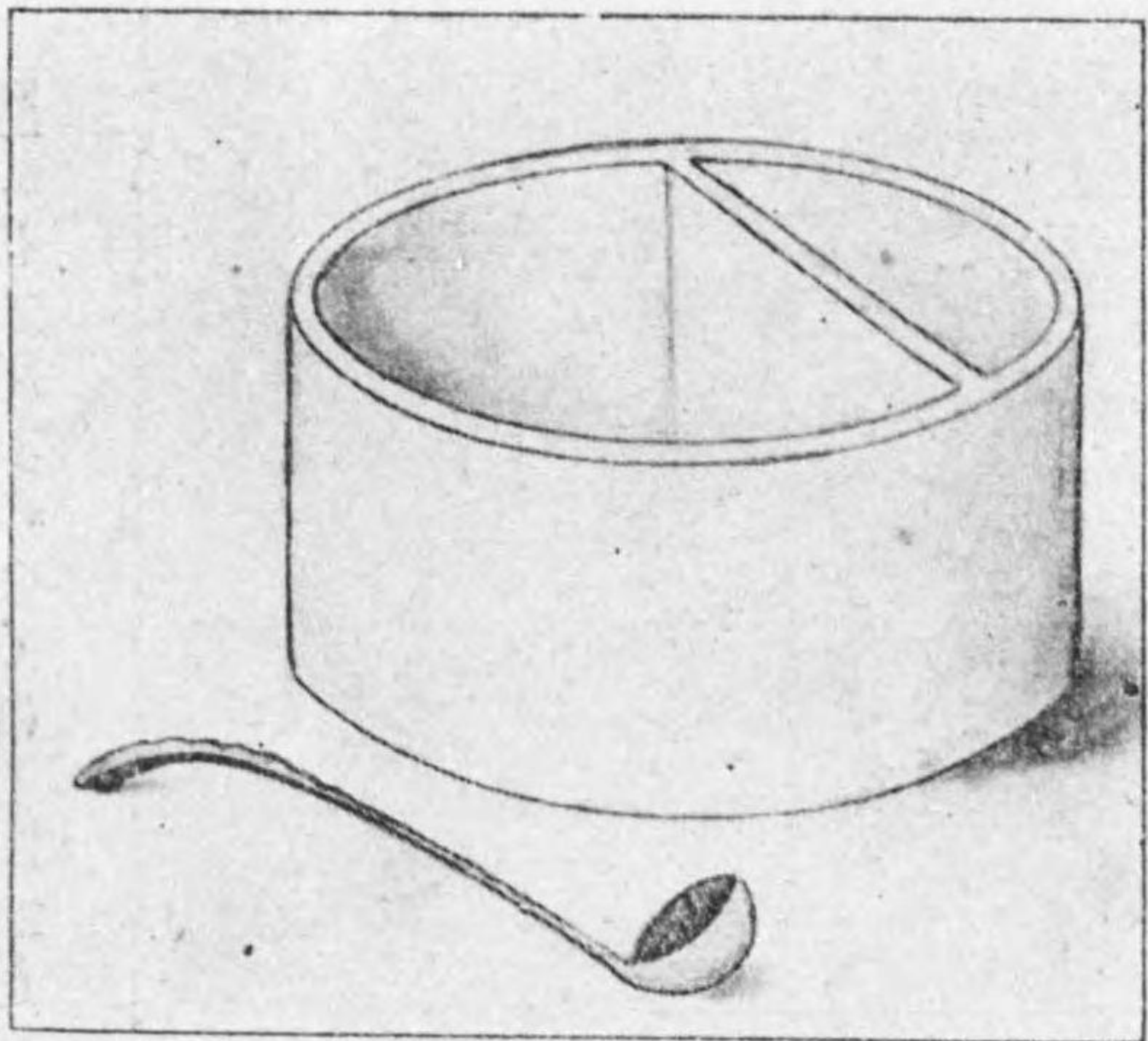
の大形のもの一個あればよいので

す。

水匙はかねて筆洗へつけて置いて



少量の水を掬ふに用ひ、又膠水を掬ふにも必要ですから、二個だけ備へて置く事



水匙と洗筆

乳鉢と乳棒 乳鉢は胡粉・黄土・朱土のやうなものを之れに入れ、乳棒を以て磨り、粉末にするに用ひ、又之等の繪具を溶くにも用ふるのです。磁器製と硝子製、大小の別があります。磁器でも硝子でもよいから、大小一個づつ必要です。又乳棒も磁器と硝子製とがあり、大小があります。これも磁器・硝子製のいつれを問はず、大小一個づつ必要です。

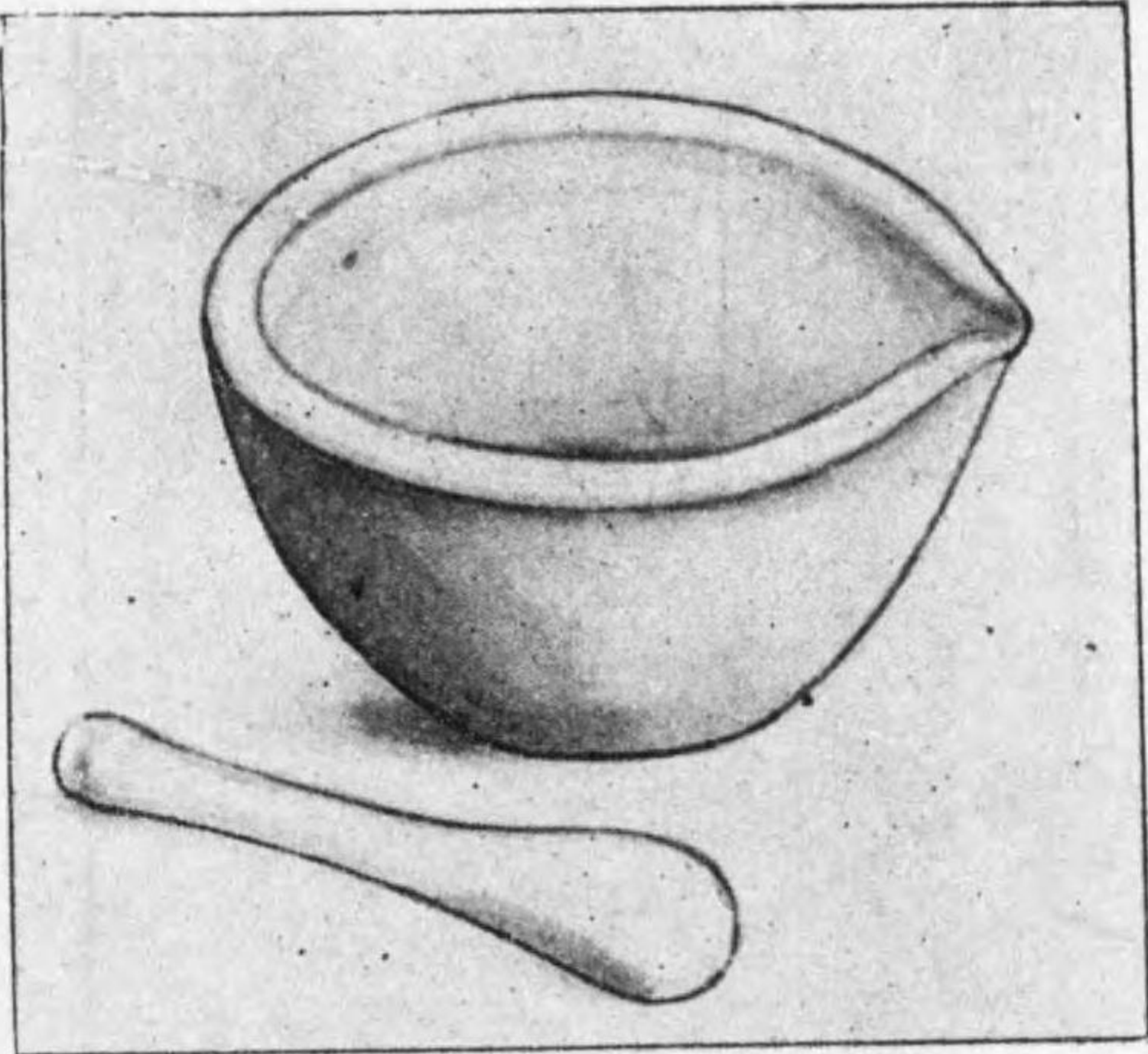
土鍋

膠を煮たり、礬水を製えたりするに必要です。口径三寸五分位のもの、

日本畫の用具

一個あれば可い。

膠 日本繪具の多くは、膠水を用ひねば使ふ事が出来ないから、膠は最も必要

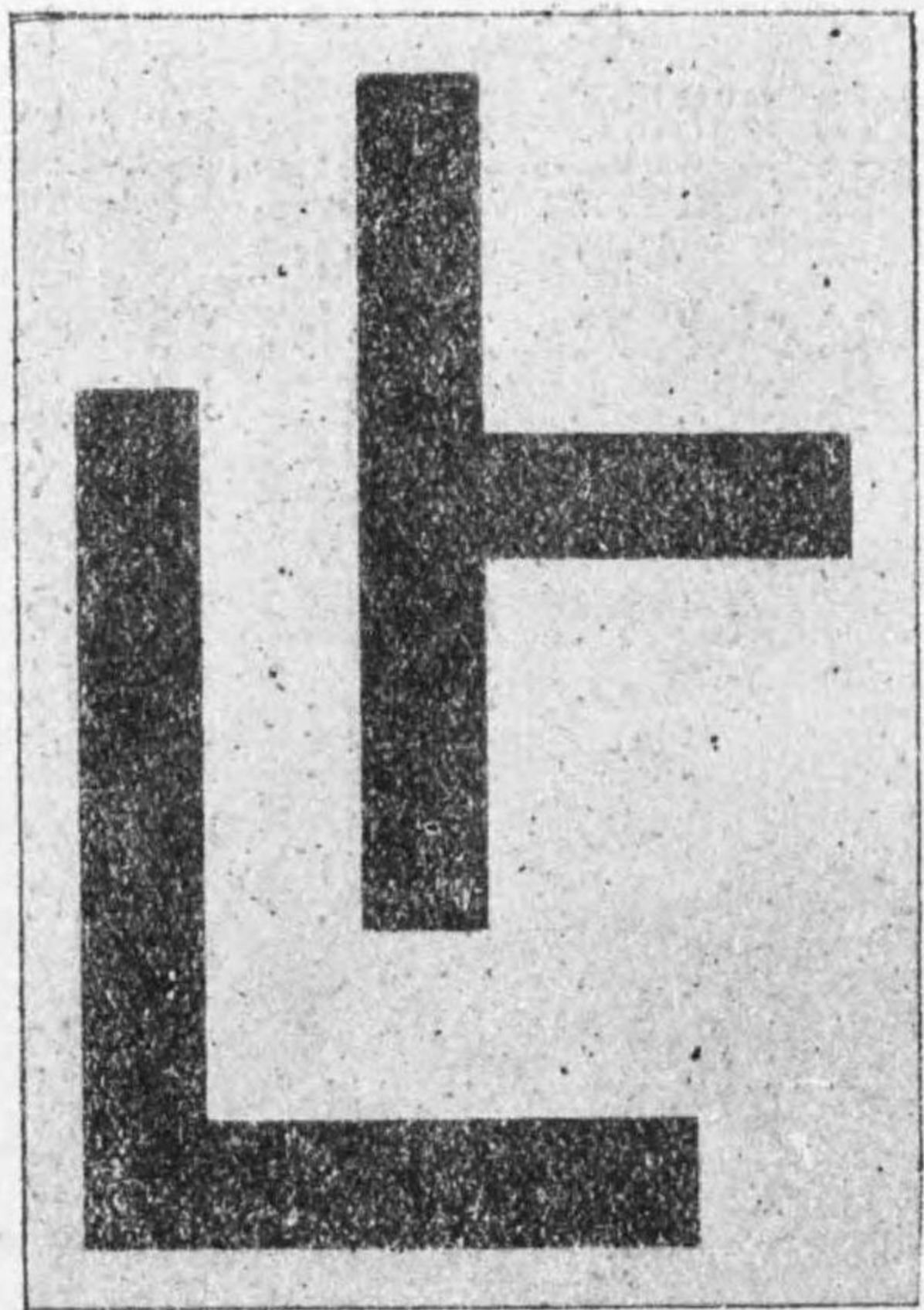


棒乳と鉢乳

ンと音を發して折れるのです。之れに反して、質の悪いのは、色が鈍く、夏にな

ると弾力が缺け、折つて見ると飴ん棒のやうに、グニヤリと曲つて、なかく折れないのです。膠は五六匁買つて置くと、當分間に合ひます。

印押へ 印を押す時、印の曲ら



ぬやうに當てるものであつて、一名印矩と云ひます。撞木形と曲尺形との二種があり、材料も象牙製と木製とがあります。何れでもよ

印褥 絹地などへ印を押す時、印の當りのよい様に、之れを絹の下へ敷くので

す。ゴムにて製られたものであつて、五寸角乃至一尺角位があります。五寸角のもの一個あれば結構。

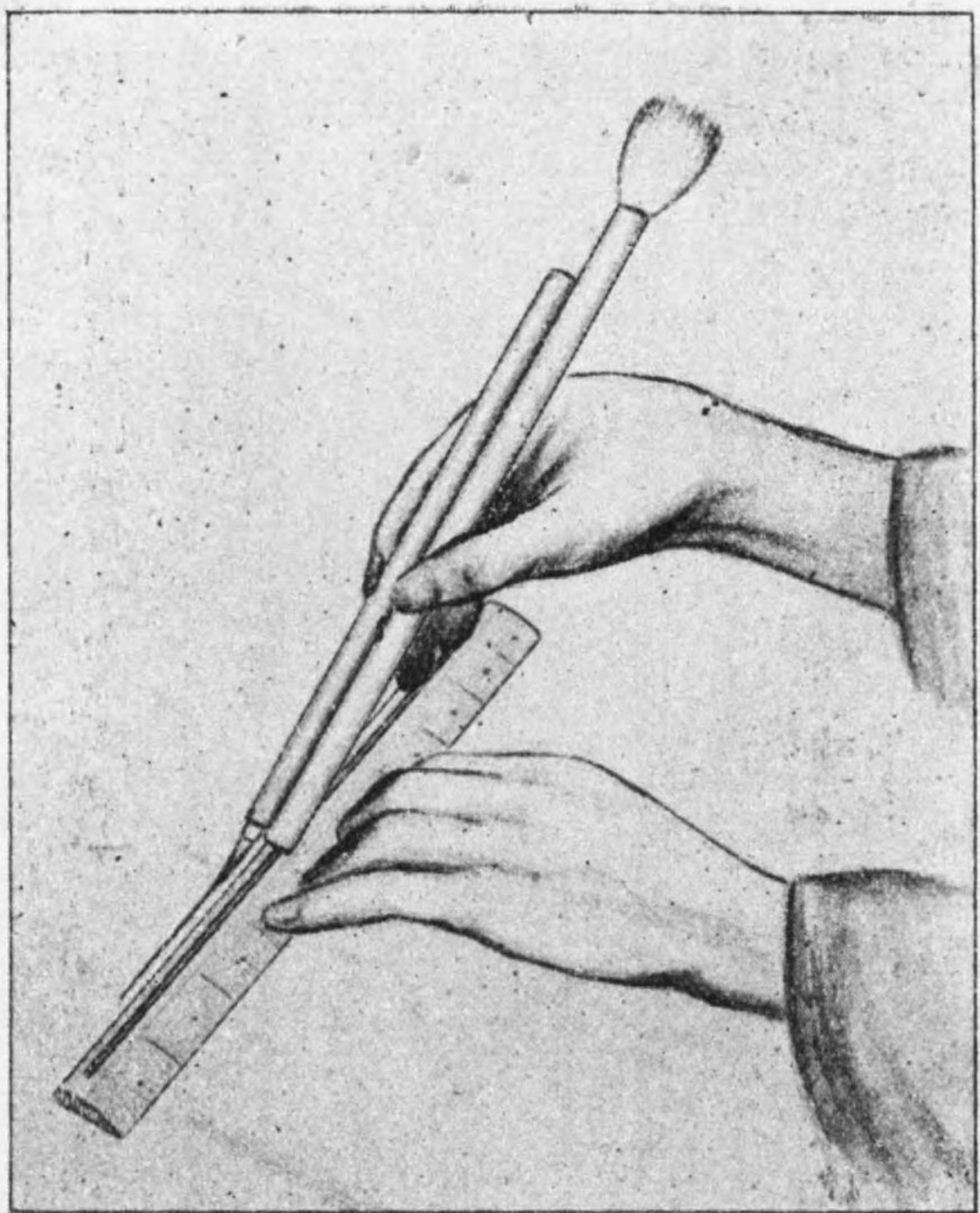
印肉と肉地 印肉は朱で色の濃いのが一色あればよいのです。印肉は冬の間は適當にかたまつて居て、使ひよいのですが、夏になると、上等品でも肉がゆるんで、油が滲み出して使ひにくいから、肉地の蓋をしたまゝこれを伏せ、兼て、涼しい場所へ置くやうにすると、いくらか使ひよいのです。

雅印 雅印は石材、木材、竹、象牙等多くの種類があります、角形の石材にて、大中小三通り製えて置くと、大概の場合之れで間に合ふのです。

焼筆 木炭とも朽筆とも云ひます。桐や朴の木を焼いて製へたもので、これを竹で作つた「木炭挟み」に挟み、草稿をつける時用ひるのです。

羽筆 木炭のあとを拂ひ、又は彩色する時、畫面の塵を拂ふに必要です。
定規 真直な線を引くに必要ですが、曲尺の溝になつて居る所を利用すればよいのです。此れにて線を引くには、圖のやうに墨を含ませた筆と、軸を逆にした筆とを同時に持ち、その逆にした筆軸の尖を溝に當て、線を引く時、墨のついて

居る筆の穂尖を地面に觸れさせると、真直な線が引けます



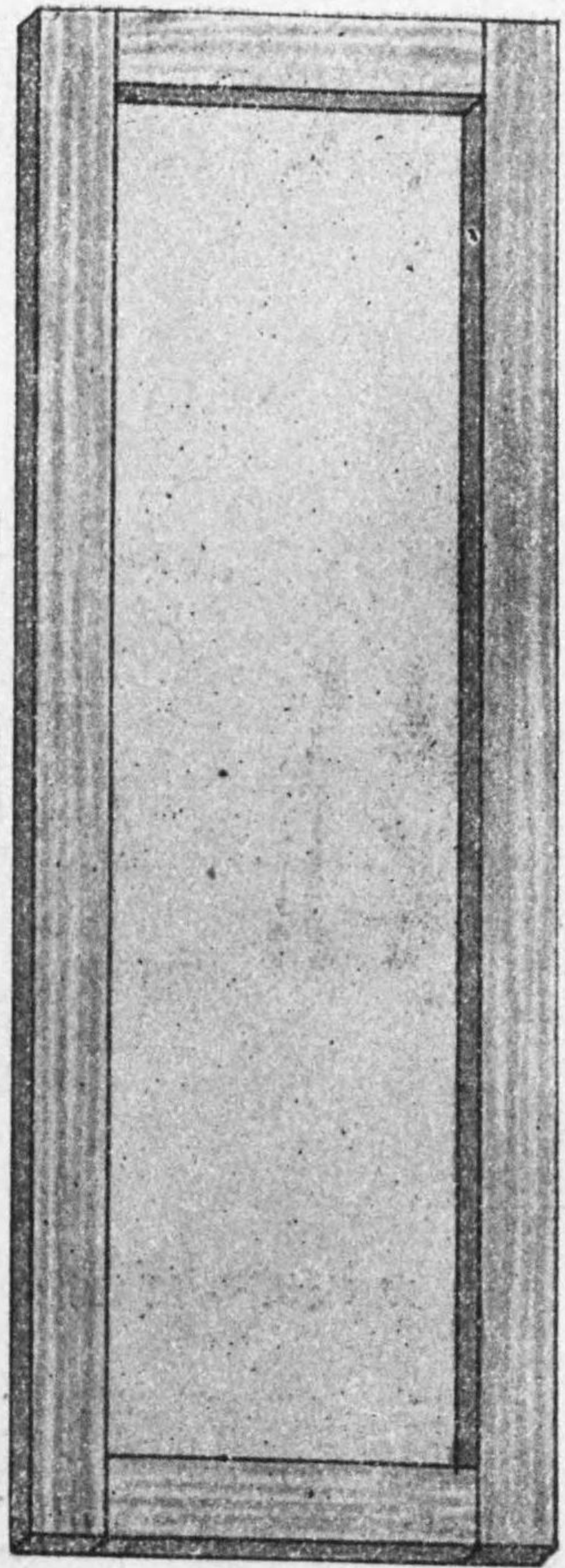
方ひ使の規定

毛氈 毛氈は唐紙や畫仙紙等に畫を描く時、繪具が浸みて墨を汚したり、又は紙面に墨の目が現はれたりするのを防ぐに用ふると共に、之れを敷いて置くと、大層運筆の工合がよいから、此種のもの

を描く時、是非共必要です。

枠は絹に描く場合に、無くてはならぬものですから、絹の幅に合せて、製へて置く事です。

枠は圖の様な形に製らへたのが、一番描くに都合がよいので、普通一般に之れ

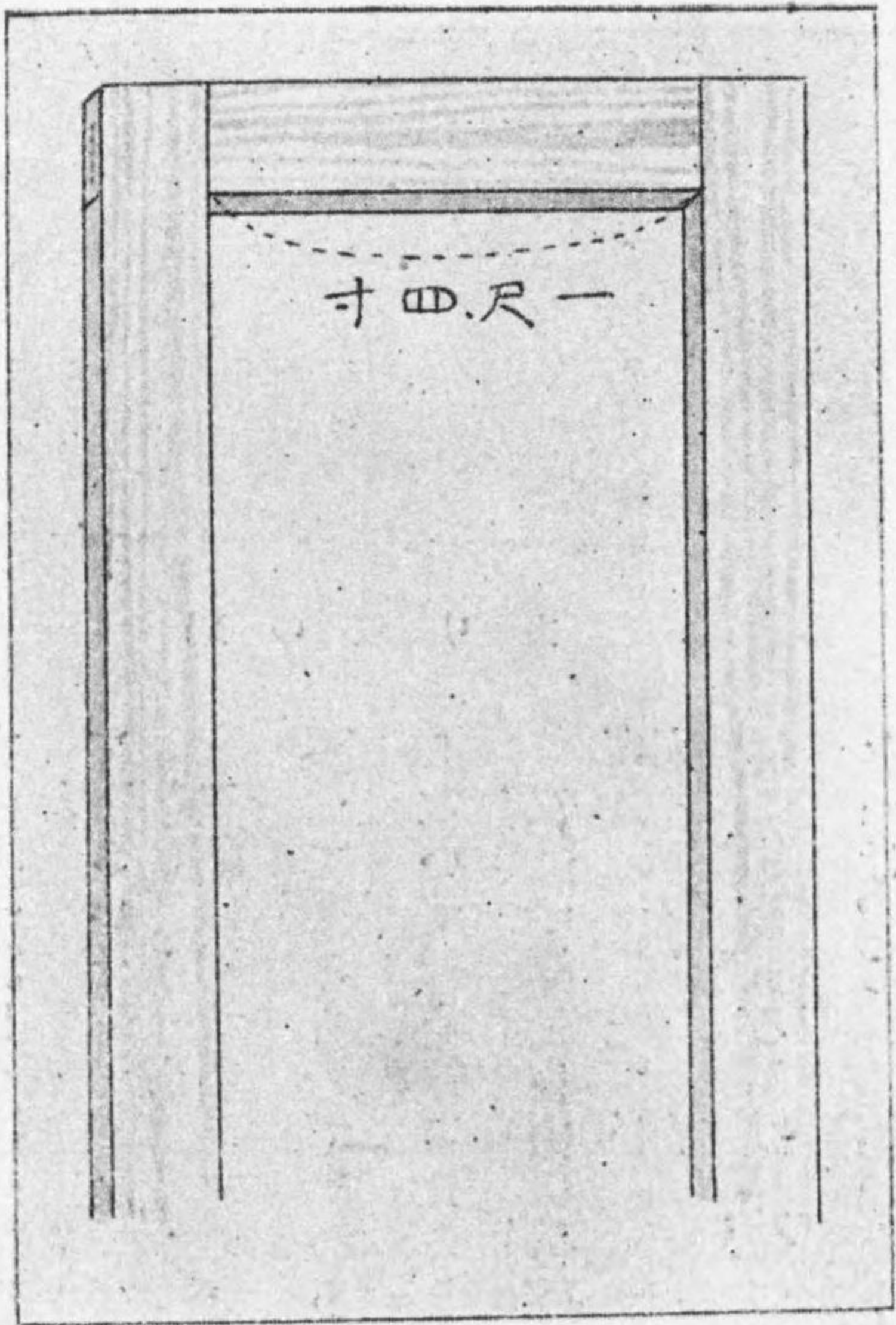


枠す。

を用ひてのま
絹へ
畫を描くには

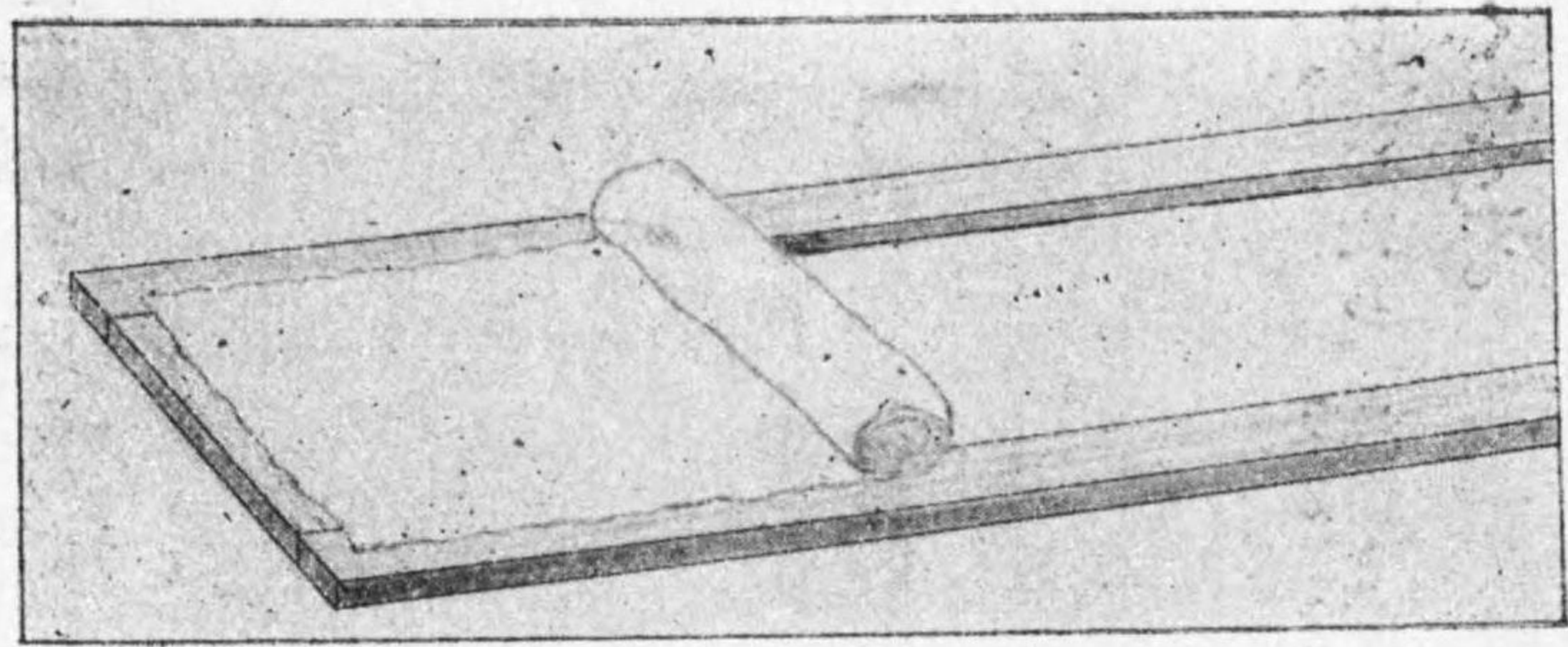
一尺三寸巾ならば、立が三尺五寸乃至四尺、一尺五寸巾ならば、立四尺乃至四尺五寸位が適當でありますから、大概此見當にて、大小幾種類も製らへて置くがよいのです。それで、例へば一尺三寸巾の絹を張るのを製へるには、兩側の張代を

五分位づゝ取るので、都合一寸程絹が狭められるわけですから、枠の内側を一尺



枠の寸法

二寸に製へ、一尺五寸巾の絹ならば、一尺四寸位に製えて置かねばなりません。絹を枠に張るには、枠の内側六分巾位に生麩糊をつけ、圖の如く片方から徐々に貼りつけ、一通りつけ終つたら、枠面と絹と密着するやうに、も一度絹の上から、糊の所を押へて置くのです。



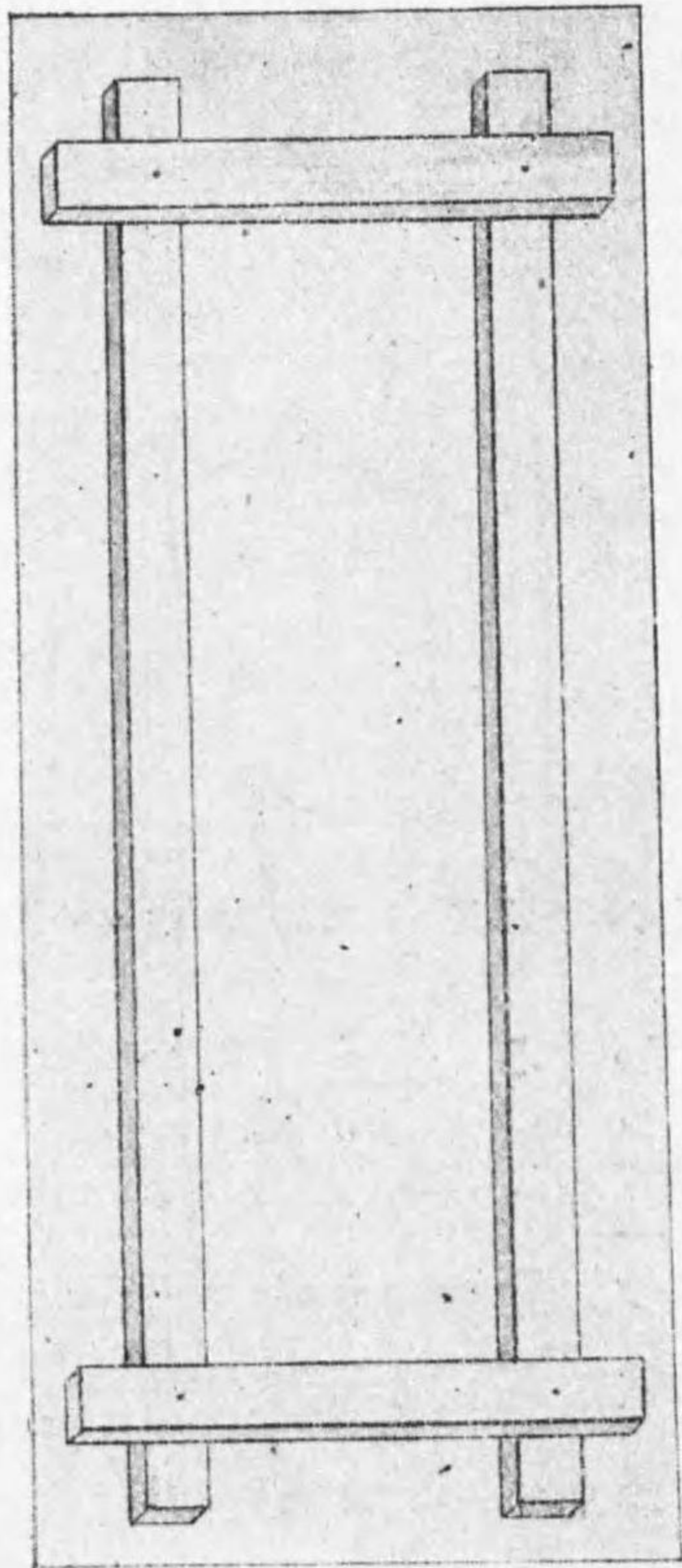
絹の張り方

絹を枠へ張つたら、攀水引をした上で書くのであります。其攀水の作り方や引き方は、繪具の溶き方の項へ詳しく述べてありますから、そこを参照して下さい。

又絹は攀水引をすると著しく収縮して、ピンと張つて来るものですから、絹を張る時、餘り強く張らないで、心持ちたるませて置くのです。

又立や横を自由に伸縮せしめる爲めに、圖の様な棒切れを四本、組み合せて製してもよいのです。これに絹を張るには、先づ1の如く短かい方の棒へ糊をつけ、これに絹の上下を張りつけ、今度は長い方の棒へ糊をつけ、2の如く見當を則つて之れに合は

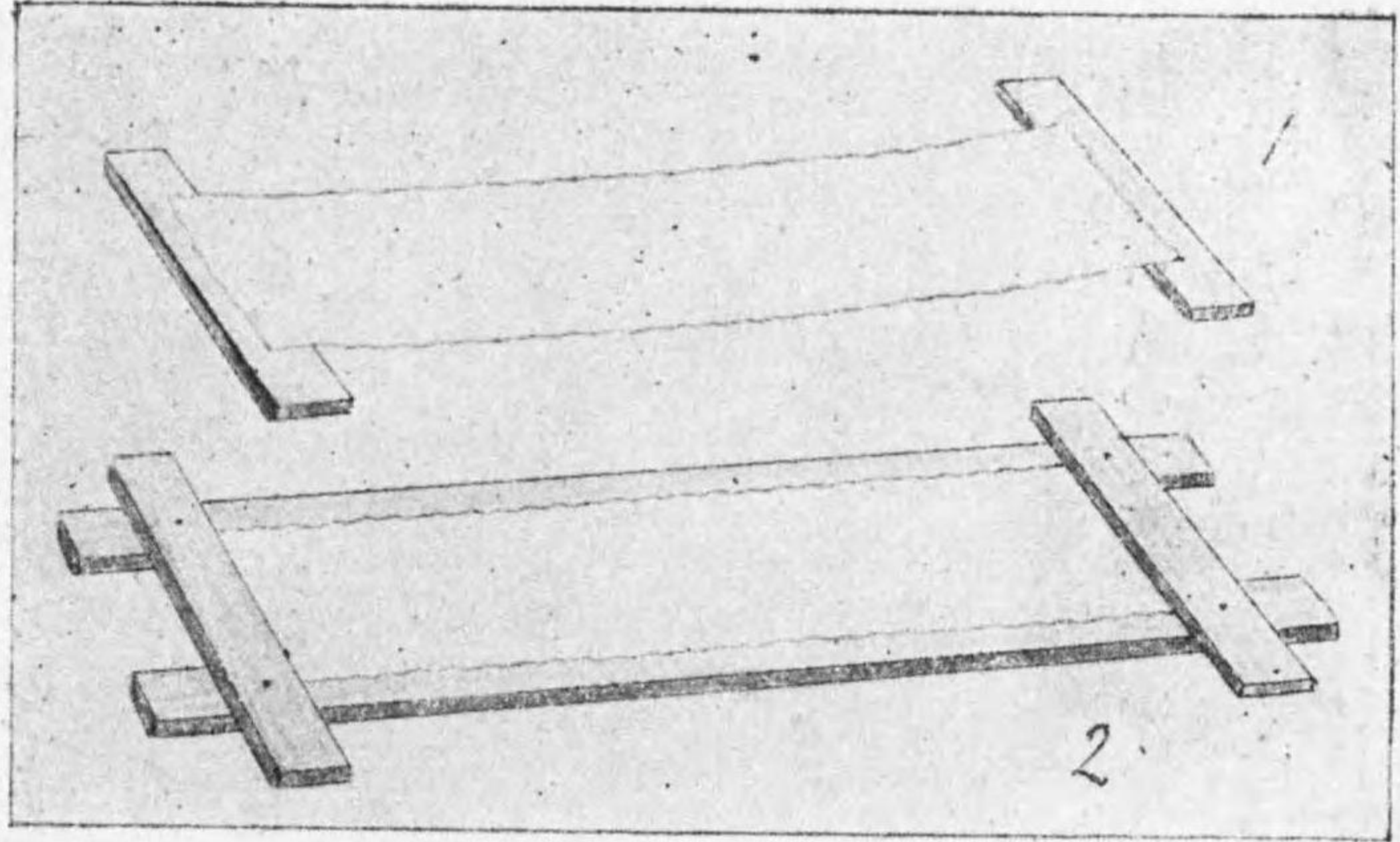
せ、四隅を釘にて止めるのです。此組み合せ方は、私が平生行つて居る方法を、有のまゝ述べたのでありますが、少し研究して見たら他により方法があるだらうと思ふから、皆さんが都合のよい様に、工夫して見るがよいのです。



組み合せ枠一其

併し此組み合せた枠は、表面にも裏面へも、枠の一部が凸出して居るから、畫を描くに非常

に描き悪いものです。だから止むを得ないもの、外は、之れは用ひない方がよい。敷板 大きなものを描く時、これを畫の上に敷き、これに坐つて描くもので、厚味六分、巾八寸、長さ三四尺位の板を滑らかに削り、板の周圍の角を落して

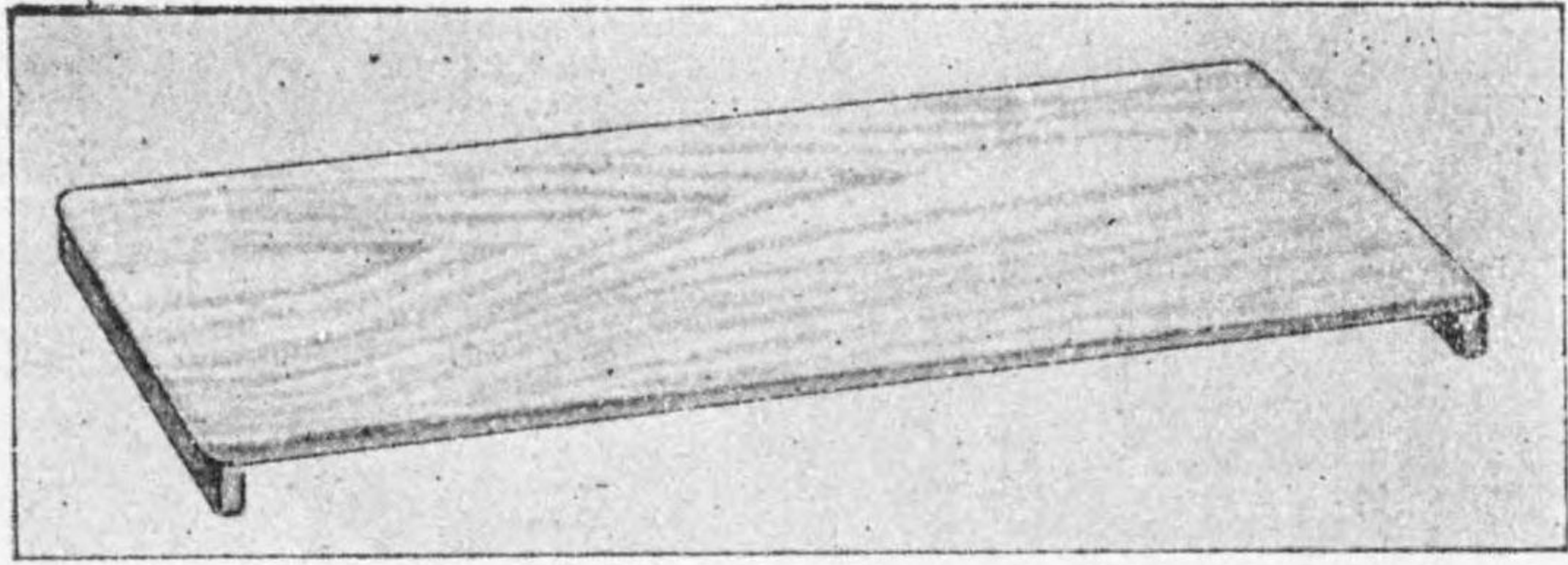


(方せ合み組) 二其枠せ合み組

丸味をつけ、之れに高さ一寸位の足をつけ、たものを、三枚位用意して置けば、大概の場合之れで間に合ふのです。併し巾廣いものを描く場合には、それに應じてもつと長いのを、製えねばなりません。

假張 假張は鳥子紙や畫仙紙などに、密畫を描く時、これに水張りして描くに用ふるので、初學時代には紙に描く場合が多いから、一つだけは是非製えて置かねばなりません。

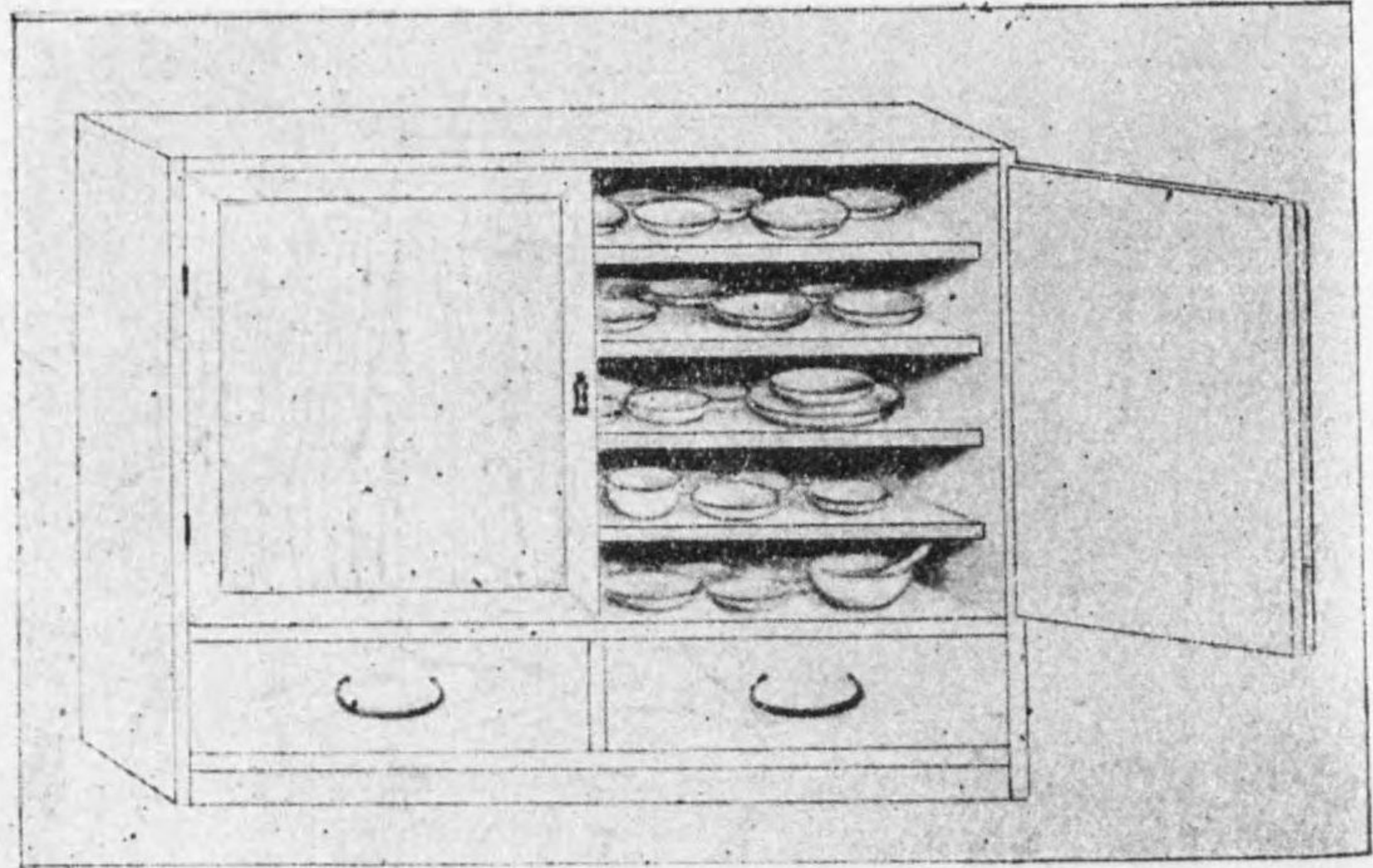
これを製えるには、古襖を一枚買つて來て、紙質のよい日本紙を以て、三重位に其



日本畫の用具

板 敷

表面を張りつぶし、其上から生澁を引くので、斯うして作られた假張は板のやうになつて、畫板の代りにも、用ひられるのです。



櫛 皿

皿棚 皿棚と云つて、確つたものがあるわけでもありませんが、日本畫を描くには、繪具を一つく皿に溶き、使つたあとはそのまま保存して置くのが多いから、埃の入らぬやうに藏つて置かねばなりません。それには、どうしても圖の様な棚が必要です。此様なものを一つ製えて置くと、皿の出し入れにも便利だし、其他繪具などを一纏めに藏つて置くにも、大層都合がよいのです。

繪絹其他畫を描く材料種々

日本畫を描くに必要な道具は、前項に於て略説き盡しました。こんどは、日本畫をかく紙や、絹等に就て其一通りを述べませう。

繪絹 繪絹は一挺樋、二挺樋、三挺樋などの種類があります。二挺樋は一挺樋より地質が厚く、従つて品がよく、一般に一番多く用ひられます。又三挺樋は二挺樋より、もつと良くなりますが、これは展覽會の出品畫を描く場合か、又は大家が平生用ふる位で、値段が高いから、一般は二挺樋程用ひられません。

絹の幅は、一尺巾、一尺三寸巾、一尺五寸巾、一尺八寸巾、二尺巾、二尺三寸巾、二尺五寸巾、三尺巾、三尺三寸巾、三尺五寸巾、四尺巾、五尺巾、六尺巾などに分れて居ますが、注文によつては、八尺巾でも一丈巾でも製えて呉れるので

す。又専門語では、此繪絹の一尺巾から、一尺八寸巾までを略して、尺巾・尺三・尺五・尺八など、云ひ、繪絹の事を絹本とも云ひます。

絹絹 一名純本と云ひ、羽二重に似た光澤ある純白の絹で、南畫又は書を描くに用ひます。

唐紙 白色、または淡黄色をした、極めて質のもろい紙ですが、附立にて淡彩畫を描くには、これが一番良いので、一般に多く用ひられます。幅二尺立四尺三寸、一枚七錢位です。之れに畫を描くには、豎に半截して描く場合が多いのですが、此半截したものを、「半折」といふのです。

畫仙紙 紙質唐紙に似てこれよりも薄く、色は白色です。唐紙のやうに附立にて描くに用ひますが、繪具がにじみ出て、初學者には描き悪いものです。併し此れに裏打をして礬水引をしたものは、密畫を描くによいので、初學者は、絹地へ描く前、これに密畫を描いて、稽古をするに用ひます。紙の大きさは大・中・小の三

種ありますが、小の大きさは唐紙全紙の寸法に略等しく、中・大と上に行くに従つて、巾も立も、少しづつ大きくなつてゐます。

鳥子紙 きめの細かい、幾分黄味を帯びた上品な紙で、密畫を描くに適し、又屏風を紙で張るには、總て之れを用ひてあります。

此鳥子紙や、裏打をした畫箋紙へ繪を描くには、このまゝで描いては、繪具を塗つた時紙に皺が出来て、思ふやうに筆を運ばず事が出来ないから、假張へ水張りをして描くのです。其方法は、紙の裏の周縁に糊を付け、而して糊の部分を除けて全體に水を引き、それを假張へ重ねて、糊の部分程よく附着せしめ、今度は表面全部へ水を引き、そのまゝ部屋の一隅に置いて乾かし、水分が無くなつてから立かけて置くのです。

水張りをした紙を剝がす時は、竹篋を紙の裏へ差し込み、紙の周圍を一めぐり掬ふと、わけなく剝がれますが、餘り強い糊だと、此時紙を破る恐れがあるから

糊は弱いのを^{もち}用ひ、又竹筥を^{さし込}込め、糊をつける時五分ばかり^{のこ}残して置くと、^{はが}剝すに都合がよいのです。

屏風 屏風には、金屏風、銀屏風、絹張りのもの、鳥子張りのもの等があり、形には、二曲と、四曲と、六曲と、八曲と、十曲など色々ですが、一番多く用ひられるは二曲と六曲です。

金屏風には鳥子張りに金箔を^お押したものの、絹張りに箔を^お押したものの、又は裏箔と云つて、絹の裏から箔を^お押したの等があります。この裏箔といふのは、金が絹を透して見ゆるので、ケバ／＼しい色^{いろ}を^は発せず、^{おち}落ついて大層上品に見えます。

銀屏風は金箔の代りに銀箔を用ひただけで、金屏風と變りがありませんが、銀は金と違つて、^や焼けて黒く變色するので、絹張りの上や、裏箔などえは餘り用ひられません。

金屏風や銀屏風へ畫を描く事は、餘程上達してからでないといふと失敗する事がある

から、手を出しては不可ませんが、併し自信がついたら、此様なものへも描いて見る事です。之れに畫を描くには、墨畫の山水などでは必要もありませんが、線を用ひた密畫の場合には、白墨を以て草稿を寫し取り、それを土臺にして描くのです。此白墨は、畫仙紙などへ草稿を寫し（此方法は「繪を作る順序」の項へ述べてある）取るに、木炭を用ふると同じわけですから、白墨の上へ墨を入れたら、^は羽箆にてこれを拂ひ落すのです。

又金銀屏風へは、墨以外の水繪具を用ゐては、繪具が乗らないから、岩繪具や胡粉を加へた水繪具類、又は泥繪具を用ひ、調子の工合など、絹や紙などは餘程違ふ所があるから、注意をしなければなりません。それで初めて金屏風へ描く場合には、金短冊や金色紙などへ、試した上で描いて見ると、失敗するやうな事はありません。

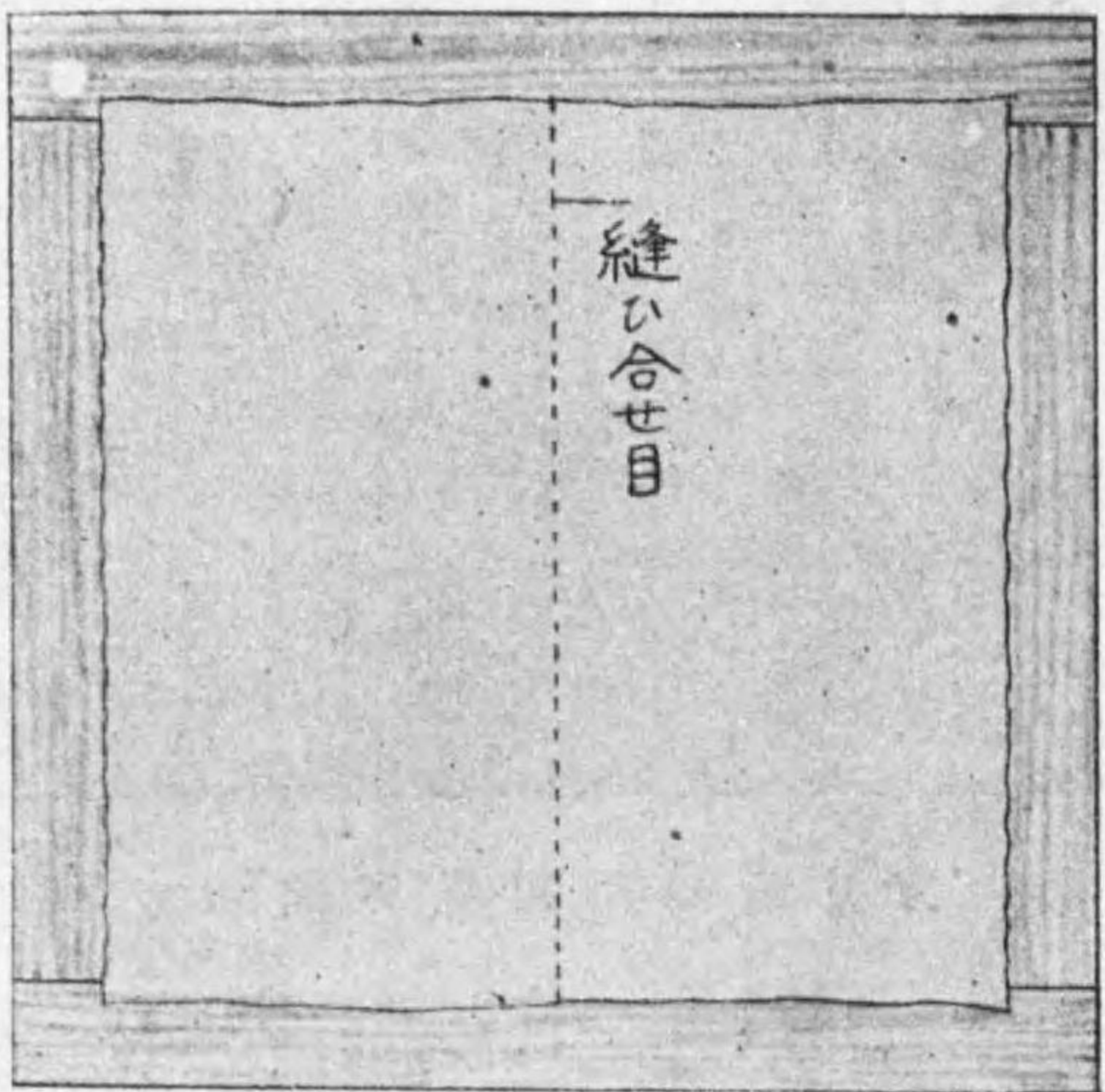
屏風の額仕立 あとで屏風に仕立てるつもりで絹地へ畫を描くには、二曲屏

風の場合には必ず二枚の絹を縫ひ合せ、四曲ならば四枚、六曲ならば六枚、八曲には八枚、十曲には十枚を合はせるのです。そして豫め絹の寸法を考慮し、それによつて寸法を定めるのがよいのです。例へば五尺巾ある二曲屏風の豫定ならば、二尺五寸巾の絹を二枚、縫ひ合せるのが適當であるやうに思はれますが、縫ひ合せ目と張り代とを各五分ほど取られるから、全體に於て幅が二寸だけ狭められ、四尺八寸幅となるので、二尺五寸巾二枚では合はないことになるから、此邊間違ひのない様にしなければなりません。

絹を縫ひ合はせるには、白の絹糸を以て手縫ひにするもよいけれど、手縫ひでは針の目が不揃いで、見苦しいものですから、ミシンで縫ふたのがよいのです。縫ひ合せた繪を枠へ張るには、二曲屏風ならば其縫ひ目が枠の中央に當るやうにして、上下の縫ひ目の所から張りつけて行くのです。

又六曲屏風の場合には、縫ひ合せた糸と糸との距離をキチンと揃え、枠にも縫ひ目の當る箇所に印をつけ置き、これは一方から張りつけて行くのです。

此外八曲でも十曲でも、屏風は凡て此様な方法を用ふるのです。



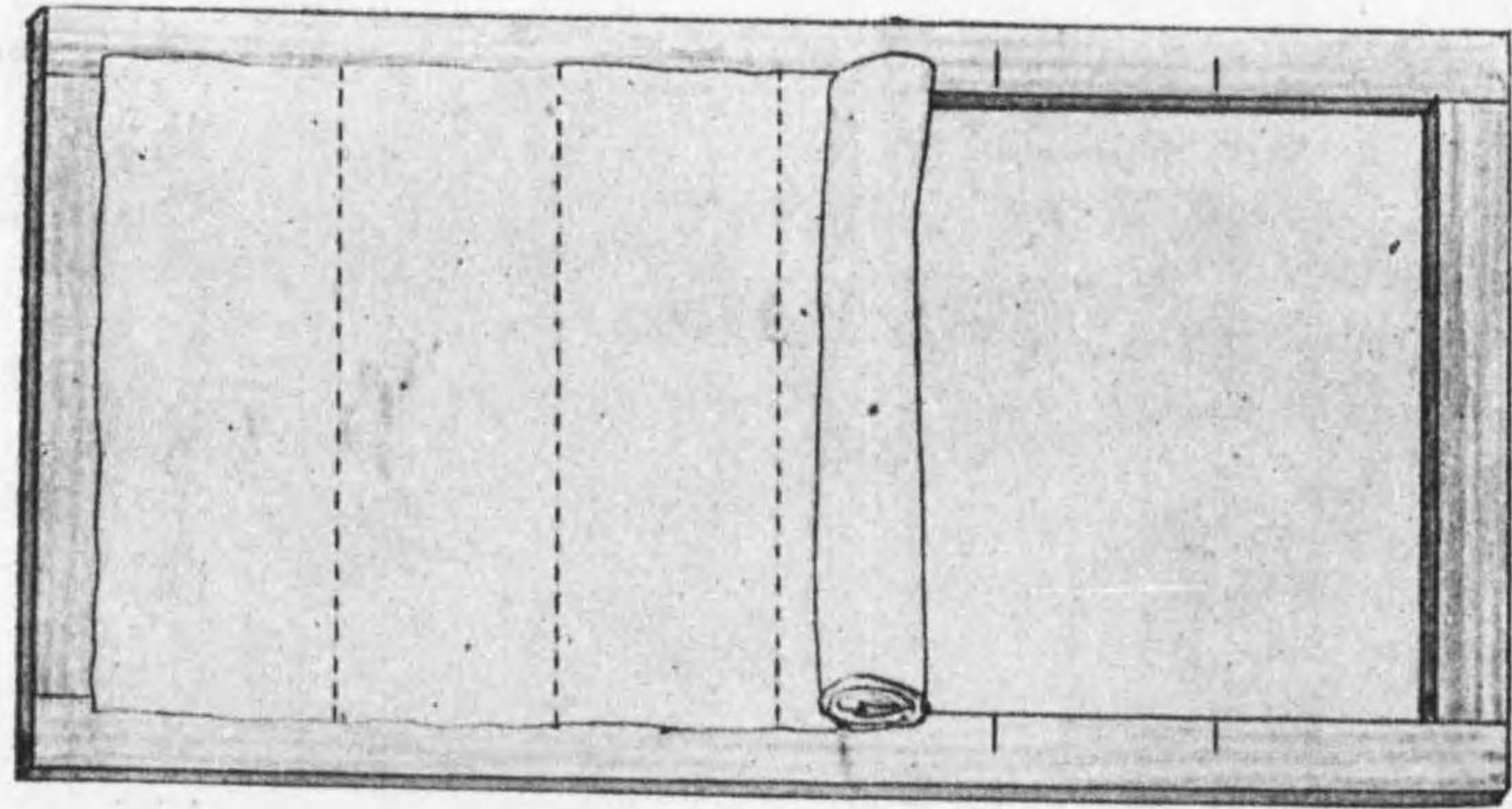
二曲屏風の絹用張り方

額 額は鳥の子紙で張つたものへは仕立てたまふ描く場合が多いけれど、絹張りの時は、描いてから仕立てるのです。寸法などは別に確つては居ない様ですが、欄間にかけるものは、幅は堅の三倍位あるを定則とされてゐる様です。併し壁に釣す額は、形も少々丸や四角などが多いのです。

衝立 衝立に畫を描くのは、屏風、

額などと變りがありません。

繪料其他畫を描く材料種々



六曲屏風用絹の張方

色紙 色紙は唐紙、畫仙紙、鳥子紙、絹、金銀箔、裏箔などにて製られ、長方形をした板やうのもので、風雅な略畫を描くに用ひられます。

短冊 短冊は大小一定してゐませんが、普通立一尺、巾三寸位で、材料は色紙と同じです。畫帖 之れは重に唐紙、畫仙紙、絹などにて製られ、附立にて略畫を描くに適します。

板 板へ畫を描くには、薄い礬水引をして描くのです。これも金屏風などの様に、墨又は、泥繪具、岩繪具等を用ひたがよいのです。

日本畫の繪具

日本畫に用ふる繪具は、百種以上もありませんが、此中には、同じ種類のもものが澤山あつて、用ひなくて済むものも少なくないから、一通り求めたら、あとは必要に応じてポツ／＼求むればよいのです。左に其大體を擧げて見ませう。

青色の部

紺青、群青、薄群青、白群青、藍。

綠色の部

綠青（青一番、青二番、青三番、青小三番、青小一番、青三番）白綠青、葉綠、草綠青。

黄色の部

日本畫の繪具

雌黄、黄土、黄綠青、石黄。

赤色の部

朱（赤口、中口、黄口）朱土、丹、洋紅、臘脂、岩朱。

褐色の部

岱赭、茶綠青。

白色の部

胡粉

此外群青と綠青とを混じた群綠青、白群青と白綠青とを混じた茶白綠、其
他水晶末、大理石末、瑪瑙末、珊瑚末、雲母泥、金泥、銀泥など頗る多數です
紺青 これは群青石と云ふ礦石を砕いて、砂ほどの細末にしたもので、濃い瑠
瑠色をしてゐます。

群青 紺青より心持ち砂目が小さく、従つて色も幾分明るいのです。

薄群青 群青より又細やかで、且つ鮮やかです。

白群青 薄群青より一層細かて粉末になつて居り、色は淡い空色です。

以上は同質の礦石を以て、作られたものでありますが、色が濃かつたり淡かつ
たりするのは、分子の大小によつて違つて來るのです。また此繪具は、日本繪具
の中で一番高價なものでありまして、一兩目（四匁）八圓です。併し販賣するには、
一匁づゝ小賣にしても呉れます。尙之等の繪具は高價なものであるから、初學時
代には、一兩目二圓位の、模造品を代用すればよいのです。

藍 植物の藍から製したものであつて、棒状を爲した水繪具で、價も頗る安く、
一匁形二十五錢位です。

綠青 一名岩綠とも云ひます。孔雀石と稱する礦石から製せられた、鮮かな
綠色です。群青と同じく、分子の大小によつて色の濃淡があり、色の順序は、
賣る店によつて多少違ふ所がありますが、青一番、青二番、青三番、青小三番、

白二番、白三番、白緑青と分けられ、青一番は最も粗くして色濃く、二、三となるに従つて分子が細かて、色も淡く、白二番と三番は一層細かて稍白色を帯び、白緑青は白群青に似た粉末で、著しく白色を帯びて居るのです。

葉緑青 黒ずんだ緑色で、眞夏の青葉の色と殆んど變りません。分子の大きさは緑青の青一番位です。

若葉緑青 葉緑より分子が小さく、春の若葉の色そのまゝです。

雌黄 植物の樹脂から製したもので、徑一寸位の圓筒状をした塊です。色は赤味を帯びた黄色にて、水に溶くと明るい黄色となります。

黄緑青 礫石から製した輝かしい黄色で、緑青のやうな細末で、これも番號によつて、濃淡の度合が分れてゐます。

黄土 濃淡の度合によつて二三種に分かれて居ますが、何れも卵黄色の繪具で、不整形をした不透明の繪具です。此類の繪具を専門語では、土繪具又は泥繪具と

云つてゐます。

石黄 薊かな黄色の繪具で、黄土と同じく不透明色です。

朱 朱は赤口、中口、黄口の三種に分れて居ますが、文字の通り赤口は最も赤く、黄口はやゝ黄味を帯び、中口は其中間色です。

朱土 暗赤色をした不透明の繪具です。

丹 これは黄赤色の繪具で、朱土と同じく不透明です。

洋紅 眞紅にして透明な粉末繪具ですが、棒状に固めたのもあります。

猩膾脂 これは紅蟲と稱する虫から製したものださうですが、粉末にしたものを綿に浸して、乾かしたものです。使用法は「繪具の溶き方」の項へ述べてあります。

岩朱 礦物から製した朱色で、質の粗いもの細かいものによつて、濃淡があります。

岱赭 礦物から製した赤赭色の繪具で、棒になつたものと粉末とがあります。

茶緑青 これも礦物から製したもので、粉末と細末とがあり、色の著しく

黒味を帯びたもの、赤味を帯びたもの、又は其中間色のもの等頗る多數ですが、此中から五六色だけ、必要なものを買へばよいのです。

群緑青 群青と緑青とを混ぜたもので、濃口と薄口とがあります。

茶白緑青 白群青と白緑青とを混ぜたもので、番號によつて濃淡があります。

ます。

金茶緑青 金水晶とも云ひ、水晶末と茶緑青とを混ぜたやうな色で、二三種類

類あります。

黒群青 礦石から製したもので、漆黒のもの、稍紺色を帯びたもの等數種あり

ます。

珊瑚末 珊瑚を粉にしたもので、番號によつて五種に分けてあり、一番目のは

淡い朱色を呈し、五番目のは桃色をしてゐます。

瑪瑙末 瑪瑙を粉にしたもので、これも五種に分れてゐます。

水晶末 水晶を粉にしたもので、純白色です。目の細かいもの荒いもの等、

五種位はあります。

大理石末 大理石を粉にしたもので、これも白色です。

雲母泥 一名キラと云ひます。礦物から製したもので、色は光澤ある暗灰色

です。

金泥 金を粉末にしたもので、焼金泥、常色金泥、水色金泥の三色に分れて

あります。焼金泥は純金で混りものがないから、色は少し赤味を帯び、常色金泥は少し銀を混ぜてあるから、幾分青味があり、それで青金とも云ふのです。水色

金泥は常色金泥より、一層銀を混へてあるから、前者に比べると餘程白いので

銀泥 銀を粉末にしたものです。

金箔 純金を延べて、極めて薄い紙様に作られたもので、三寸八分角、四寸二分角等に切つてあります。

金砂子 金箔の屑、と云つても、必ずしも屑と限つた事はありませんが、金箔を揉んで粉にして使ふのですから、金箔の断ち屑でも同じ事です。これは金箔と共に箔屋に賣つてゐます。

銀箔 銀を箔にしたもので、金箔と同形です。

胡粉 介殼から製へたものであつて、不透明の白色で、片板形の粒になつたのが用ふるによく、此繪具は日本畫では、最も必要な繪具であつて、また溶くのに一番むづかしいものです。

墨 墨の事は前にも一寸述べましたが、墨は胡粉と同じく、日本畫では一番大切なものですから、少し位は高くとも、初め求める時、良い品を買つて置いたが

よいのです。墨には和墨と唐墨とがありますが、墨色は何と云つても、品質がよくて年數を経た、唐墨が一番よいのです。併し和墨でも上製になると、なかく立派なものがあるから、どちらにしても、信用ある大きな店から求めたがよいのです。

また日本繪具の中には、模造品が澤山あつて、値段も非常に安くなつて居るから、紙類へ稽古に描くものであつたら、此模造品を用いたがよいのです。

尙日本繪具は、一つ一つ紙の袋へ入れてあるので、出入れに非常に面倒であり、一目に色の總てを見る事が出来ないから、圖の様な小さな硝子管の中へ入れ、管の表へ品名を附して置くと大層便利です。又此硝子管を仕舞つて置くのに、十二個乃至二十個を藏める、體裁よき箱がありますが、これも便利なものです。

日本繪具の中で、性質の似寄つたものを一劃して、岩繪具・水繪具・土繪具など云ひますが、岩繪具とは群青や綠青のやうな、礦物質の繪具の事を云ひ、水繪

子供に描ける日本畫の描き方

六〇

具とは藍や雌黄や岱赭や洋紅のやうな、透明色の繪具の事を云ひ、土繪具は、黄

土や、朱土のやうな、不透明の繪具を云ふのです。

それから初學者の爲めに、之等の材料を求めると都

合よき、信用ある販賣店を紹介しませう。

繪具、筆、皿其他日本畫用具の一式

東京市日本橋區久松町三二

杉山繪具店

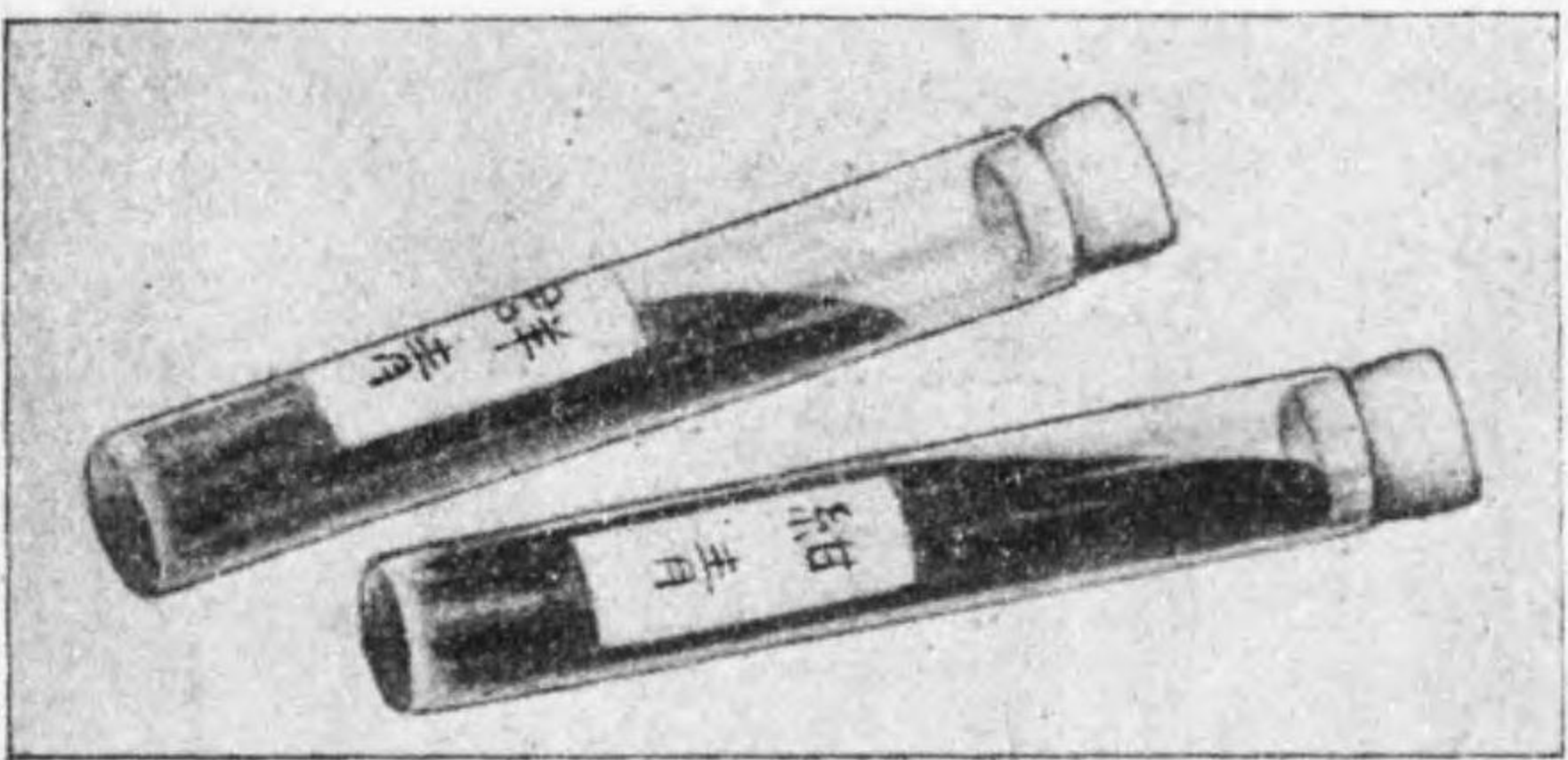
京都市烏丸通二條南入

石田放光堂

繪絹、烏子紙、畫仙紙、敷紙、短冊其他

東京市日本橋區

榛原商店



繪具入れ

京都市上京區烏丸通二條南入

原田繪絹商店

岐阜縣羽島郡上羽栗村伏屋

多和田兄弟商會

東京や京都には此外多數ありますが、之等の店は永年斯業に従事して、最も信用ある店ですから、地方の人々で、思はしく材料を得られない時は、之等の店へ商品目録を請求し、それによつて注文すれば、思ふ品物がわけなく得られる、また繪絹では、多和田兄弟商會が最も大量に生産をするから、他店に比して頗る安價です。

繪具の溶き方

膠水の作り方 日本畫では、繪具を溶いたり礬水を作つたりするのに、凡て膠水を用ふるのであるから、繪具の溶き方を知る前に、膠水の作り方を知つて置かねばなりません。

膠を煮るには先づ土鍋の中に清水を入れ、此中へ必要なだけ膠を入れ、暫くつけ置くといふ加減に膠がふやけて來ます。さうしたらば之れを火にかけて、煮ながら時々竹の箸にて掻きまわし、充分溶け終つたら火から下ろし、白布にて漉して別の器に入れ、塵の入らぬやうにして用ふるのです。膠はどんな良い膠でも、何程か糟が出るものですから、使用する時は必らず漉すやうにせねばなりません。でないといふ、胡粉のやうなものを溶く時、糟がある爲め閉口する事があります。

欠

欠

尙あとして述べると重複するから、序にこゝへ述べて置きますが、此外、群青、薄群青、緑青の青一番から白三番までと、黄緑青、茶緑青、水晶末、珊瑚末、瑠末のやうな分子の粗いものは、總て此紺青と同じ溶き方をするのです。

又之等の繪具を使用した残りは、其まゝ藏つて置いてはいけません。必らず、「水飛」して置くのです。「水飛」とは、使つた繪具の中へ温湯を入れ、それに用ひた筆を以てよく攪きませ、暫く静止して繪具を沈澱させ、その上水を棄てるのです。此様な事を二三回繰り返すと、膠氣が無くなつて了ふから、繪具が乾いても凝る事がなく、次に使用する時大層使ひよいのです。若し此種の繪具を使つたまゝ、長く放棄して置くと、他日再び用ふる時、膠の爲めに凝固つた繪具は、使へない事が多いのです。

それから極彩色をする時などは、此種の繪具を幾種も同時に用ふる事がありませんが、筆は別々に用ひるやうにしないと、繪具と繪具と混ざる事がありません。

白群青 これは灰の様な極めて細かな粉末であるから、溶き方は胡粉のやうな溶き方をするのですが、胡粉のやうに團子に練り固める必要はありません。膠水と繪具とが、手頃に練り合はさるればよいのです。

其他白緑や茶白緑のやうなものも、之れと同じ溶き方をして、使つた後は必ず水飛して置くのですが、只此種の繪具は、分子が細かい爲め直ぐに沈澱しないから、暫く置いて、繪具が全く沈んだ上で、上水をこぼさないで、繪具も共に流れ出る事があります。

黄土 胡粉と同じ溶き方をしますが、胡粉程念を入れなくともよい。其他朱土・丹なども、これと同じです。

石黄 これは圖案に使ふ繪具で、本繪には餘り用ひませんが、黄色の極めて強烈なものを塗るに必要です。これを溶くには深皿へ入れ、溶きたての稍濃い膠水を加へ、乳棒にて磨り、程よく溶けたらば水を加へ、適當に薄めて用ふるのです。

狸臙脂 今は狸臙脂の代りに殆んど洋紅を用ふるので、これを用ふる事は滅多にありませんが、序だから述べませう。これは綿に含ませるので、使用する時は必要なだけ切つて皿に入れ、熱湯をそそぎ、竹の箸にて繪具をしぼり出した上で綿を取り出し、其まゝ藥罐にかけて湯煎じにするのです。斯うして水氣を蒸發し盡した繪具は、紅皿の紅のやうに、皿に付いて居るから、使用する時は必要なだけ、水を含ませた筆の尖にて取るのです。

黄臙脂 淡い紫色の粉末繪具で、溶き方は白緑または茶白緑など、同じです。

藍と洋紅 共に丸い棒に製してあるから、皿の中に水を二三滴落して、靜かに磨ればよいのです。又洋紅には、粉末になつたのもありますが、品質は同じです。**岱諸** これも棒になつて居るから藍や洋紅と同じ溶き方をしますが、只この繪具は、どんな精製したものでも糟が出るから、其糟は洗滌せしめて、上澄を用ふ

るのです。

俗緒は質が堅くて寒い時など、なか／＼溶き悪いものです。それでこんな時は、皿の底を少し温めて磨ると、よく溶けるものです。

雌黄 雌黄は少しばかり溶かすには、筆に水を含ませ、筆の尖にて磨りながら溶すか、又は藍を磨るやうに、皿に磨りながら溶すもよいのです。併し多量に溶く場合には、面倒でも乳鉢に入れて粉末となし、それを薄い膠水にて練り固めたものを、溶くのがよいのです。これが大きな塊りを皿で磨ると、一面に泡が立つて、塗るに工合が悪いものです。

朱 朱は白群青と同じ溶き方をしますが、これは初めから多量に膠水を加へると、繪具の粒が泡のやうに浮び、大層溶きにくいものです。それで初め指尖にて繪具を充分磨り潰して置いて、膠水を少しづつ加へて溶くのです。

雲母泥 紺青などと同じ溶き方をしますが、膠水は濃いのをを用ひねばなりません。

ん。

金泥 朱と同じ溶き方をしますが、金は磨けば磨くだけ光りを發するものであるから、胡粉を溶くやうに充分指尖にて、練り上げた上で溶いたがよいのです。

銀泥 溶き方は金泥と同じです。

金箔と銀箔の押し方 金箔や銀箔は、紙より薄いペラ／＼したもので、これはどんな微かな空氣の流動にも動いて、そのままではとても使へないから、あかした上で使ふのです。あかすとは、一枚の白紙にこれを附着させる事で、これは馴



馬棟

れないと旨く行かないから、經師屋へ頼んであかして貰ふがよい。併し自分でやつて見やうと思ふには、先づ部屋の中を密閉して、空氣の流動を防ぎ、滑らかな板の上に一枚の白紙(箔の大きさより二分位づつ、大きい四角な紙)を置き馬棟(馬棟とは圖の様な丸い板を箒にて包んだもの、こ

れは木版を擽るに用ふるものです。油を着け、油を僅かばかり綿に滲ませたもので、軽く拭けばよいのです。それにて紙面を擦り、其紙の上へ箔を置き、竹の箸にて箔の上から軽く横に撫で、かうして紙面へ附着させるのです。箸にて撫でる時は、どうかすると箔を破る事がありますから、充分注意をし、又箔は紙の中央に置き、周囲が二分づゝあくやうにする、これは箔を押す時、指をかける餘白を作つて置くのです。

前にも述べたやうに、箔に殆んど風のない様な所でも、ゆらく動くものですから、あかす時は自分の息づかいにも注意して、一切風を立てぬやうにしなければなりません。それで箔をあかす時は、夏の暑い頃でも、部屋中を締め切つて置くので、蒸される様な暑さで溜らない程ですが、どうも仕方ありません。斯うしてあかし終つた箔は乾いた板の上に並べるのです。

あかした箔を畫面へ押すには、押すべき箇所かしよに淡い膠水を引き、箔の一方を手

に持ち、一方を箸にて軽く挟み、そこへ下ろして箸にて其上を撫て、靜かに紙をめぐると、膠水を引いた部分だけ、箔はそのまゝ畫面に残さるゝのです。

砂子の振り方 金や銀の砂子には、切箔と云つて一分角位のものを、斑らに振りかけたのや、砂のやうに細かいものを、暈した様に振りかけたもの等いろ／＼ですが、何れも竹筒の中へ入れて振りかけるのです。

この竹筒は、竹の切口に、極めて細かい金網を張つたものでありまして、此中へ箔の屑くず（箔押をした残りや、其他使用した箔の残りを集めたものを用ひてもよく、又箔屋から疵箔と云つて、疵物の箔を買つて用ひてもよい）を入れ、振子と云つて大きな筆の軸を、穂の近くから切つたのを、其上から入れ、棒切れにてコツ／＼筒を叩くと、筒の中にて振子が踊るので、それに壓せられた箔は金網の目を漉して、粉のやうになつて落ちるのです。此場合砂を撒く部分へは、箔押の時と同じやうに膠水を引き、室内を閉め切つて置く事を忘れてはなりません。

砂子を厚く重ねる場合には、前に振つたのが乾いてから羽箒にて掃き集め、再び膠水を引いて振りかけるのです。此様にして幾度も繰り返して行くと、どんなに厚い様にも、振りかける事が出来ます。尙羽箒にて掃き集めた箱は、筒の中へ入れ、再び使用してよいのです。

繪具の掛け合せと下塗

繪具と繪具とを混ぜ合わせるを、術語では「掛け合せ」と云ひます。此合せ方と名稱とは、是非知つて置かねばならぬ事ですから、其一通りを述べませう。

具 各種の繪具に胡粉を混ぜたのを、「具」と云ひます。具墨、朱の具、黄土の具など云ふのがそれです。凡て透明の水繪具でも、此具を混ざれば不透明となるから、色を厚く塗る場合には、多く具を混ざるのです。

具墨 胡粉の中に墨を加へたものを、墨の具とも云ひます。其混ぜ合せる分量は、濃墨の中へ少量の胡粉を投ずれば眞黒となり、胡粉の中に少しの墨を加へれば灰色となります。

朱の具 朱に胡粉を加へたもので、色は褪紅色です。

丹の具 丹に胡粉を加へたもの、金泥の下塗りなどをするに用ゐます。
洋紅の具 洋紅に胡粉を加へると桃色になり、これに藍を加へると紫となりま

黄土の具 黄土に胡粉を加へたもので、淡い玉子色をしてゐます。

岱赭の具 岱赭に胡粉を混ぜたもの、淡赭色です。

赭黄の具 黄土の具へ岱赭を加へたもの。

雌黄の具 雌黄に具を加へたもの、これに少量の岱赭を加へれば、氣持ちよき

クリーム色になります。

草の具 藍と雌黄とを混ぜた中へ、胡粉を加へたもの、草汁の具、又は草色の

具とも云ふのです。

艶墨 墨に膠水を混ぜたもので、光澤ある其墨色は、黒い漆を見るやうです。

藍墨 藍と墨とを混ぜたもの、これに胡粉を加へたものを、藍墨の具と云ひま

す。

岱赭墨 岱赭と墨とを混ぜたもの、これに胡粉を加へたものを、岱赭墨の具と

云ひます。

朱墨 朱に墨を加へたもの、古びた朱塗の建物などを描くによい。

臘脂墨 臘脂に墨を加へたもので、栗色をしてゐますが、これに具を加へると、

葡萄酒になります。併し今は臘脂の代りに、多く洋紅を用ふるのです。

黄草 黄色の勝つた草色、即ち藍と雌黄を混ぜるに、雌黄の分量を多くしたの

です。

又色によつては直接塗るでなく、一度下塗りをして、其上へ塗るものがありま

す。

紺青・群青・薄群青・白群青 下塗は藍又は墨。
 緑青 下塗は凡て草色。

繪具の掛け合せと下塗

群綠青 下塗は墨又は藍。

茶綠青 下塗は岱赭。

黄綠青 下塗雌黄又は草色。

金泥 下塗丹の具。

銀泥 下塗胡粉。

此下塗は必らずしも、此様に限られて居るわけのものでもありませんが、大體これによつて描いたならば、失敗する様な事はありません。

繪を作る順序

これまでの所で、日本畫に必要な用具と、繪具の溶き方と、簡単な描方の一通りを説いたので、皆さんは日本畫とはどんなものであるかを、大凡知る事が出来たでせう。併しまだ頭腦に滲み込まぬ所があつたら、再三讀み返して、充分解るやうにして置いて下さい。これだけのものが呑み込めて居ないと、あとの所を知るに困難だし、しかしこれだけのものが分つて居たら、あとの所を覺えるに都合がよいのです。

又これまでの所は面白くない話ばかりで、興味がなかつた事と思ひますが、日本畫を描く順序として、用具の名稱や、使用法や、必要な術語などを知つて置いて貰はないと、説明する上に不便であるから、止むを得ないのです。併しこれか

ら、本繪を描くに就てのみ説く事になるから、少しづつ、興味が湧いて來ませう。

小 下 圖

一枚の本繪を描くには、どういふ順序を辿るかと云ふに、それは人物でも、花鳥でも、風景でも、先づ描いて見たいと思ふものに就て、想を練り思を凝らすのです。例へば風景（日本畫では風景の事を山水と云ひますけれど）を描くとすれば、曾て遊んだ山や川や海などに思ひを寄せ、又は寫生帖を繙き、或は人の作品を見、この様にして、描かんとするものを思ひ浮かべたら、其大體の見取圖を小さく描いて見るのです。これを小下圖と云ひます。

此小下圖は附立描きの簡單な畫を描くには、其必要を認めませんが、極彩色のものなどを畫く場合は、初め小下圖を描き、それによつて草稿をつけ、それを土臺にして本繪を仕上げるのです。最も腕が上達して來ると、可なり複雑した繪を描くにも、こんな事をしないで、木炭にて大體を當り、そのまゝ仕上げて仕舞ふ

場合が多いのです。併し此様なまねをするのは、腕が出來た上でないと、とても満足に描けないのです。それで初學時代には、面倒ではあるが極彩色の畫を描く場合には、小下圖によつて草稿をつけ、これによつて描く事にすれば、過つやうな事もなく、又苦勞なしに描き上げる事が出來るのです。尤も何程腕達者なものでも、屏風のやうな大ものへ密なものを描くには、小下圖を描き、充分な草稿をつけ、それによつて仕上げるのです。

小下圖は一つの大作的縮小圖であり、又大作の土臺を作る見取圖であるから、之れを引き延した畫は、どの様なものへ用ふるかを念頭に置き、それに適應する形に描くのです。例へば堅長い掛物に用ふる畫か、又は幅廣い屏風かを確め、それを縮小した形の紙へ、描かなければなりません。

構 圖

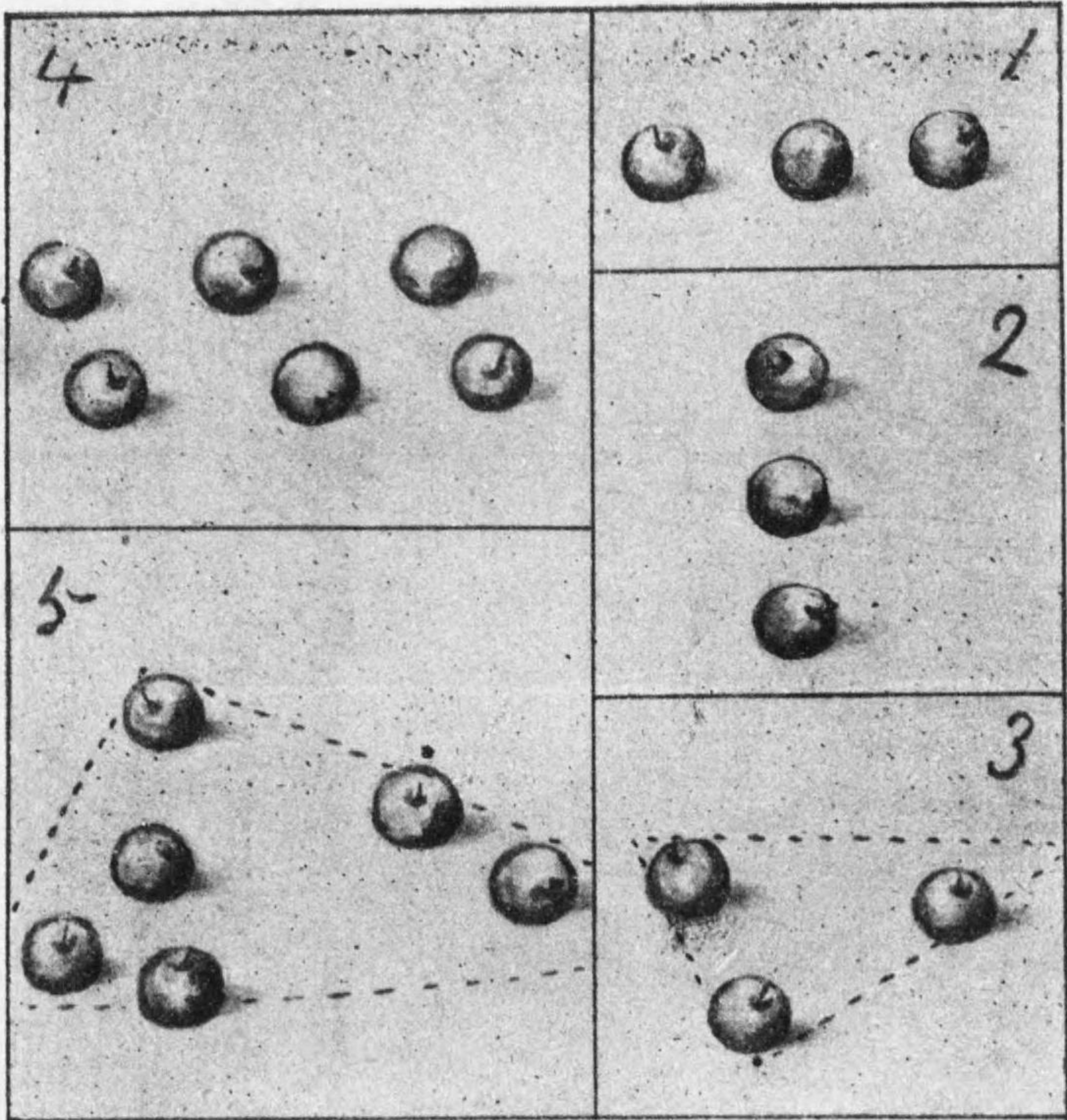
小下圖をつける場合、一番大切なものは構圖です。構圖とは、圖取りの事であ

りまして、描かれたものゝ形や色彩が、どんなによく出来てゐても、これが悪かつたら、それは畫としては落第です。此構圖の旨いのと拙いのは、其人の頭腦の働きのあつて、教ふべきものではありませんが、畫中の物を並べたり、取り入れたり、又は取り捨てたりする事は、大體教えて解る事ですから、此等に就て述べませう。

凡て物體を畫中に取入れ之れを並べるに、三角構圖法と云ふのがあります。例へば林檎の様なものを寫す場合、1や2の様な並べ方をしたのでは、少しの面白味もありませんが、3の様な並べ方をすると、變化があつて落ついて見ゆるのです。では六つの林檎を並べるには、4の如く並べるかと云ふに、此場合には5の様な並べ方をすると、大層よく見ゆるものです。これは此様な小數なものを描く時に限つたわけではありません。十のものも、二十のものも、乃至五十、百のものでも凡て此方則を用ひ、又人物や花鳥などを描くにもこれを用ふると、先づ無

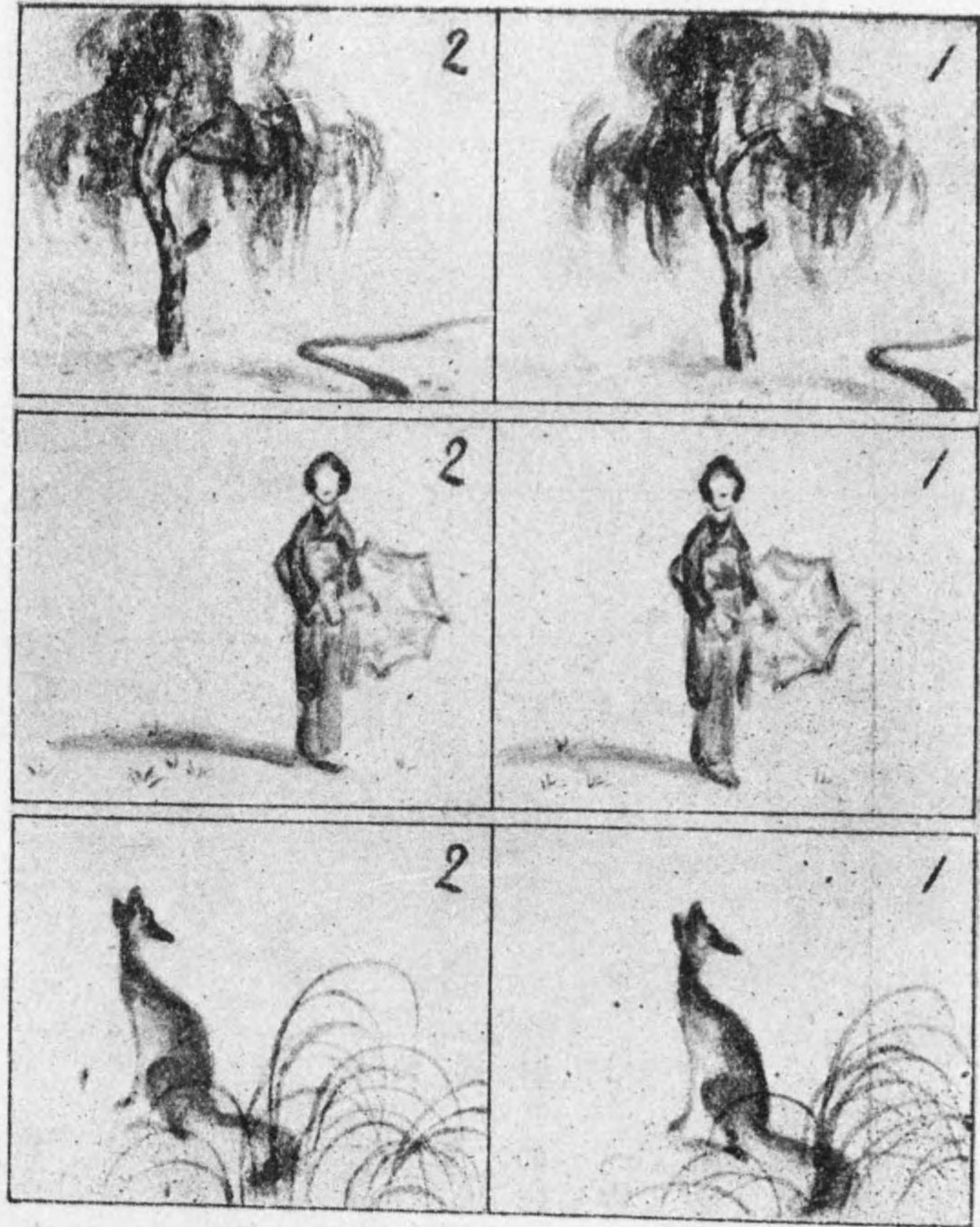
難に出来るものです。

又一つの繪の中には、必ず主眼となるべきものがあります。此主眼となるものは、必ず右か左へ寄せ、中央に取入れてはいけません。圖にある樹木や、人物や、動物に就て見ると分りませう、1



法圖構角三

繪を作る順序



位置の取り方

は凡て主眼物を中心にとり取れたもので、2は一方へ寄せたものです。1より2の方が落付きがあるてはありませんか。其他色彩

を施す上にも、此主眼物と、それに附随するものとは、違ふ所がなければなりません。それは同じ形をして、同じ美しさに見ゆる花が、同じ場所へ並べられてあつても、之れを畫とするには、主となるべきものと、附随するものとを程よく擦排するのです。

以上は昔から現代に至るまで、畫を描く上に傳へられた方則であつて、多くの人々が試みて來た事でありますから、この様な遣り方をして居れば間違ひはないのです。

併し近來は、西洋畫の影響を受けて、日本畫も畫風や構圖など、非常に變つて來ましたから、新しい試みを爲すものには、此様な構圖法は歓迎されません。果物などわざと無雜作に並べて描いたのや、圖の眞ん中へ一本の立木を描いたりして、喜んで居ますが、それでなか／＼面白いものがあるから、之れも一概に棄てたものではありません。

又これまでの日本畫では、人物の顔が後ろ向になつて居たり、首から下がなかつたりするのを、大層嫌つて居ましたが、西洋畫では平氣で之等を描いて居るので、近頃日本畫でも此様な描き方をするのを見受けるやうになりましたが、これは構圖の上から、止むを得ず此様な圖の取方をしなければならぬ場合は兎も角、日本畫では西洋畫とは趣が違ひ、殊に人物を描くに顔は主要なものであるから、顔は成べく、後ろ向きにならぬやうにし、肖像畫でない限り、首だけに留めない方がよい。

草稿のつけ方

小下圖が出来たら、それによつて草稿をつけます。草稿とは下描きの事でありまして、これは新聞紙などに用ひてある、ザラ紙を用ふるのです。先づ描くべき畫が幅二尺堅五尺のものとするれば、ザラ紙も其寸法通りに切つて用ふるのです。又若しも描くものが屏風であつたから、紙をつぎ合せて其屏風の廣さに作り、屏風

にある折れ目の所は、其寸法に合はせて線を引ひて置くのです。

紙の仕度が出来たら、それを假張にベウにて留め、小下圖を見ながら木炭を以て描くのです。此木炭で描く場合は確かな形が出来るまで、羽箒にて消しては描き直し、意に叶ふまでは幾度も描き直し、満足な形が出来たら、其木炭の上を墨にて描き、羽箒にて木炭を拂ひ落して了ふのです。これで草稿は出来たわけですが、墨を入れたあとで、まだ意に満たぬ所があつたら、今度はその上へ紙（紙は礬水引の薄美濃がよい）を當て、直し、而して此時も又、一度でうまく行かなかつたら、満足なものが出来るまで、何回でもやり直し、上から幾重も直した紙を張つて行くので、初學時代には草稿が幾重にも貼られて、厚くなる事があります。が、これはどんなに厚くなつても、満足な形さへ出来れば底ふ事はないのです。それから此草稿をつける場合、人物畫であつたら、下圖の形に應じて體や、顔や手足などの部分寫生をなし、此寫生によつて、草稿の人物を仕上げるやうにす

ると、むづかしい形でも樂に出來、且つ手足などに無理のない繪が出來ます。人物畫の中でも時代ものであつたら、場合によつてはモデルに假装をさせ、それによつて描く事もあります。これは展覽會へでも出品する時の事で、初學者がこんな眞似をする必要はありません。併し現代の風俗であつたら、親しい人にモデルになつて貰ふと、わけもなく出來るから、成べく實物寫生によつて得た方がよいのです。

誰しも小下圖を描く時は、其圖の仕上つた様子を頭腦に浮べ、彩色の工合など、ちやんと考へて置くものです。此草稿が出來上つたら、畫の主要な部分へ、考へて置いた通り、水繪具を以て大體の彩色をして見ると、それが参考になつて本式に描き上げる時、大層都合がよいのです。

草稿の繪を紙に寫すには

草稿が出來上つたら、本式に描く爲め、これを紙か絹へ寫し取らねばなりません。

んが、順序として、先づ、紙へ寫し取る方法を述べませう。

紙(鳥の子紙、畫仙紙など)へ畫を描くには、草稿と同形に切つた紙を假張に張ります。假張に張るには、紙の裏面の周縁五分巾位に淡い糊をつけ、その糊を除けて裏面全體に水を引き、裏面を假張に當て、糊の部分を程よく附着せしめ、今度は表面全體に水を引き、それをそのまま陰干にして置くと、水分が乾くに從つて、紙は緊張して、全く乾き終れば平らな板のやうになるのです。また此極彩色に用ふる紙は、鳥子紙又は裏打をした畫仙紙に限りますが、普通稽古する時は、畫仙紙の方がよいのです。

假張の紙が乾いてから、これに草稿を寫すには、草稿の上に白雲紙(又は薄美濃をつぎ合はせたものでもよろし)を當て、之を寫し抜き、寫した繪の裏面の線の總てへ木炭を塗り、これを假張の紙へ重ね、位置が變らぬやうに四隅をベウにて留め、鉛筆を以て線のすべてをなぞり、なぞり終つたら靜かにそれを剝がすと、

假張の紙面へ草稿の畫の通りのものが、木炭にて描かれて残るのです。こゝまで出来たら、今度は其木炭の上を薄墨にて描き、描き終つて墨が乾いてから、軽く其上を羽帚にて拂ふと、木炭は悉く拂はれて、薄墨にて線描きをした畫が、草稿の畫そのまま寫し出されるのです。

初め鉛筆にて草稿をなぞる場合には、筆を軽く持たないと、紙の表面を凹ます事があり、又薄墨にて木炭の上を描く時は、充分入念に描かないと、これで描いたものは、後で直す事は出来ないから、一度描き損じをしたら、描き損じのまゝ仕上げるか、紙を張り代へて新たに描き直すかしなければならぬのです。

紙へ描くには此様な手数があつて、面倒くさいものですが、馴れるとさほど苦にもならないから、初學時代には、幾枚も紙へ描いて見るがよいのです。

草稿の繪を絹へ寫すには

礬水引をした絹の下へ草稿を敷き、薄墨にて敷寫しにするのです。此時枠の板

の厚みて、絹と草稿との間が透いて居て、草稿の線がはつきりしない時は、草稿の下へ物を敷き、枠の高さと同じ高さになると、下の繪がはつきりして寫しよいのです。

之れで小下圖をつけて草稿を作り、其草稿を絹や紙へ寫すまでの事がわかりましたね、これが解つたら、今度は彩色をするのですが、それは項を變えて、「繪具の塗り方」の所へ、精しく述べる事にしませう。

繪具の塗り方

地隈

草稿の繪を絹や紙へ寫し取つたら、先づこれに地隈をとります。地隈とは、背景の色を塗ること、日本畫の多くは、先づ背景となるべき主要の色を塗り、これを終えた後畫面の彩色を始めるのです。地隈をとるには、畫面全體を塗ると、人物・動物・樹木其他物體を除けて塗る事がありますが、何れにしても、畫によつて、其畫に適した方法をとればよいのです。と云つても、其適した方法が、初學時代には分らぬものであるから、實際について、これを述べる事にしませう。こゝに掲げた「秋の庭」と題する畫は、これはスケッチをして草稿をつけたものです。畫は寫眞版であつて、色彩が分らないけれど——口繪に此顔の部分だけ



三色版にて描いてあるからそれを参考に
庭として、

あとは想像して下さ

い——さてこれを描く前に考へねばならぬのは、これをどんなに仕上げたらよいかとらふことです。それには先づ雁來紅の色づく頃から考へねばなりません。雁

來紅がこれ位成長して、これ位色づくのは、十月か十一月の初めてであつて、小春日のとても快よい頃です。それで其心持ちを現はす爲めに、背景の色を赭黄の具のやうなもので塗つたがよいのです。それは此色が一番此頃の氣候を現はすにふさはしい色であるからです。而して此背景を塗るには、どんな方法を用ひるかといふに、先づ必要な丈け繪具を溶き、羽箒を以て畫面の塵を拂ひ、大刷毛にたつぷり水を含ませ、まわりの糊をつけた部分をさけて、畫面全體へ水を引きます。この水を引く時、引き残した所があると、其箇所だけムラになつて、直さうにも直せなくなるから、よく注意して、引き残さぬやうにせねばなりません。斯うして全體に残る隈なく水を引ひたならば、その水の乾かぬ内に、こんどは、別の刷毛か、又はその刷毛の水を切つて、繪の具をたつぷり含ませ、水を引く時と同じに、全體へ引くのです。

此地隈をとる時、全體へ淡く塗るには、初めから其つもりで、繪具を少くし、

また、濃く塗る場合は、繪の具を多く用ふると、一回だけで大概の濃いさに達しますが、尙一入濃くするには、一回塗つたものが充分乾いてから、再び水を引き繪具を塗るのです。かうして幾回も色をかけて行く事は、大層面倒な事に思はれますが、此方法をとれば、少しもムラが出ないで綺麗に出来るから、初心者はこの方法をとつたがよいのです。

又ものによつては、上だけ濃くして、下方を淡くする事があり、或は此反對の方法をとる事もあります。此様な時は、濃い部分から、次第に繪具を薄めて行き終いには繪具を用ひず、水刷毛にて終いまで、畫面をなぞりゆけばよいのです。尙此圖では地面にも隈取りをしてありますが、これは墨の具（墨へ少量の胡粉を加へたもの）にて空を塗る前に塗つて置いたのです。

それから繪の調子によつて、例へば暗い色を一入暗く見せようとするには、絹の裏面から塗ると一段の濃いさを増し、色も落ついて見ゆるものです。但し此方

法は、繪絹へ描く場合の外用ひられませんか。

それからいづれの場合にも注意をしなければならぬ事ですが、繪具は塗る場面に應じて、不足しない様に、少し餘分に溶いて置かねばなりません。でないと、塗り初めてから不足した爲め、あはて、溶いて見ても、間に合はぬ事があり、また間に合ふても、初めの色と同じ色合にならぬ事があつて、思ひがけない失策をする事があるから、此邊よく注意すべきです。

地隈をとつたあとは、絹地へ礬水引をした時と同じに、これが乾くまで、ほこりの立たぬやうに、部屋を閉め切つて置くのです。

以上は重に絹地へ描く場合に就て述べましたが、紙でも裏打をして礬水引をした畫仙紙ならば、これに似た方法を以て地隈をとる事が出来ます。併し紙では、どうかするとむらが出来て、絹地程奇麗には行かぬものです。尙あとも述べる筈ですが、鳥の子張りの屏風や、金銀の屏風・敷紙などへは、地塗をする事は、

餘りありませんから此處に注意をして置きます。

着衣

地隈を終つたら、こんどは着物の彩色を初めます。此着物の色合は、繪の中で一番大切なものであるから、餘程研究をしてかゝらねばなりません。なれて終へば、これ位のことは何でもない事ですが、初心時代は、なか／＼旨い色合が浮かばぬものです。その様な時は、展覽會や雑誌の口繪、または呉服屋の陳列でも覗いて見ると、大概考へつくものです。こゝに描いた繪のやうな場面では、濃紫か群青色が最も此頃の氣候にふさはしい色合であります。もし濃紫であつたら、洋紅の具へ藍を混じて用ひ、また若し群青であつたら、初め薄い藍墨にて着物全部へ塗り、これが乾いた上で、線を除けて群青を塗るのです。着物の色を終つてから、次には帯に着色をします。帯の色は、此女の年頃を考へて、調和した色合を用ひねばなりません。

着衣と帯の着色を済したら、次は襦袢の袖、帯留め、半襟と云つた工合に、其主要な色を塗つて終ひ、これで大體の調子を見、不調和な所がなかつたら、こんどは、着物、帯、半襟等へ模様をつけます。着物の模様は、其つけやうによつて、之も繪の出來榮えに影響を及ぼすものであるから、最も注意しなければなりません。此圖の如き簡單なもので、また現代の風俗であつたら、一寸外出して人通りを眺めるとわけなく得られますが、尙うまいものを見當らなければ、三越、松屋、松坂屋等の大呉服店の陳列を見ると、適當なものを見出すから、それを應用すればよいのです。しかし出品畫か何ぞで大作をする場合には、此様な場所を十分觀察した上で、自己に於て模様を創案したがいのです。

尙模様の話序であります、これが元祿美人とか、其他歴史人物であつたら、必ず其當時用ひられた模様をつけきて、元祿美人の着物に、現代式な模様をつけたりなぞしない様に、注意しなければなりません。

着物の着色 模様などを終つたら、櫛(腰掛け)を描き、これだけのものを立派に彩色し終つたら、初めて顔や手の彩色をします。

顔と手足

顔や手は、男女老幼によつて、描方にいろいろ異ふ所があり、また一番大切なものであるから、餘程注意を拂はないと、着物や其他が切角旨く描けてゐても、これ一つの失敗の爲めに、全體の畫面を打こはす事があります。私は順序として先づ此繪に就て述べますが、これは二十前後の女であるから、顔の色は淡い胡粉に、朱の上澄を加へたもので全體を塗ります。云ひ遅れましたが、人物の顔や手足の着色をする場合には、最初朱の上澄を拵へて置かねばなりません、上澄とは、朱(黄口)を程よく溶いて充分水を加へ、それを其まゝ二三分間、沈澱させたものであります。溶いたまゝ二三分も沈澱させると、上側の所が鈍い朱色をしてゐるから、この上側だけそつと別の皿へ移し取るのです。前にも述べたやうに女

の顔は、普通の場合これに胡粉を加へたもので塗るのでありますが、直一層奇麗に仕上げるには、此上澄をも一度澄ませたものを用ひます。そして此最初に澄せたものを一番朱と云ひ、次に澄ませたのを二番朱といふのです。

話は元へかへりますが、此朱の具で顔全體を平に塗り、また手足など凡て肉體は、同一のもので塗つて置く、それから顔を塗る時は、別に隈筆に水を含ませたものを持ち、髪が生え際の所を暈して置くのです。

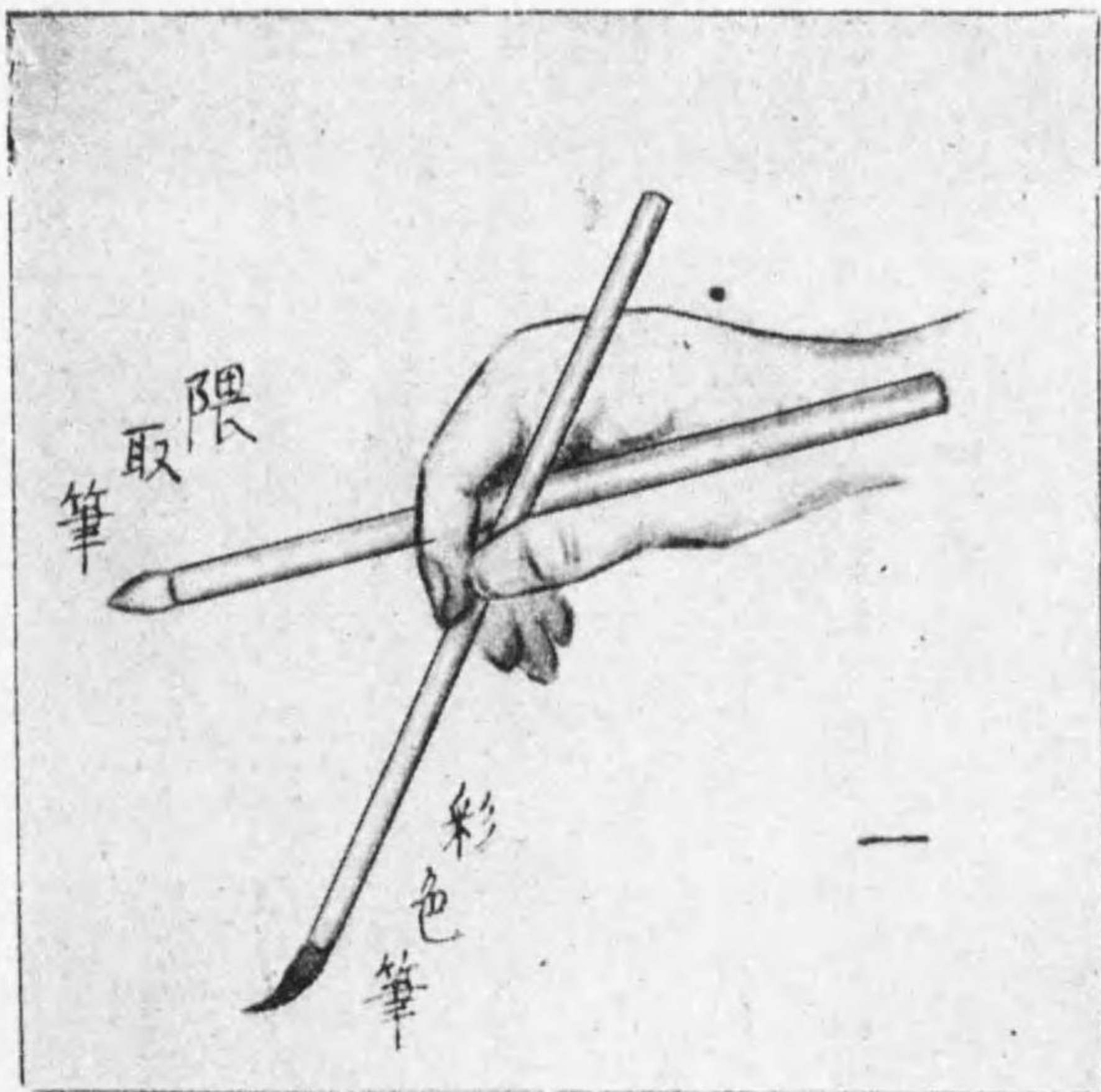
かうして最初塗つたものが、全體の調子と比べて少し弱過ぎるやうだつたら、も一度其上から塗り、之等が全部乾き終つたら、目のまわりの窪みや、鼻孔、耳朶、其他窪みのある部分へ、朱の上澄か、またはそれに少し許り洋紅を加へて之れを塗り、まわりを暈すのです。またこれが乾いてから、鼻、頬、額など高くなつて居る部分へ返り隈を施します。この返り隈は、高い部分を高く見せる爲に施すものであるから、淡い胡粉にて塗り、そのまわりを暈すのですが、この時は、

初め、水にて其部分を濡して置き、それが乾かない内に、むらにならぬやうに注意して塗るのです。

それから此様な場面の隈取りをする時は、彩色筆と隈取筆とを、代る／＼忙しく使はなければならぬから、二本の筆を片手に持ち、うまく使ひ分けて行かねばなりません。其持ち方は、一の如く彩色筆を人差指と親指で持ち、隈取筆を親指から中指と薬指との間に挟みて横たへ、彩色筆を用ひた後をボカス時は、二の如く中指を抜いて手早く隈取筆の下に差し込み、三の様な形に持ち代へるのです。此様な方法にて、一筆塗つては持ちかへるので、餘程迅速にやらねばなりません。初めはどうも旨く行かぬものです。それで平生に、是非とも此持ち方を稽古して置く必要があるのです。

毛髪 ことまでかいてから今度は毛髪を塗る。毛は墨に少しばかり胡粉を加へたもの、所謂墨の具を用ふるのです。これを塗るには毛髪の部分へ水を引き、其

水は餘り多量にならぬやうにし、且つ額際の所を五分ばかり餘分に塗りて其先を

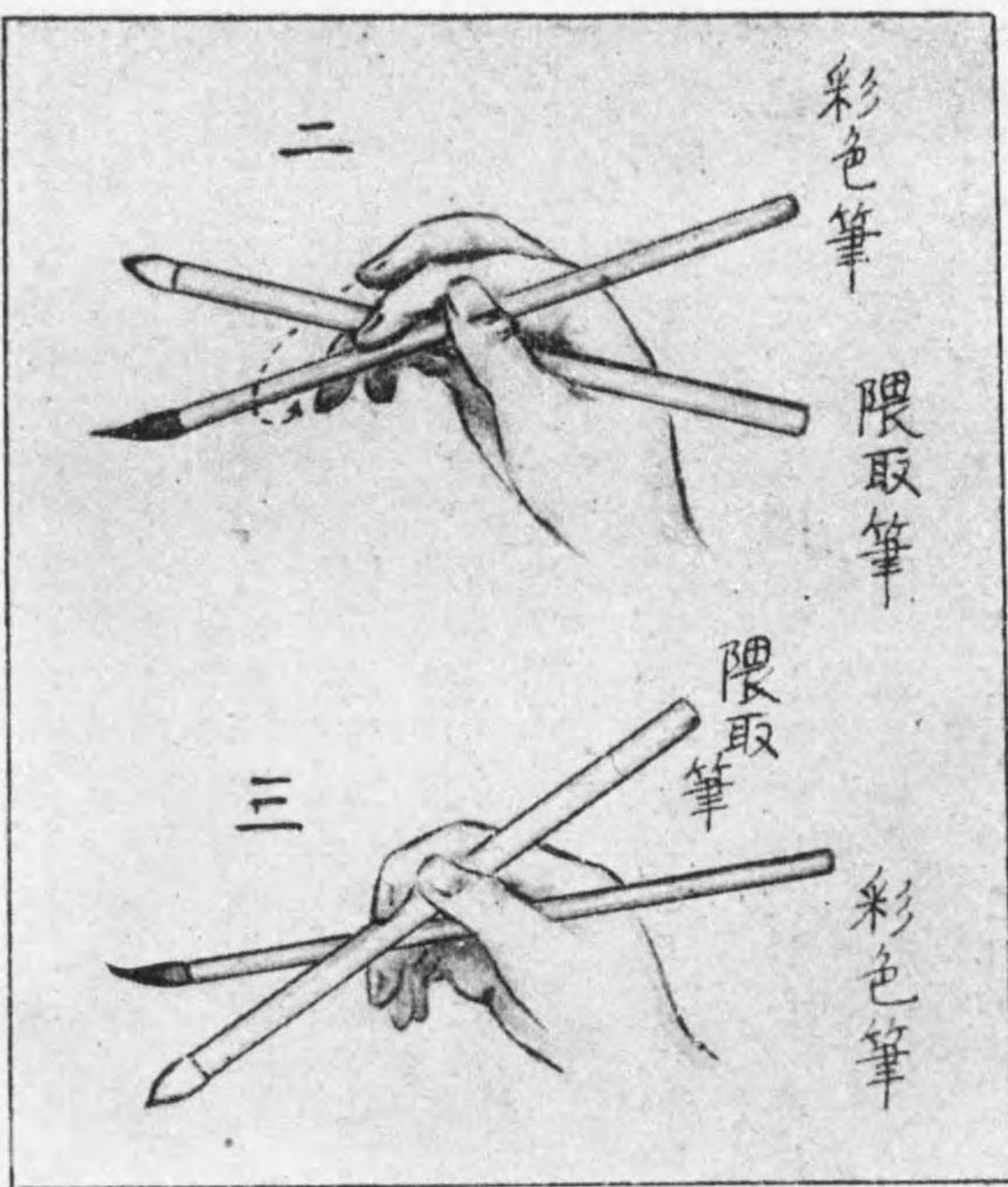


(一 其)方ひ使の筆本二

を現はせないものであるから、これが乾いてから今度は濃い墨を以て、毛筋に合

て置く、そして此引いた水が充分浸み渡つたら、額の生え際の所から塗るのです。この毛髪を塗る時は、髪の高く重なつてふつくらとした所や、又低くなつて真暗い所、即ち陰陽を考へ、平らにならぬ様に塗るのです。毛髪は初めの一回だけでは陰になつた暗い所など、充分色

はせて塗り、これもまわりの所を暈すのです。そしてこれが再び乾いてから、面



(二 其)方ひ使の筆本二

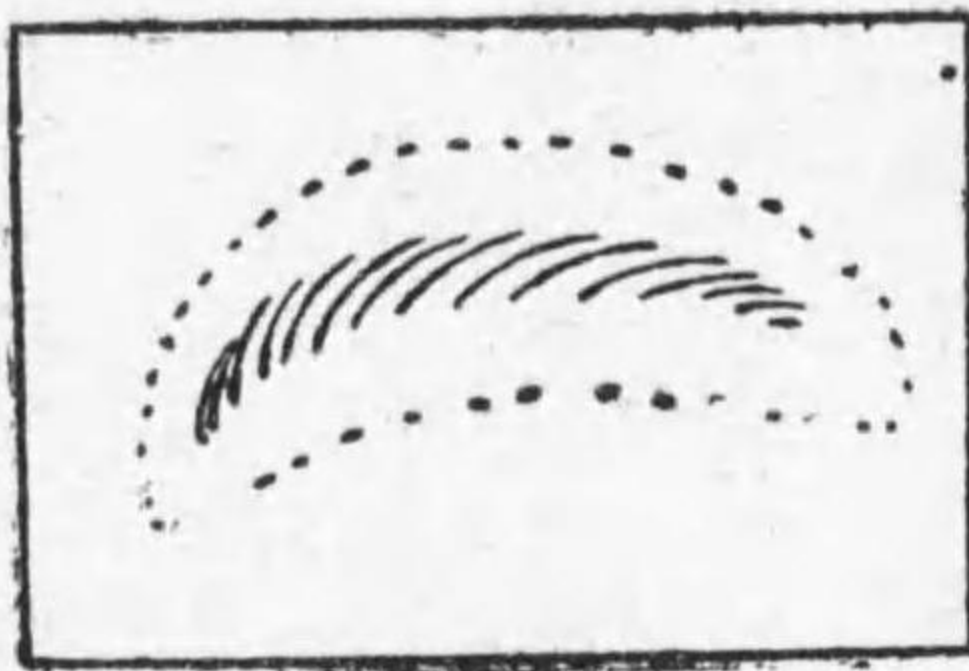
醜いものが出来ます、といつても、こゝは一番むづかしい所であるから、多少経

験を積んだものでも失敗する事がある位です。初學時代はしくじり勝ちです。だから初學時代には、此顔の部分だけ幾度もかいて、かねて稽古して置くがよいのです。

此毛髪このけがの描き方かたは、こゝえ掲げてある繪ゑに就つて、其概略そのがいりやくを述べたに過ぎませぬが、髪かみの形かたちによつて、例へば日本髪にほんがみの丸髷まるまげや島田髷しまだまげのやうな、輪廓りんくわくのはつきりしたものを描く時には、多少違つた方法をとる事もありますが、それは數多く描いて居る内、自然に會得するものです。

毛髪けがを描き終つたらば又元へ歸つて、顔かほを仕上げるのです。顔は先刻、全體の地色ぢいろを塗つて、反り隈かへぐまを施して置いたから、今度は眉まゆ、眼め、唇等くちびるらうを描けばよいのです。眉まゆを描くには、圖にある如く點線の所まで最初水を引き、其水の生乾きした頃淡墨にて描き、まわりを暈し、これが乾いてから、面相筆めんさうひでに濃墨をつけて、毛描きをします。此毛描きは餘り不揃ひにならぬやう、また線が太くならぬやう

にせねばなりません。



眉の塗り方

眼めを描くのは眉まゆを描くのと、殆んど同じ方法を用ひますが、但しこれは、上下の臉の部分だけ墨を塗り、そのまわりと、真中とを暈し、次に眼の中へ丸く黒目を入れ、まわりを暈して置くのです。

此眉このまゆや眼めを描く時は、額面かほをよごしたり、斑むらをでかしたりしない様に、特に注意をしないと、これが爲めに切角描いたものが失敗に陥る事があります。

唇くちびるは淡く溶いた朱しゆに、洋紅やうこうを加へたもので塗り、尙此色なほこのいろを以て鼻はなの穴あな、耳等みみらうを塗り、最後に顔の輪廓の線りんくわくのせん(初め墨で描いた所)の上へ、描き入れると、リンカクがはつきり浮いて來るのです。それから手足等の肉體も凡て、顔を描くのと同じ方法にて仕上げるのです。

尙分りよい様に、此寫眞圖以外に、人物の額の部分だけ、實際のものを描き、三色版にて口繪として掲げて置きましたが、これは其仕上げ方法を示したものです。圖右上は絹地へ草稿の繪を寫し取つた所、中は背景を塗つて、着物へ大體の着色を爲せるもの、下は着物へ模様をつけ、額面全體へ、胡粉(少量の朱の上澄を混じたもの)にて下塗を爲し、左上は朱の上澄、胡粉等にて返り隈を施し、毛髮の全體の下塗を爲し、中はやゝ仕上げに近づき、下に至つて始めて仕上つた所です。

以上で此繪の人物を描き終りましたから、最後に雁來紅を描きます。雁來紅の葉は、朱又は洋紅に墨を加へたものを用ひ、虫ばんで變色した部分へは、倍赭墨を暈し込むのです。

花と樹木の描寫法

花類を描くのは、日本畫には餘程適して居ると見えて、昔から最も多く描かれ又名作に乏しくありません。一體日本畫の顔料は、油繪などに比べると、調子が弱く、女性的に出來て居るので、此様な優しいものを描くに、適して居るからであります。花類を寫すには、初めは花の大きなものを寫すがよい。朝顔、夕顔、けし、菖蒲、蓮、牡丹、菊、ダリヤ、こんなものを描いて見て、それから一寸質の變つた、紅葉、雁來紅のやうなものを描き、櫻やつゝじ等小さな花の密集したものを寫すのです。

朝顔 朝顔は美しいと思ふより、むしろ涼しいと思ふ花です。これを描くには、あつさりした描方を試みて、どこまでも涼しい感じを出したがよい。花の形には

普通の形、所謂朝顔形をしたもの、外、近來は改良されて狂ひ咲きなど變種が多くなりましたが。畫には矢張朝顔形をしたのがよいのです。花の色は白、紅、茶、瑠璃、しぼり等多くの種類がありますが、大作でない限り一種類か二種を選んだがよいのです。

朝顔の様なものを描く時、注意しなければならぬは蔓の巻き方です。植物の蔓には、左巻のものと右巻のものがあつて、一寸間違ひ易いものです。此朝顔は右から左に向つて巻き上げて居るので、此様な巻き方をするを左巻といふので

す。

夕顔 夕顔も朝顔と同じく、見て涼しい花です。これを描くには、藍墨にて地隈をひき、花は胡粉にてあつさりと浮き出させ、葉は草墨を用ひ、葉脈は、繪具の生乾きの内に墨にて描くのです。夕顔は宵の口の薄暗い中で眺めるものですから、堅くならぬやう、すつきりと現はしたがよい。夕顔の蔓も左巻です。

けし けしには白や、紫や、紅を交えたのなど種類多く、何れも云ひ知れぬ優しさを有つて居ます。これは最初薄墨にて總ての線描をして、草色にて地隈を施して描いたがよいのです。花は白い花だと淡い胡粉にて全體を塗り潰し、やゝ濃き胡粉にて花辨の外側の隈取をします。此隈取りの仕方は、花辨の先から本へ暈すのです。紫の花は、これは紫と云つても極く淡い紫であるから、具勝の藍の具に、少量の洋紅を加へたもので、全體を塗り、胡粉又は具勝ちの桃色にて隈取りをなし、最後に蕊を描きます。

けしの葉は草色にて下塗をなし、綠青の上塗りをしてもよいのですが、これでは葉が固くなるから、自緑に草を混じたものを塗り、裏葉は白緑の具、莖は白緑をそのまゝ塗ればよい。またけしの一種で「ひなげし」と云ふのは、普通のけしに比べると、花も葉も莖も少さく、形なども幾分違つて居り、花の色は燐ゆるやうな朱色です。此けしは線描きをしないで、没骨にて描いたがよいのです。

けしは至つて花の壽命が短かいものですから、咲いたら早速寫して置かねばならぬ。

菖蒲 菖蒲は野趣深い花です。これは花を主として描くより、四邊の情景を取り入れて、その中へ斑らに描いた方が趣が深い。花は朝顔やけしの様なものへ比べると、瓣が厚く、如何にも頑丈らしく出来て居るから、色彩はいくらか濃厚にしたがよいのです。葉の色は白緑に草を混ぜたものなど、適當な色です。

蓮 蓮は蒼くから佛事に用ひられて來たので、佛臭い様な感じを與へられますが、畫に描いて見るとなかく趣きのあるものです。

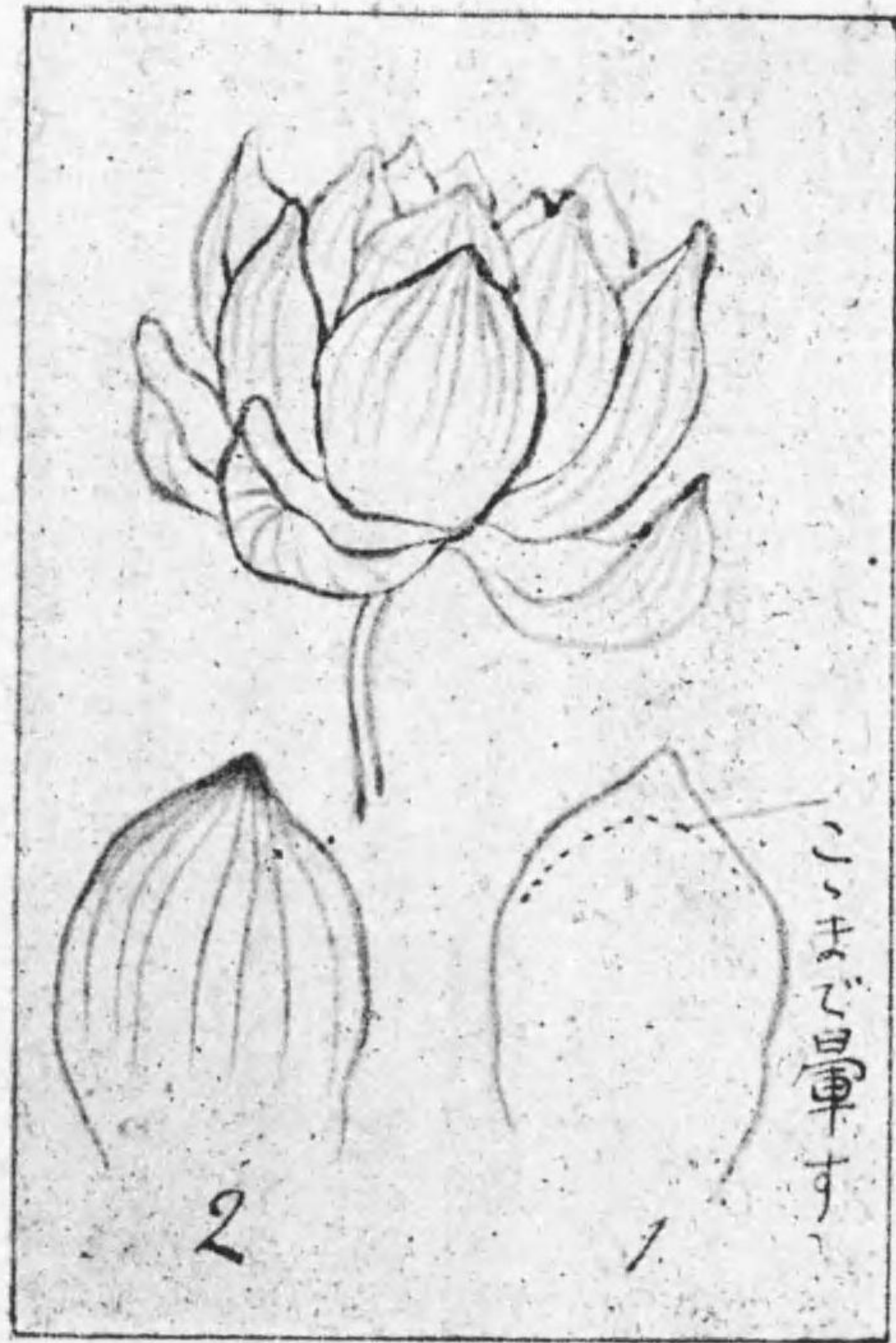
花は「けし」を描く様な心持ちで描けば大した違いもありません。花には純白なのと薄紅とがありますが、畫には薄紅を描いたがよい。

薄紅のは淡い胡粉にて花全體に亘つて下塗を爲し、1の如く洋紅にて瓣の上の部分だけ、上から下へ暈し、それが乾いてから、2の如く同じ洋紅にて、上から

下へ暈しながら線を引きのびます。

葉の表は草の下塗りをして、白緑に藍又は草を加へたものにて描き、裏葉は白

緑の具、莖は白緑に雌黄を混じたものを用ひます。



蓮の花の色彩法

蓮の葉には水玉がこぼれて居る事があるが、此水玉を添へたのも趣が深い。これを描くには胡粉又は銀でもよいのです。

いづれも周縁の所を濃くし、真中を淡くすると、ふつくらとした水玉が出来ます。併し銀で描いたのは、描いた當座はよく見えても、變色が早いから、胡粉で描い

たがよいのです。

牡丹 牡丹の花は巾廣い瓣が幾重にもなつて、朝顔やけしの類よりむづかしいものです。花は初め全體を薄い洋紅にて塗り、それが乾いてから濃い洋紅を以て花の根本から上へ暈し、今度は胡粉にて上から本の方へ暈すのです。此胡粉で暈す時は、瓣の表裏の區別を、旨く描き現はすやうに努めなければなりません。蕊の頭のぶつ／＼は雌黄の具、其莖は胡粉、葉は調子を強くするには、草の下塗に綠青、又は白綠に草を混へたもの、裏葉は白綠、幹は岱赭黒し。

菊 菊は櫻と共に吾國の名花として、觀賞せられて居ますが、高雅な形態と其芳香とは花中第一でせう。これは他の花と違ひ、花瓣が多く、瓣の變化が多いから、初學者には少しむづかしいかも知れませんが、併しこれが寫せる様になれば、他の花などわけなく寫せる様になるから、苦勞でも、良く寫生したがい。また菊は花の壽命が長く、一度咲いたら十日も十五日も、形に變化が來ないから、初

學者が研究かた／＼寫生をするに、こんな都合のよいものはありません。

これを寫すには、最初花瓣の巾廣いのを寫し、花の形なども、正面から寫し、側面から寫し、半開のもの、蕾のもの等いろいろに寫し、それから葉や枝なども各方面から寫して見るのです。

菊は花の種類が非常に多くて、花の形には實に珍らしいものがあつて、寫すに骨の折れるものですが、色彩は左程むづかしくないから、寫生を試み、實物に就て會得されたがよい。

ダリヤ ダリヤも菊科植物であつて品種多く、花の大きさ、又形なども菊に似て居ます。これは夏から秋へかけて咲くからでもありませんが、菊に比べると花の色など濃艶です。併し葉や莖の工合は、菊のつゝましやかなのに比べて、これは餘りに不作法です。そして菊の香り高きに反して、これは惡臭があつて不快です。

ダリヤの花は、思ひ切つて強烈な色彩を使ふがよい。殊に此花の赤い色をしたのは、深紅燃ゆる様ですから、調子の弱い描き方をしては、活氣に乏しいものになつて了ふのです。

ダリヤの葉の色や枝ぶりは、菊とは餘程違つた所があります。菊の葉の厚ぼつたいに比べて、ダリヤの葉は薄つべらです。だからダリヤの葉は極彩色の場合でも、緑青などは餘り使はぬがよい。

紅葉 紅葉は花ではありませんが、紅葉した色の美しさは、花に優るとも劣らぬ風情を有してゐるから、吾國では之れも多く描かれてゐます。

紅葉には深紅のもの、やゝ黄ばめるもの、又一枚の葉の中にも、紅くなつた所と黄ばんだ所とまだ青い所とがあつて、可なり變化があるから、寫生する場合に、よく之等を觀察して寫すのです。

深紅のものは、朱又は洋紅に少し墨を加へたものにて塗り、蟲が喰つて色の變つた所は岱赭墨にて描き、青味や黄味を帯びた所へは、それ等の色を暈し込むのです。

葉脈は洋紅に墨を加へたもの、又は華やかに見せる爲めに金を用ふる事もあります。葉柄は同じく洋紅の墨、又はこれに何程か朱を加へたものでもよいのです。

又紅葉と殆んど同じ色をしたので、鳶があります。この描方は紅葉と變る所がありません。

以上述べたやうな花を一通り寫したら、今度は工合をかへて、櫻やつゝじのやうな、小さい花の密集したのを寫して見るがよい。

櫻 櫻は吾國の國花であつて、菊と共に昔から觀賞され、詩や歌に詠まれ、限りなく畫にも描き盡されて居るので、最も描くに都合よい花です。櫻も近世は種々改良され、花の色や形など變つたものがあります。普通一重と八重とが多く

花の色も一二特種とくしゆのものを除のぞいては、白しろと薄紅色うすべにいろに限かぎられ、何れも横よこ向きになつて、二つ三つづゝ花はなをつけて居ゐるのが、密集みつしよして一時いちじに咲さき初はじむるので、彼あの様やうに見事みごとです。

櫻さくらは花はなの一枝えだ、又は一二輪りんを寫うつすには、花瓶くわびんに差さしたものを寫うつすがよい。又櫻さくらは密みつに描かく場合ばあひでも、線描せんがきをしないで設骨けつこつにて描かき、花はなの色いろは胡粉ごふんにて全體ぜんたいを薄うすく塗り、胡粉ごふんにて花はなの先さきから本もとの方ほうへ暈ぼかすのです。又落花またらくわの一二片へんを實物じつぶつ大位だいゐに描かく時は、花はなの本もとの所ところへ少すこしばかり洋紅やうこうを塗り、先さきの方ほうへ暈ぼかして置おくのです。

葉はは岱赭墨たいしやくすみにいくらか洋紅やうこうを加くはへたと、草綠さうりよくすみに墨くはを加くはへた様なやうものがあります。枝えだは墨すみの具ぐに岱赭たいしやくを加くはへたもので描かき、それが充分じゆうぶん乾かはき切れぬ内に濃墨こいすみにて環狀くわんじやうに皺しはを表あらはすのです。それから櫻さくらの花はなの密集みつしよして居ゐるのは、花はなの形かたちを一つ一つ描かく必要ひつえうはない。大體だいたいを白しろく塗り、其上そのうへから消略せうりやくした花はなの形かたちと、葉はとを描かくのです。

つゝじ つゝじも櫻さくらの様やうに密集みつしよして咲さくので、これも消略せうりやくした筆ふでもて、大體だいたいを描かくのです。但し此花このはなは櫻さくらより花はなが大小おほく、木きが小ちひさいから、面倒めんだらでも花はなは一つ一つ線描せんがきをし、花はなが白しろならば全體ぜんたいに薄うすく胡粉ごふんを塗り、其上そのうへを胡粉ごふんにて隈取くまきをするのです。此隈取このくまきの場合ばあひには、上うへを向むいたもの、又または下したを向むいたもの、右向みぎむきもの、左向ひだりむきのも等さう、それ〴〵形かたちに應おじて、描かき分わけるやうにせねばなりません。

樹木じゆもくを描かく前の觀察くわんさつ 樹木じゆもくを描かくに就つて、觀察くわんさつして置おかなければならぬは、樹きの位置あちによつて枝振えだびりの違ちがふことです。密林みつりんに覆おほはれて育そだつた木きは、丈高たけたかく延のびて枝蔓えだはびこらず、北風きたかぜ強い丘陵きやうれうにある孤木こぼくは、枝えだや幹みきが南みなみを向むき、又または南みなみに傾かたむいてゐます。あたりに邪魔じゃまになる様やうな樹木じゆもくがなく、日當ひあたりよく暖あたかな場所ばしよに育そだつた樹きは幹太みきよこく、枝えだが廣ひろがり、葉はが繁しげつてゐるのです。海岸かいがんに行いつた時とき、海岸かいがんに立並たちならぶ松まつの木きに氣きをつけて御觀ごらんなさい、其多そのおほくは海風かいふうの爲ために、枝振えだびりが陸りくを向むいて居ゐま

す。此風の爲に枝の變化の面白いのは银杏です、银杏の木の芽の伸びる頃は、毎日、南風ばかり吹くので、軟かい新芽は自然と北の方に曲つて仕舞ふので、银杏の枝の多くは北を指してゐます。



松の岸海

此様な事は餘り知り過ぎて、理屈一遍のものばかり描いても、面白くありませんが、そうかと云つて、常識に外れたものを描いてはよくないので、かねて注意と観察とを、怠らぬやうにしなければなりません。

最初は枯木の寫生から 樹木の寫生をするには、初めは落葉して裸になつた枯木に就て、枝の部分寫生を試み、それから

全體を寫し、これに馴れてから葉をつけたものを寫す様にすると、研究に無理をしないから樂です。枯木を寫すには、银杏や、榎や、樺のやうなものを寫すがよ

枯木



花と樹木の描寫法

い。落葉した銀杏の枝の、青空に聳えて參差たる有様は、見るに心地よく、寫すて面白いものです。また櫓の類の落葉した枝に、二三葉枯葉が取残されてあるに、小鳥の一匹淋しさに留つて居る所など、半折を描くに此上もない好畫題です。枯木を寫すには、梢から筆を起し、梢から幹に、幹から根に及ぶを定則とされ、樹枝の向背、左右した工合を現はすにも、一々むづかしい法則があつて、舊い畫法から云ふと、枯木を寫すといふ事は、實にむづかしい事であるのです。併し私共が描かんとする新しい日本畫では、寫生を土臺にして、無線描法を試みる場合が多いから、古人が説くやうな、むづかしい法則に従ふ必要はありません。むしろ枯木だと、樹木の組織が一目に分り、色彩なども至極簡單であるから、初學者が樹木の寫生をするには、これが一番寫し易いのです。

梅 一通り枯木の寫生をしたら、花や葉をつけたものを寫すやうにする。それには、梅や松のやうなものへ移るがよい。梅を寫すには成べく老木を寫すのです。

老木だと曲りくねつた幹にたとへ難い趣があり、灰白色の苔に被はれ、青々とした「のきしのぶ」の着生して居るなど、なかく畫趣に富んで居るので、梅の寫生をしたら、之等を觀察し、畫にする場合にこれをつけるやうにすると、一段趣きのある畫が出来るのです。

梅を描くにこれまでの日本畫では、幹は凡て墨一色を以て描かれて居ますが、併し實物を見ると、他にもいろいろな色彩を含んで居るのを發見されるから、研究して、實物に近い色を出して見るもよいのです。

梅の花には白や紅や薄紅などがあり、花を大きく描く場合には、實物通りの色を出し、遠くから眺めた所を描くには、白い花だけ描いたがよいのです。でないとい、紅や、薄紅などは、桃の花と間違へられる事があるのです。また梅を描く時、花は餘り多くつけない様にし、上品に描くやうにせねばなりません。

松 落葉した銀杏や梅のやうなものを寫して、枝の描方が分つたら、今度は葉

をつけたものを寫して見る。葉をつけたものでは、松などがよいでせう。松は梅や櫻など、共に觀賞され、繪にも多く描かれて居るので、親しみ深いものです。松は近くから枝の一部を寫すもよく、遠くから全體を寫すもよい。

松は墨にて力強く描くもよく、又彩色をするには、淡い岱赭墨にて幹を描き、それが全く乾かぬ内に濃墨にて鱗のやうな形をした樹皮を描き入れ、葉は草色にて一塊りづゝ下塗りをなし、緑青か又は白緑にて斑らに葉をつけるのです。また若木を描く時は、葉を一本づゝ丁寧につける事があります。

松にも梅と同じく苔があるから、老松を描く場合には、必ず苔をつけ、また山間の松には、紅葉した蔦が一面にからみつき、實に美事なものがある。見た所野暮臭い松も、これをつけて、着色したものを描くと、誠に美しいものです。

柏 梅や松のやうなものを描いたら、今度は反對に葉の大きなものを描いて見る。それには、柏、梧桐などが一番よい様です。

柏樹の全體を遠くから眺めた所は、餘り格向のよいものではありませんが、これが幹や枝の一部分、または葉をつけた一枚は、なかく趣のあるものです。

柏の葉は葉の縁が鈍鋸齒状をして居り、これが枝の尖に五六葉づゝはすかひに並んで居る所は、棄て難いものです。柏は秋の頃蟲喰んで黄葉した頃を描いたのもよいが、鮮やかな色をした若葉の、ところゝ虫に喰はれて居るのを描くと、大層趣のあるものが出来ます。

柏の葉は初め草汁にて下塗りをし、白緑に草を加へたもので上塗りをするか又は、極彩色にて調子の強いものを描くには、緑青にて書き、葉脈は金又は、白緑に少し雌黄を加へてかき、裏葉は草汁の下描きに、淡い白緑にて描きます。枝や幹は淡い代赭墨に、少しばかり雌黄を加へたものにて描き、描いたものが生乾きの時、これに濃墨を加へたものにて、斑點を入れるのです。

梧桐 梧桐は日本畫の題材によく用ひられるが、これも樹木全體を描く事は稀

れて、一枝か二枝を描くことが多く、而して梧桐は、秋の黄葉したのを取扱はれる事が多いのです。梧桐は一寸見た所何でもない様な樹ですが、これが黄葉した所は、全く風致あるものです。

梧桐の青葉は大體に於て柏の葉を描く場合と變りませんが、たゞこれは、柏の葉に比べて大層しなやかなものであるから、硬くならぬ様に描かねばなりません。梧桐の黄葉したのは、雌黄の具を其まゝ用ふるか又は、これに少許の岱赭墨を加へ、これを塗る時、具墨と岱赭の具とを用意して置き、描いたものが生乾きした時、蟲喰んで黒ずんだり、又は色の褪せた部分へ描き入れる。葉脈は金又は雌黄の具、岱赭墨等を用ひます。

梧桐の枝や幹は、白緑に墨と、少許の雌黄を加へたもの、具墨に雌黄を加へたもの、または濃口の茶白緑等がよいでせう。

以上は特長ある花や樹に就て、大體の描方を述べたのでありますが、素より、

これまでに多くの人々がやつて來た道を、そのまま教えたもので、何等新しい試みもありませんが、之れによつて大體の描方が分つたら、常に實物寫生を試み、自分自身に新しい描方を發見して行くやうにしたがよのです。

山水の寫生

前にも一寸述べて置いたので、重複するやうであります。日本畫で山水を寫生するには、油繪や水彩畫の如く、繪の具一式持參して、形から色彩まで、全部其場で仕上げるといふことは、出来ない事でもあり、また日本畫では、西洋畫の風景畫とは多少性質を異にして、風景を寫したものの其儘を繪にするてなく、寫したものを參考にして、別に思考を加へ、それによつて描くものであるから、寫生をするにも其考へて寫すのです。

此様なわけて山水の寫生を爲すには、鉛筆のスケッチでも、紙片に寫した墨繪でも、又は水彩畫具の寫生でもよい、歸つてから此寫生畫を土台にして想を練り、草稿をつけ、それによつて本仕上げを爲す、それで寫生をする時は、まづ其要點

を寫し、其時見た感じや、色彩など細かに控えて置くか、又は暗記して置く必要があるのです。

山には高い山、低い山、全山鬱蒼たる森林に覆はれたのもあれば、禿げ山



筆觀大山横「雨竹」

て捨を法手の來舊然全はれこ
すで畫水山たみ試を方描新

もあり、
春夏秋
冬、雨
や雲や
雪によ
つて變
化を見

せ、限りなく人の眼を樂しませ、又限りなく吾等に詩情を齎らして呉れます。此様に山は季節により、激しい變化を見せるものであるから、寫すには氣候に

應じて、其氣分を現はすやうにしなければならぬ。富士山などは、冬は眞白い雪の衣を着て、何時も山容を現はしてゐるが、夏は雲に包まれ勝ちて、又朝と晝と夕とは、大に色彩を異にしてゐます。

山は遠くから眺めて、さまざまの變化を寫すも面白いが、登山して山容の美にひたりながら寫生するは、尙愉快です。緑したる森林、千仞の谷底へ落下する瀑布、直々天を摩する岩石、去來する雲、御花畑の美觀等、とても平地では見ること出来ない美觀と、壯觀とに接する事が出来、これ位寫生するに愉快な所はないから、機會があつたら常に登山して、寫生を試むべきです。

川 川は平地の川と、山地の川によつて趣が違ふのです。山地の川は川巾狭く、流れ急なるに反し、平地の川は、川巾廣く流れは悠やかです。

山地の川を寫すには、川の兩岸に並ぶ岩石、樹木、橋、水車、稀には筏や曳舟などを見る事があつて、風致に富める事一通りではありません。此山間の川に架

してある橋には、時々珍らしい形のものへ出會する事があるから、此時は必ず寫生して置くべきです。また川巾狭き溪流や川瀬のやうなものは、川上から川下を寫すといふ事は、一寸むづかしい事だから、川下から川上を眺めて寫すと、描き易くもあれば面白味もあるのです。

山地の川は水が清く、深い所は蒼々として居ますが、此色を出すには、群青又は紺青にて調子強く描くと、充分趣を出す事が出来ます。

平地の川では、小石多き川原に幾條も支流を爲して、そのところ々に簡單な橋が架けられてゐる所もあり、又利根川のやうな大河になると、芦の葉がくれに上下する舟や曳舟、又は四手網など得も云はれぬ風情です。

森林 森林は寒地と暖地熱帶地によつて、植物の種類が違ふから、従つて情景を異にしてゐる。寒地、吾國の北海道・樺太地方では落葉松、蝦夷松、椴松などの針葉樹と、みづなら、ぶな、白樺などの闊葉落葉樹林を見る位で、情景も色

彩も淋しいものです。

これに反し暖地では樟・檜・椿のやうな常緑樹が多く、又熱帯地になると、全



筆堂玉合川「嶽ヶ駒」

いし新たれ入り取を法手舊少多はれこ
すで畫水山

山殆んど常緑樹に覆はれ、色彩は一入群かです。此様に

森林は寒、暖、熱帯によつて著しい變化があるから、寫生するには、必らず之等が有する特長を失はぬ様にせねばなりません。

原野と農村 原野には、畑地、森、村落などあり、一寸面白い情景を見る事があります。

原野を寫すには、漠然たる草原などを寫すより、畑や森や村落などを取り入れて寫したが面白いのです。

農村はどこを見ても畫趣に富んで居るが、山麓にあるのが、畫趣最も豊です。山麓の農村だと、其背景に畑あり、山あり、溪流あり、水車などありて、これ位面白い所はない。

海濱 海濱は山地のやうに、景色が少しも複雑して居ないから、初心者が寫生するには都合がよい。海濱で寫すものは岩礁、打ち寄する波、岸邊の松、出入する漁舟、網干す漁村などです。

海岸には遠望して景色のよい所と、岩礁とか、又は漁村とか、部分的によい所がある。もし遠望して面白くなければ、之等の一部分を寫せばよいのです。

雲 雲は學術的に分類すると、頗る多數に達するといふ事ですが、氣象學上

卷雲、積雲、層雲、雨雲の四つに分け、更らに之等を色々な組合せて、十種類に分けてあるのです。

卷雲といふのは、白くてちぢれた長い雲で、晴れた青空には年中何時でも現はれる雲ですが、大した珍らしいものでもありません。此雲は、雲の中で一番高い所に現はれるもので、常に三萬尺位の上空を流れてゐます。

積雲は綿をちぎつたやうな、眞白い濃い雲で、飛行船が飛ぶやうに流れて行きます。此雲は風景畫にはよく描かれてゐます。

層雲とは灰色をして、空一面に淡く廣がつた雲で、此雲が冷たい山や樹にあたると、忽ち雨を降らすのです。

雲は卷雲のやうな高空を流れるものは特別として、普通の雲は、至つて低空を流れゆくものです。富士山の八合目あたりへ行くと、吾々が街や野から仰いで見る多くの雲は、眼下に浮んで、脚下を流れ行くのです。わけて朝日の出づる頃山

上から下界を見ると、見渡す限り下界は雲にとざれ、吾身は雲海の孤島にあるやうな氣がします。

雲の中には、夏以外に、滅多に見られぬものや、冬ならては容易に見られないものもあるから、面白い形の雲を見つけたらば素早く寫生をして置き、寫した月日、時刻、場所等を明記して置くと、山水畫を描く時雲を取り入れる場合、大變役に立つものです。

山水畫で雲を描くには、大低白雲を取扱ふ事が多いのですが、北場合雲の所を殊更塗らなくとも、雲の形に白く抜いて置くのです。又雲を主として描くには、畫面に取り入れる地平線を低くし、空を高くすればよい。

雨はよく畫に描かれますが、雨を描くには、畫面全體を暈して雨を見せるのと、一本づゝ雨脚を見せて、殊更雨を現はしたものがあります。春雨の小糠雨などを描く場合には多く前者を用ひ、夕立などで見る、太い、斑らな雨を現はす



雪 上池 秀敏 單 「路驛の雪」

には、多く後者を用ひます。雨を描くには餘り色彩を用ひず、墨繪にて淡泊に描いたが趣があるやうです。雪の景色は初學者には一番寫し易いのです。雪が降ると凡てのものが美化され、色彩が單純化され、物體の輪廓がはつきりして、ある場合明と暗との二色を用ふれば足りるので、描くに頗る簡單です。

從來の日本畫では、雪景色と云へば殆んど墨一色を用ひ、雪の部分を白く抜いて雪を現はして居ましたが、近來、新し



こはれ寫實的な新しい山水畫です

い日本畫の描方を試むるものでは、西洋畫の感化を受けて、雪景色にも、いろいろの色彩を用ふるやうになりました。西洋畫では、白い雪でも、單に白いものと見ず、白い中にも光線によつて明暗があるから、光線の反射によつては、赤くも描けば、碧く描く事があります。これは冬の頃、眞白く雪を戴いた富士山に就いて見るとよく分ること、朝日や夕日を受けて居る時、其いづれかの半面は赤く半面は碧く見え、雪の白い所などは餘り見えないでせう。日本畫では餘り陰影を

用ひぬから、こゝまで深く研究して描くものは少いのです。これから日本畫を描くには、此邊の所へも留意して、光線による雪の變化など現はして見るも面白いと思ひます。雪は白いものだからといつて、生地を白く残して雪を見せるにとゞめるとは、日本畫の描方も餘り簡單過ぎる様です。

夜 雪景色と共に、夜の景色も色彩が單純であるから、寫すには都合がよい。夜は暗夜と月の夜とは趣が違ひ、暖かな春の夜と、涼しい夏の夜と、凍れる冬の夜とは氣分が違ふから、此邊をよく現はす事に努めなければならぬ。また夜景は、これも従來の日本畫では、墨繪にて淋しい情景ばかり寫されて居ますが、いろ／＼な色彩を用ひて、變つた情景を描いて見るも面白いのです。

山水畫を描くには、屢登山をして大自然に接し、寫生を試むるのが一番入り易い様です。

人物と動物の寫生

人物の寫生

日本畫の人物畫と云へば歴史畫、風俗畫、佛畫等でありますが、何れも歴史畫に長じたものは、一生歴史畫に没頭し、風俗畫に得意のものは、風俗畫のみを描き、佛畫を得意とするものは、佛畫のみを描いて居ます。そしてこれを習ふには、斯道の大家につき、先生のお手本や、粉本の摸寫から習ひ初めるのです。併し近年は佛畫を描くものは、滅多に見られなくなつて、風俗畫と歴史畫に限られて居るやうですから、此二つについて述べませう。

風俗畫 風俗畫と云へば、重に現代式の人物を取扱つたものであるから、其描方などいろ／＼新しい試みをなすものがあり、また初め草稿をつける場合には、

西洋畫を描くやうに、モデルを使ふ場合が多くなりました。これは日本畫の傾向が、西洋畫の感化を受けて寫實的になり、著しく西洋畫に接近して來たからであります。そしてモデルを使ふにも、只着物を着て居る人物では厭らなくなつて、徹底的に、裸體の寫生をなすものも多くなつて來ました。此裸體の寫生をするやうになつた事は、日本畫家がそれだけ進歩したものでありまして、實に喜ぶべき傾向でありますけれど、此様な研究を爲すのは、眞に専門的に畫の稽古をなす場合であつて、初心者には大した必要を認めませんから、着物を着た人間についての、新しい寫生の仕方を述べませう。

人物の寫生を爲すには、簡單な方法として、前にも屢述べたやうに、スケッチブックへ鉛筆の寫生をしてもよいけれど、着物の線などを小し入念に描いて見やうとするには、西洋畫に用ふる木炭畫を描くがよいのです。木炭畫を描くには、材料として木炭（日本畫の下描に用ふるやうな、軽い軟いものでなく、柳箸位の

の太さで可なり堅いものです）木炭紙（目の荒い紙で、一枚六七錢です）カルトンの太さで可なり堅いものです）木炭紙（目の荒い紙で、一枚六七錢です）カルトン（カルトンとは木炭紙をのせる畫板のこと、これは厚いボール紙の全紙を、二枚合せて作られてありますが、自分で作つても結構間に合ふのです）。これ丈けのものを用意し、カルトンへ木炭紙を貼り、畫架（畫架の持ち合せがなければ、何かへ立てかへる）に立てかけ、モデルに立つ人を、描いて見たいと思ふ形にさせ、それを見ながら寫生をします。木炭はこれを軽く使ひ、正確な線を得るまでは、幾度も幾度も線を引き、不用な線は指頭にて消すか、又は食パンの中味の軟かい部分を、練り固めたもので消すのです。

斯うして寫生が出來上つたら、描いた木炭が消え失せぬやうに、畫面へ噴霧器を以て、ラック液を吹きかけて置くのです。ラック液は、西洋畫の材料を賣つて居る店では、どこへも賣つて居ますが、自分で拵へるには、アルコールを小瓶へ入れ、藥種屋からラックを一匁ばかり買つて來て、それに投じて置くと、それが

黄色い液體に溶けてラック液となるのです。

歴史畫 歴史畫は重に明治以前の、人物・事件を描いたものでありますが、ここでは其人物に就いてのみ述べませう。

歴史人物は、歴史畫か歴史人形かについて見る位で、手軽に見る事が出来ないから、之等のものについて研究するか、斯道の大家について習ふより外はありません。いづれにしても歴史畫は、かねて歴史に興味を持ち、歴史を調べ、時代々々による人情風俗を知る事が第一です。而して歴史人物を描くにも、近年はモデルに時代の風俗を装はせ、實物について寫生を爲すやうになつたので、人物の形など昔のものへ比べると、餘程正確なものが出来たりしました。此モデル寫生の場合、木炭紙へ寫生するもよいけれど、鎧を着た人物などで、微細な點まで寫さなければならぬ時は、鉛筆にて寫生をした方がよいのです。

併し此様にモデルに時代の風俗を装はせて、それを一々寫生するといふ事は、

不斷は出來難い事であるから、適當な歴史畫に就て自から研究する事が肝心です。



武將を扮したモデル

動物の寫生

昆蟲 動物の

寫生をするには
昆蟲のやうな小
さなものから初
めて、小鳥や犬
猫のやうなもの
へ、移つて行く
がよい、初めか
ら獅子や虎や孔

雀のやうなものを描くのは、勞する割に、旨く描けないものです。

日本畫で昆蟲を描くのは、多くの場合、花を描いた時、添えものとして描き入



虎の鉛筆寫生

るもの
であるか
ら、寫生
する時は
實物通り
に寫して
置いても、
畫中に描
き入る、
時は、畫

と調子を合はせて描くやうにするのです。

昆蟲は季節によつて出現するものであつて、平生は寫したくも見當らぬ場合が多
いから、適當なものを見つけたら、面倒でも寫生して置く事が必要です。

鳥類 鳥類は文鳥や、カナリヤ、鶏等の如く、不斷に見慣れて、形のやさし
いものに就て寫生を爲すがよい、斯うしたものを絶えず寫生してゐると、他のも
のも知らず知らず描けるやうになるものです。

鳥は生きてゐるのはしよつちゆう動いてゐて、初學時代には寫せないものであ
るから、博物館等へ出かけて、剝製の鳥に就て寫すが一番樂です。

獸類 獸類も鳥を寫すのと同じく、平生眼に觸れる犬、猫、牛、馬等を寫生す
るのです。

此外魚類、貝類等動物は種類非常に多く、これを一々寫すといふことは、到底
出來難いことでもあり、また其必要もありませんから、其中の代表的のものにつ

いて、十分寫生をなすがよい。之等のものが上手に描けるやうになつたら、他のものは描かずとも、自然描けるものです。

日本畫の線と陰影

日本畫の線

日本畫の線は、形を表はす上に最も大切なものであつて、永い間いろく研究されて來てゐるから、流派によつて違えば、又同じ流派でも、人々によつて違ふ所があります。それで其道の通人になると、線の描き様によつて、これは何流の人が描いたのだ。これは誰れが描いたのだと、筆者や流派を見分ける程です。

所が近來は西洋畫の影響を受けて、無線描法と云ふのが流行り出し、作畫上大變化を來しましたが、それでは有線と無線とは、どちらがよいかと云ふに、これはどちらとも斷定されません。現代式な新しい日本畫の描方では、人物の顔や、手足其他持種のものへ線描をする位で其外のものには總て無線描方をなして、



(筆古半田梶) 線の畫本日

一五〇

日に月に効果を擧げつゝありますから、此傾向にて進めば、新しい日本畫では、殆んど線を用ひぬ時代が来るのでありませう。併し又一方から見ると、日本畫から全然線を取り去る事は出来難い事です。日本畫は線によつて生き、線によつて一入畫の美觀を添えるから、此線を奪ふといふ事は、それだけ日本畫の美をそぐ事になり、どんなに不利益であるか知れないのです。もし日本畫から線をとるとしたら、彼の美しい浮世繪

は亡びる外はなく、また白描法と云つて、線描き丈にて畫を爲す、氣品ある日本畫は、全然失はれて了ふ事になりませう。

近來西洋畫の生かぢりをした、日本畫家の中には、世の中の凡ての物體には、線といふものはない筈である。だから線といふものは、物と物との境界をつける爲めに、假りに引かれたものであるから、線をつける必要はない。と云つて、盛んに無線描方の効果を擧げて居ますが、此先生達は、西洋畫にも線の必要であり、勝つ重大である事を御存じない様です。西洋畫のデッサン(木炭畫の素描)や、裝飾畫や、ペン畫などは凡て線を用ひ、之等は日本畫の線と、畫面を構成する意味に於て、何等變る所がないのです。

兎に角線の描き方によつて、一幅の畫面が剛くもなれば、柔かにもなり、温かにも冷やかにもなり、高くも低くも、遠くも近くも見ゆる様に現はせるのであるから、線の主命はなかく重大なものであり、さうお易く奪い去らるべきもので

子供に描ける日本畫の描き方はありません。



西洋畫の線

この西洋畫の線は、日本の線と異なり、影を伴ふものである。だから日本畫とて、西洋畫と同じに、

日本畫と陰影

これも西洋畫の生かぢりをした、日本畫家の云ふ事であり、すが、凡

影をつけべきであると云つて、日本畫にも、影をつけるやう鼓吹しつゝあります。が、これは無線描方ほどには顧られず、たまく描かれても、廣告用のピラに用ひられる位で、畫としては何等價値なきものとして、取扱はれてゐます。日本畫であんなものを描く位なら、寫眞を引延して原色版を用ひた方が、手間も費用もはぶけて、どんなに國家的經濟だか知れないのです。

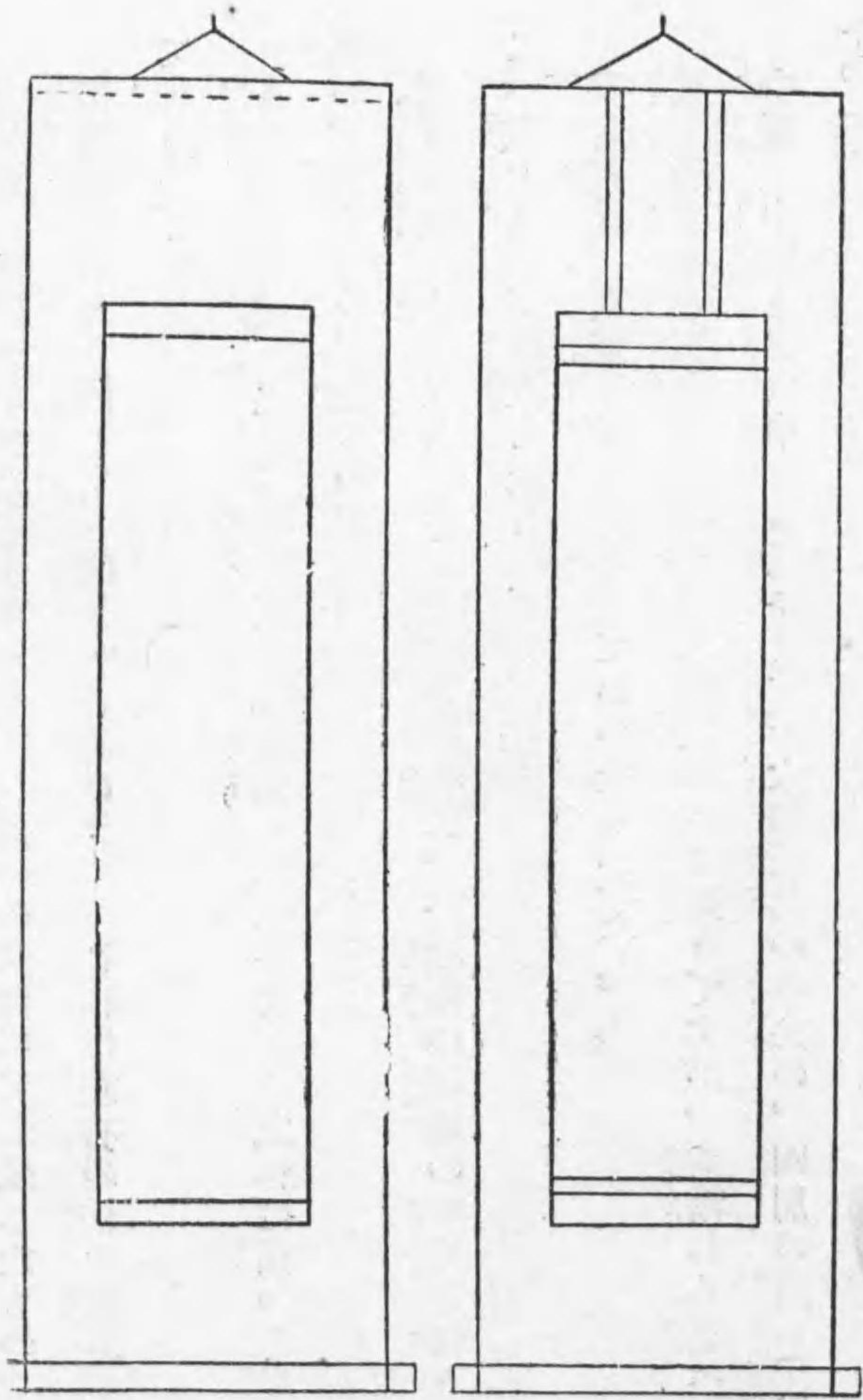
と云つても、日本畫には全然影をつけぬかといふに、そんなわけのものではありません。日本畫は西洋畫の様に寫實的なものでないから、日本畫としての特長を失はね範圍に、又畫面に應じて、適當な限取りをすればよいのです。

表装の話

日本畫と云ふものは、畫帖や敷紙や短冊のやうな特種のもの、外は、總て表装をした上で眺めるやうになつて居るから、苟くも日本畫を描く以上、表装の種類や、表装中の各部の名稱位は、知つて置く必要がありますから、其一通りを述べませう。

表装には大和表具、明朝風表具、丸表装、幘補繪の表具、輪補繪の表具、刳拔表装、畫き表具などいろいろありますが、此中で多く用ひられるのは、大和表具、明朝風表具、刳拔表装などです。

大和表具 大和表具は一番多く用ひられるもので、一番華手な表具です。
明朝風表具 大和表具とは反對に、質朴な表装をしたもので、風帶も地題も又



具表朝明

具表和大

中縁もなく、左右の柱の兩側に極く細いへりを取つたもので、此へりの事を明朝

と云ふのです。

丸表装 地題や中縁などを區別せず、同一の切地にて表装したものの。

幟補繪の表具 略して「幟補」と云ひます。これは左右の柱の幅が、廣くなつて居るのです。

輪補繪の表具 これも略して只「輪補」と云ひます。之れは前のと反對に柱の幅が、狭くなつて居るのです。

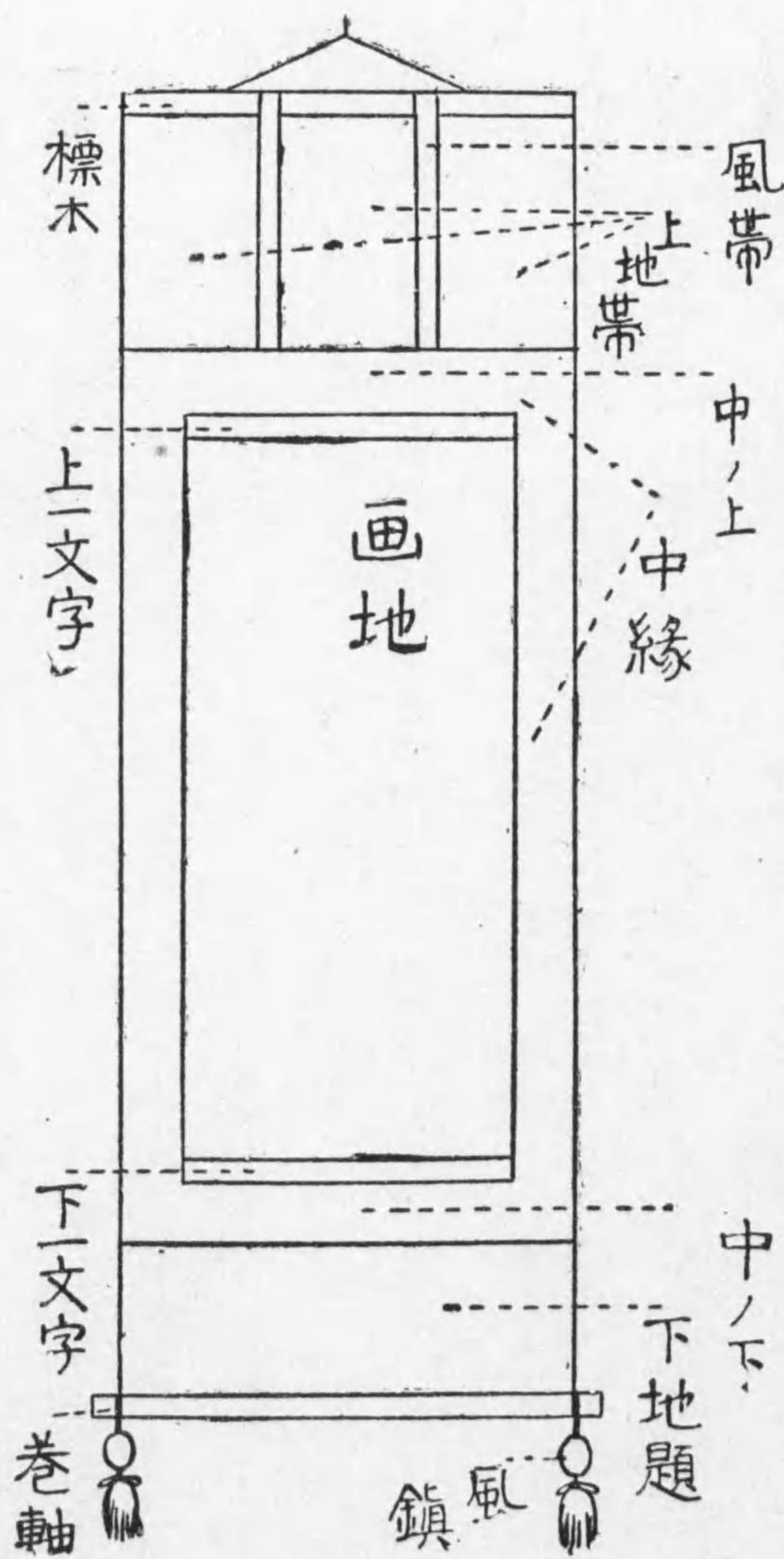
剝拔表装 小さなものを表装する場合に、一枚幅の切地の中央を切り抜き、そこへ畫を入れて仕立てたものです。

書き表具 表装の各部を畫にてかいたものです。

又表装中の各部分の名稱は、大體圖にある通りですが、尙精しく述べると、

中縁 中廻り又は中とも云ひます。大和表具の中央の、四周の所をいふので

上下 此中縁の上方と下方に相當す部分で、中の上、中の下など云ふのです。



柱 中縁の左右、即ち堅になつて居る部分です。

一文字 畫の上下の端にある、幅狭い横切れて、金襴のやうな高價なものを
用ひてあります。

風帶 掛軸の上端から垂れて居る、幅狭い切れです。

軸 掛軸の眞棒の兩端に付けてあるもので、牙軸、紫檀軸、櫻軸、竹軸、角軸、

春日軸、金軸、水晶軸等いろいろあります。牙軸とは象牙にて製えたもの、角軸は

動物の骨にて製えたものにて、白色をして居ます。春日軸は鹿の角にて製えた

もの、金軸は眞鍮で製えて、模様をつけてあるのです。其他は名稱によつて推測

されませう。

それから序に、表装に用ゆる切地の重だつたものを擧げると、

金襴 金糸を加へて織つた高等な織物で、高價な表装には總て之れを用ひてあ

ります。

緞子 各種上品な模様を織り出した絹織物で、普通一般に用ふる表装地です。

都緞子 少しばかり綿を加へて織つたもので、普通の緞子より安價です。

揉紙 揉んで皺模様をつけた上品な紙です。

掛物の多くは箱へ入れて、藏つて置く様になつて居ますが、其箱の用材は、桐、

紫檀、杉等であつて、上等ものになると、二重に作られてあります。

箱書 此箱へは箱書と云つて、筆者自から畫題と署名とを爲すべきものです

描いた畫が無表装のまま、賣買され、筆者が死亡して居なくなつた場合とか、又は

古畫である場合には、其門人か、又は其系統に屬する畫家に、依頼するのです。

折紙 一流大家の作品になると、頗る高價に賣買されるので、書畫屋の中です

るい者になると、其大家の筆蹟に似寄つたものへ依頼して、其大家の落款をつけ

眞蹟のやうに見せかけて、高く賣るものがあります。これを偽物と云つて、人が

氣付かぬ内は高價に賣買されて居ますが、一度鑑定家に看破せられて、偽物であ

る事が分ると、急轉直下、それはどんなものであらうと、三文の値うちもなくな

つて仕舞ふのです。そこでそんな目にはない様に、鑑定専門家、又は權威ある畫家に依頼して、これは眞蹟であるといふ事を書いて貰ふので、これを折紙と云ひ、これが付いて居る畫を、折紙付など云つて、確かなものである事の印になつて居ます。其折紙と云ふのは、奉書紙を六ツ折にして、畫題、筆者等を記し、鑑定者が署名捺印、及び割印をして渡すものです。

此折紙をつけるのは畫ばかりでなく、書や骨董品へも用ひますが、新畫には餘り用ひません。

落款と雅號と畫題

落款とは畫が出来上つた印に、署名捺印するを云ふのであります。入る場所は一定して居るわけではありませんが、併し畫中どこへでも、入れてよいものでもありません。通例落款を入れるには、畫面下方の右か左へ、成べく繪の邪魔にならぬやうに入れるのです。

落款に用ふる文字は、階書でも行書でも草書でもよいのですが、普通行書を用ひたのが多いのです。落款に用ふる書體は、年數を経るに従つて、次第に變化して行くのは、止むを得ない事ですが、書く度に書體をかへるのはよくありません。南畫 土佐繪などを見ると、描いた年號や月日などを、雜號の上に長々しく書いてあつて、雅印を幾つも押ししてありますが、普通私共の描く新しい繪では、雅

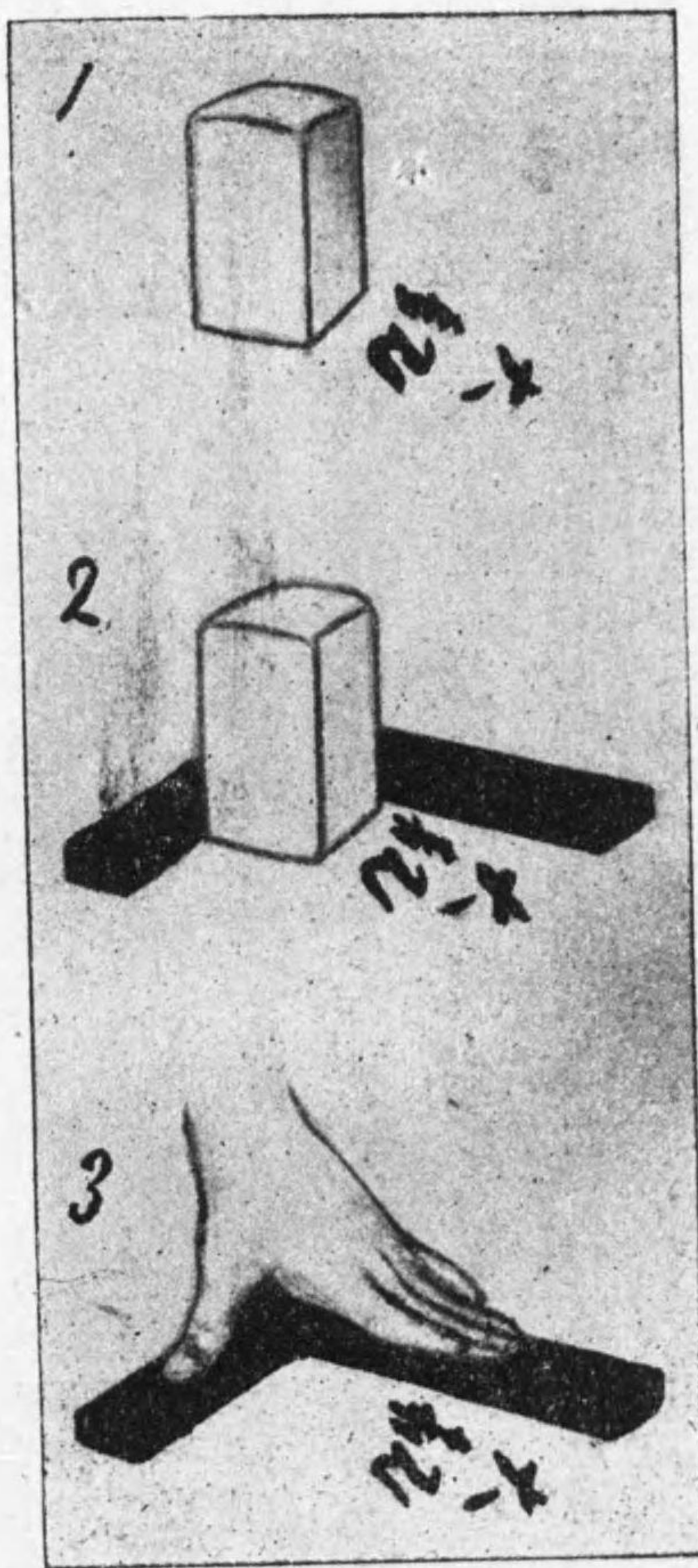


現日代本諸大落の款

一六二
 號だけ書いて、雅印も
 一個押せばよいので
 す。
 雅號を書いて雅印を
 押すには 絹地・紙・
 屏風等により。手心を
 しなければなりません。
 絹地へ押すには、
 先づ雅號を書き、絹の
 下へ印褥を置く、此時
 注意しなければならぬ
 事は、絹と印褥とがび

つたり附着して、この間に隙のない様にする事です。こゝへ隙があると、印を押す時其部分が凹むので、印をすべらす事があります。此印褥と絹との間に隙が出るのは、枠に用ひた板が厚くて、印褥より高いから、此様になるのです。だから此場合には、印褥の下へ雑誌のやうなものでも敷いて、絹と一様の高さにするのです。

印褥を敷き仕度が出来たら、印面を奇麗に拭いて、圖1の如く雅號の文字の下部に置き、位置が確つたら、そのまゝ動かぬ様に右手にて印を押さへ、圖2の如く夫に印矩をあてがい、圖3の如く左手にて印矩を押へたまゝ、右手にて印を取り上げてこれに肉をつけ、元の位置に印を置きて軽く押し、印矩を押さへたまゝ、そつと印を離して見、肉のつき方が淡い時は、繰り返して幾度も押すのです。此時印を強く押し過ぎたり、印矩を動かしたりすると、印が初め押した所へ重ならないで、二重になつたり、三重になつたりする事があるから、餘程法意しなければ



印の押し方

ばなりません。

印面に肉をつける時は、初め肉を平らにして置いて、印面を軽く叩きつけ、一面に平らにつく様にするのです。それから前にも一寸述べた筈ですが、印肉は暑い頃になると肉がゆるんで居るので、印を押したあとで、肉の油が周囲に浸み出る事があります。それを防ぐには印を押したあとで、珊瑚末をふりかけて置くの

です。そして振かけた珊瑚末は、暫く経つてから、羽箒にて掃き落せばよいのです。

それから紙張りの屏風や、額や、又は假張りに張つたものへ押すには、下へ印褥を置く事が出来ないから、印を押すには、餘程軽くしないと、畫面を凹ましたり、破つたりする事があります。だから此様なものへ押すには、押すと云ふよりそつと置くやうにしたがよいのです。

雅號の話

日本畫家は畫に署名するに、其多くは雅號を用ひます。これは必ずしも用ひねばならぬと、確つたわけではありませんが、風雅な名前の所有者でなかつたら、雅號を用ひたがよいのです。例へば美人畫を得意とする人が、花の様な美人畫を描いて、剛太郎だの、勘五郎だの、重藏だの云ふ、武骨な名前を署名するとしたら

其不釣合に噴飯せずにはゐられませう。此様なわけで、美人畫を描く人でこんな名前前の所有者であつたら、雅號を用ひたがよいのです。

さて雅號をつけるるとすれば、どんな工合につけたがよいかと云ふに、それは皆さんが住まはるゝ郷土の、山や川の名を取つてつけるもよく、又は先生の雅號の一字を頂いてつけるもよく、或は何か自己の一身に記念すべき事があつて、それを記念する爲めにつけるも良いのです。

此郷土の山川を取り入れた雅號の所有者に、徳富蘇峰と云ふ人があります。此人は文章の大家ですが、生れが熊本の人であるから、熊本の名山阿蘇山の蘇を取つて、蘇峰とつけたのです。

先生の雅號を一字頂いてつけるのは、随分澤山ある事で、昔の狩野派などは、正信、元信、直信、重信と云つた工合に、凡て信の字を用ひ、現代でも私熟出身の畫家は、大概此様なつけ方をして居ます。

一身に記念すべき事があつて、記念の爲めにつけたものに、内藤鳴雪と云ふ人があります。此人は俳句の大家ですが、此人が役人を止めて、専ら俳道にいそむ事になつた時、役人を止めたこれから先は、よくも悪くも、自然の成行(鳴雪)に任せると云ふ趣意から、成行を鳴雪と書いて、鳴雪と音讀してゐます。これ等はほんの一例を挙げたのでありますが、各人が有する雅號の出所を細かに調べたなら、定めし由縁あり、意義あるものがありませう。要するに雅號は、何か一身に關聯したものを付けるがよいのです。併し此様な機會が一つもなかつたら、名字と調和したものをつけべきです。此名字と雅號との調和がとれて、感じのよいのは、竹内栖鳳、下村觀山、横山大觀、松林桂月などでせう。竹内栖鳳と云へば、竹の内に鳳が栖むといふ芽出度の意味になり、下村觀山は、下の方の村から山を眺めると云ふので、横山大觀は、何でもないやうな山の横でも、之れを大觀すれば、こゝにも山容の美を見る事が出来る。と云つたやうな意味にもなり、松林桂

月は、陰曆八月の月が、松の林にかゝつて居ると云ふのでせう。

畫題

畫題は直接畫中のものを表はしてつけたのや、婉曲に畫の意味を表はしたもので、等いろ／＼ですが、奇抜なものや、長いものは避けた方がよい。直接畫中のものを表はしたものでは、「林檎と葡萄」「櫻」「橋」「春の山」と云つたやうなもので、不難ではありませんが、要するに平凡です。婉曲に表はしたものでは、「樹影懷夏」「豊なる國土」「幸ある朝」「嬌れる花」など云ふのであつて、聞くに床しいものです。奇抜なものでは「孤兒の看板に恵む人」「彼女等は昔の先生を忘れようとして居る」「同じ人間」「ドン底に舞踏する人々」と云つたやうなものもあります。又先年文展にて見た花鳥畫に、「南園の一隅に於ける曲と眠り」と云ふのがありますが、新らし味はあるけれど、理屈っぽい畫題です。要するに畫題といふもの

は、上品であること、止むを得ぬ場合の外、簡單であつたがよいのです。切角立派な畫をかいても、畫題が悪いと、實際の畫を見ない内はつまらぬものに思はれて、畫題の爲めに大層損をする場合があります。

又新らしい畫を描く畫家では餘り用ひませんが、舊い畫家の描いたもので、「一笑の圖」とか、「四君子の圖」とか云ふのがあつて、描いてある畫と比べて、何の意味だかさつぱり解らないものがありますが、其中で文字だけ讀んでは、解りにくい様なもの二三擧げて見ませう。

一笑の圖 竹と犬とを描いた圖です。これは竹冠に犬の字を書くと、笑の字になるからださうです。

一路功名 柳と鷺とを描いた圖です。

一品當朝 波躍る海邊に一羽の鶴が居る圖です。

歲寒三友 椿、水仙、蠟梅。

風月三昆 蓮花、菊花、蘭。

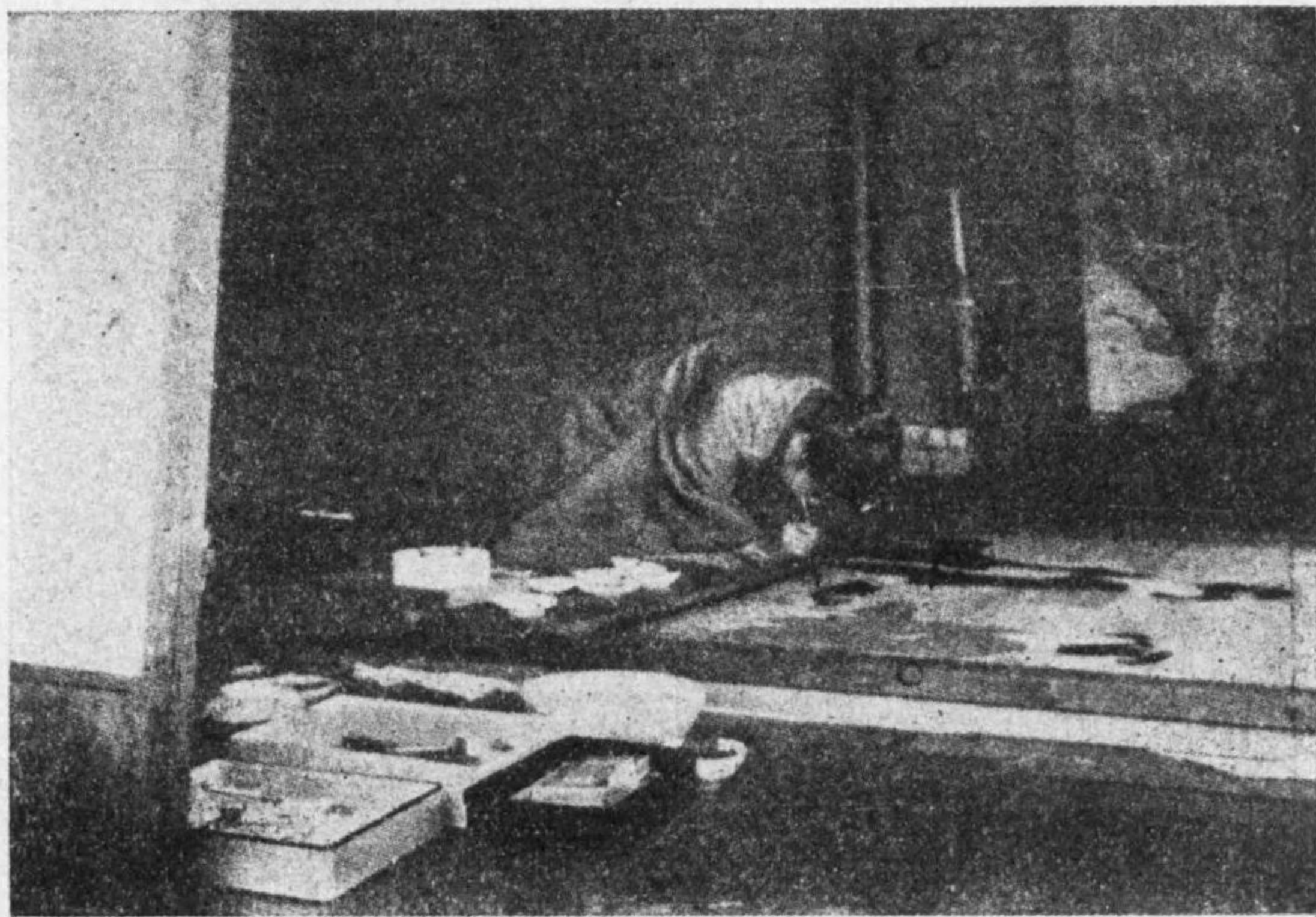
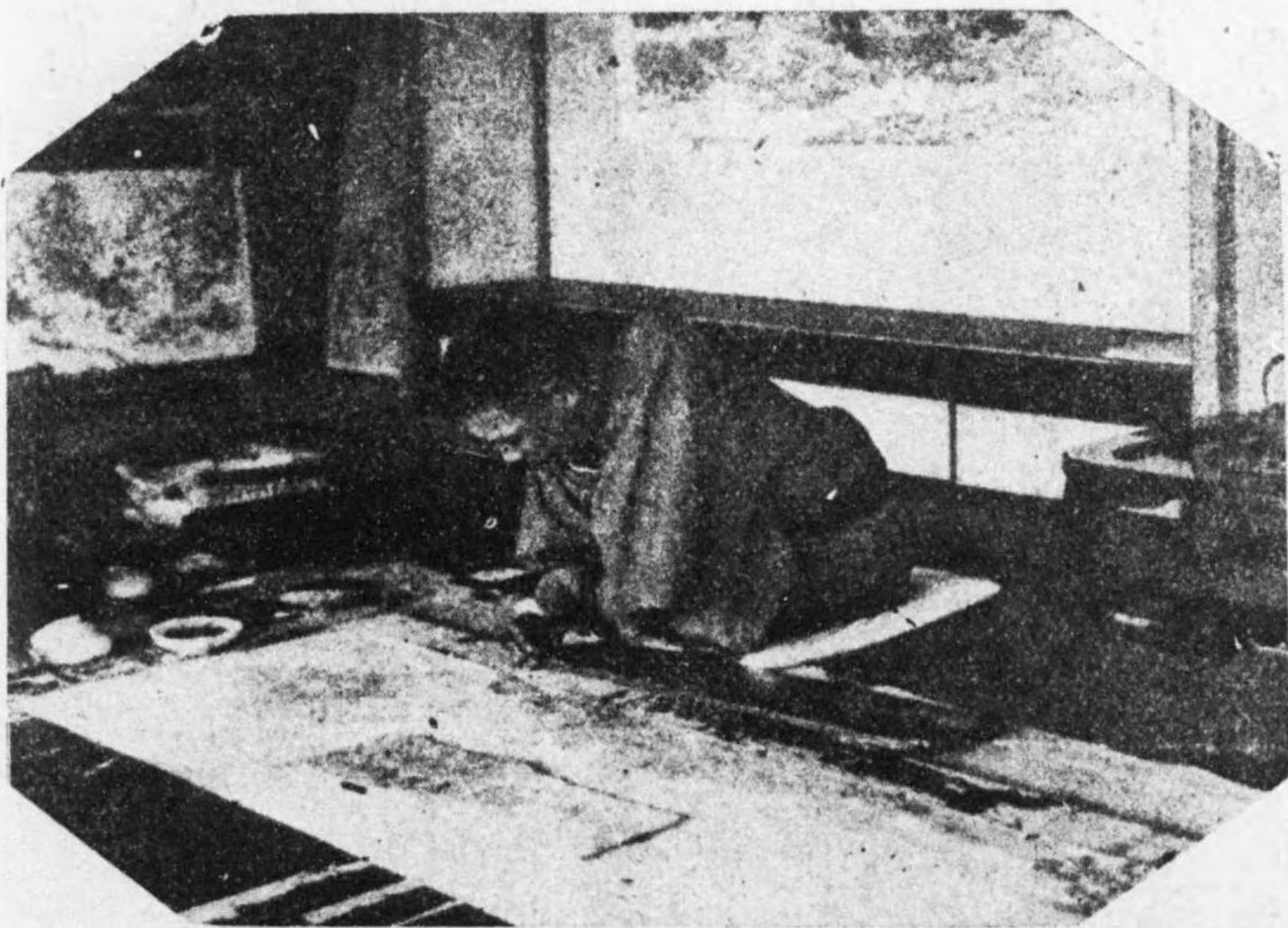
四君子 蘭、竹、梅、菊。

此外虎溪三笑、竹林七賢、飲中八仙と云つたやうなものが、随分澤山あります。が、此種このしゆのものを説くと云ふ事は、餘り専門的せんもんてきになりますから、之等これらは皆さんに畫を描く腕が出来てから、畫がわに關する書籍しよせきを讀んで、知るやうにして貰ひませう。

展覽會の話

帝展

現今盛んに行はれてゐる美術展覽會には、日本畫と西洋畫と彫刻とを、合同したるものもあれば、日本畫は日本畫だけ、西洋畫は西洋畫だけ、彫刻は彫刻だけ行はるゝものもあります。また之等の中には各々流派があつて、日本畫の展覽會だからと云つて、總ての流派が、混ぜられて居るわけのものでもありません。併し毎年一回づゝ催さるゝ帝展には、日本畫も西洋畫も彫刻も、舊いも新らしいも凡てを網羅し、實質に於て日本の大展覽會であるばかりか、近年は廣く歐米諸國にも知られ、年々に世界の注目を惹くやうになつて來ましたが、一方、吾國では、若



氏門多内山の中毫揮畫品出 (上)
史女香蘭崎川故くじ同 (下)

い美術家が世に出る登龍門であるから、誰しも競ふてこれに出品し、名譽の桂冠を贏得んことを慾するのです。

此様に競争が激しいから、従つて其鑑査なども嚴選を極め、毎年日本畫だけでも、二千點内外の出品畫があるに對し、入選するのは僅か百五十點位ですから、之れに入選するのは容易ではありません。それで初學時代から、此様な展覽會へ出品すると云ふ事は、無法なやり方です。初學時代は、自分の描いて居ると、同じ流派の小展覽會に出品し、此處で腕を練つた上で出品するがよいのです。

帝展はもと文部省公設美術展覽會と云つて、明治四十年に創始され、大正八年頃、帝國美術院創設と共に之れに移されたもので、略して文部省時代を文展、帝國美術院に移されてからを、帝展と云ふのです。

現今帝展の日本畫部には、十數名の審査委員があり、之等の多くは此展覽會に

於て優賞を得たものが任せられて居ますが、中には、大した優賞を得ないで、任せられたものもあり、又は一度も出品しないけれど、世間から實力を認められて任せられたものもあるのです。

院展

院展とは、日本美術院展覧會の事を、略して云ふのであつて、これは大觀・觀山・武山など云ふ人々が、一度創始して、久しく中止して居たのを、再興したものであつて、帝展に亞ぐ大展覽會であるのです。併し此展覽會では、先年洋畫部が分裂して、彫刻は僅ばかりですから、日本畫だけの展覽會と見てよい位です。そしてその日本畫も、新派だけであつて、他の流派は殆んど見當りません、だから此新派では、到底文展も及ばぬ程の權威を有し、鑑査など一層嚴しいので、これに入選するといふ事は、文展以上の難物です。それで、院展では初學者の爲めに

春秋二回、試作展覽會といふものを開催して居ますが、これとても鑑査が嚴重であつて、入選畫は出品畫の十分一位です。

二科

二科は洋畫家仲間組織された、洋畫展覽會です。どうして二科と稱されるかといふに、數年前舊文展時代に、日本畫の新派と舊派とが、餘り畫風が違ふので審査毎に新派と舊派とが採め合ふので、こんな事のない様に、舊派に屬するものを第一科とし、新派に屬するものを第二科として、全然區別して了つたので、其翌年から、此新舊兩派の衝突がなくなつたのです。所が、此日本畫部の様子を見た洋畫の若手連中では、新舊兩派の反目があつて面白くないから、洋畫の方も一科と二科とを設けて貰ひたいと、當局に交渉して見ましたが、當局に容れられなかつたので、洋畫部の新派に屬する連中の多くは、帝展に反旗を翻して畫會を組

織し、紀念の爲めその畫會を二科會と名命し、毎年展覽會を催し、近年は帝展・院展に亞ぐ、展覽會を催す様になつたのです。

其他此様な不平の下に、帝展に反對して近年は種々の畫會が起り、見物するだけでも容易ではありません。

研究的に見る展覽會

帝展・院展に限らず、多くの展覽會を見る時は、度々反復して見て、構圖や着色の工合などを觀察し、必要なものは筆記して置くと、畫を描く上に大層参考になるのです。そして帝展や院展のやうなものへは、開催中は度々行つて見ると、印象深く腦裡に残されて、どれだけ、研究の助けになるか知れません。

併し帝展や院展が開催されるのは、東京と京都だけであつて、廣く全國には催されないから、之等の都會に離れて、遠隔の地にある者は、見たくも見られない



展覽會の話



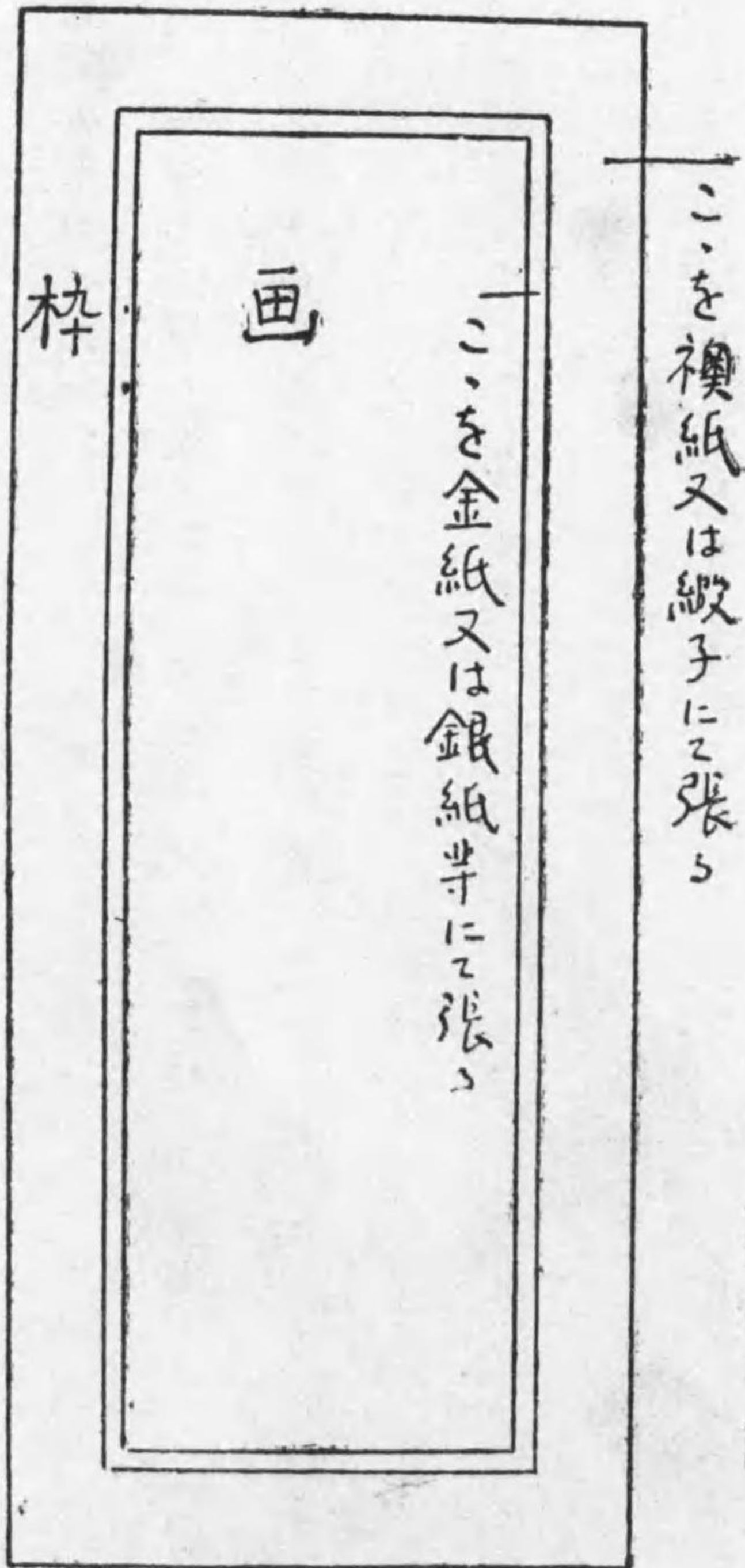
筆岡成島「ひ装の祭」(上)

史女岡成る、つし毫揮を「ひ装の祭」(下)

から、其地方で催される小展覽會によつて研究し、尙一層腕を磨いて見やうと思ふには、是非共東京か、京都か、大坂あたりに出なければ、これが研究は出来難いのです。

展覽會へ出品するには

日本畫を展覽會へ出品するには、屏風のやうなもので、其まゝ出品されるものは兎も角、他のものは一通り裝飾をして、出品しなければなりません。描かれたものが枠張りの絹地であつたら、圖の様に畫のまわり五分巾位を、金紙又は銀紙にて張り、其上から、其れを三分位残して、枠の表から少し裏面へもかゝるやうにして、襖紙を張るのです。此襖紙は畫と調和するやうな色合を用ひ、模様なども上品なものを選ばないと、之れが爲めに、切角の畫が引立たぬ事があります。併し念を入れた作品になると、襖紙などを用ひず、緞子を用ふる事があります。



(一其)方仕の裝表枠

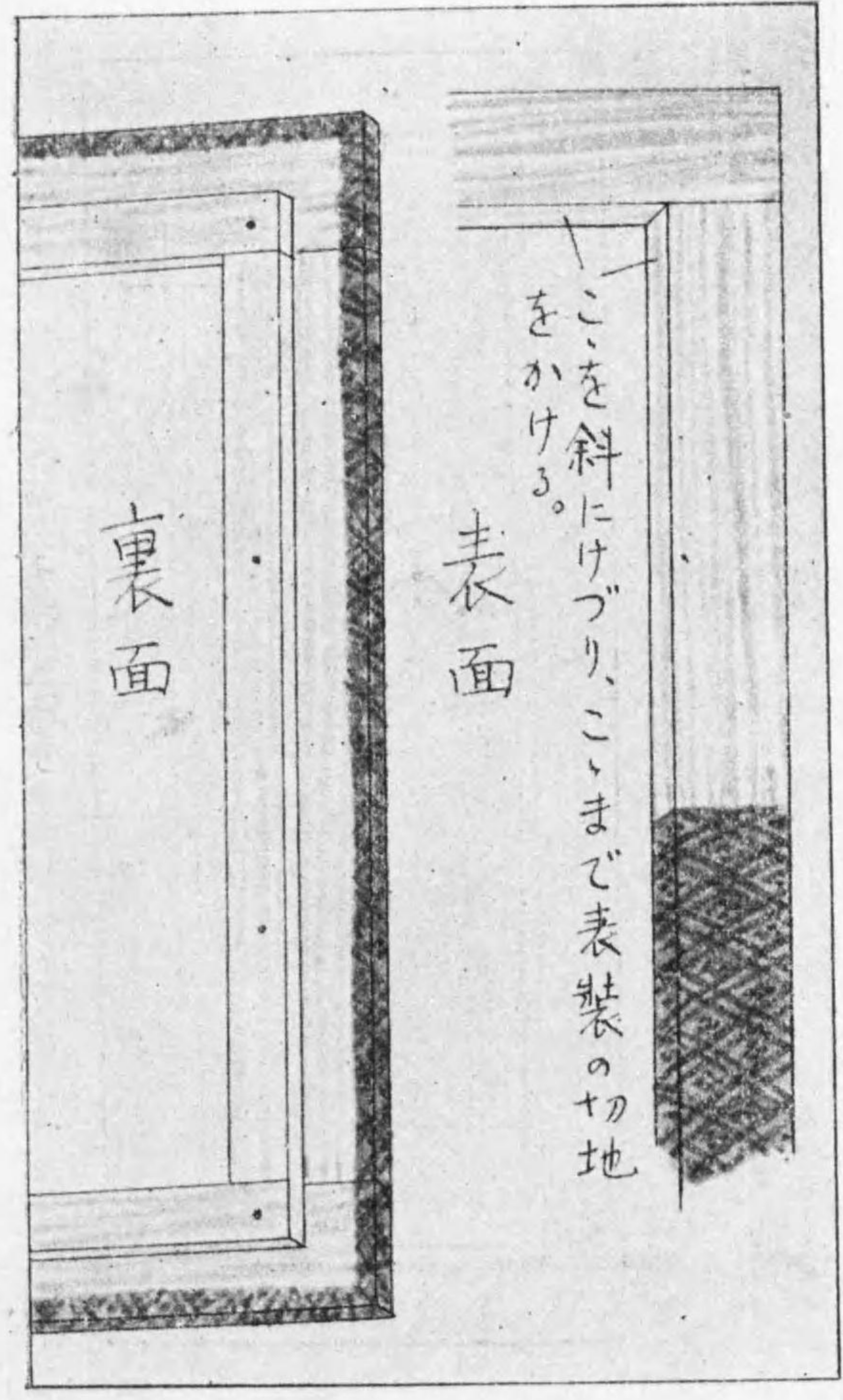
が、此緞子の場合には、必要な寸法だけ、裏打をして張るのです。

それから表装をしたものへは、黒塗の椽でも打つて置くと、一層綺麗であります。併し椽は打たなくとも差支ありません。

展覽會へ出品するには、此様に描いたものを枠張りのまゝ表装をするから、出

子供に描ける日本畫の描き方 一八〇

品畫を描く時は、枠の幅を幾分廣くして置いたがよい。枠の巾が廣いと、表装榮えがして、畫も引立つて見ゆるのです。



(二其)方仕の装表枠

此表装の仕方に、も一つ方法があります。それは出品すべき枠の内糊と寸法を合はせて、別に枠を作り、其枠に表装をして、圖の如く畫を張つた枠に合せて、枠の裏から釘を打つて留めるのです。此方法を用ふるのは、違つた寸法のもので描いた場合には、不經濟ですが、同じ寸法のものであつたら、出品毎に表装する世話がなくて重寶です。

枠と枠とを重ねて裏面から打つ釘は、表装した方の枠の表へ抜け出さぬやう、豫め寸法をはかつて打つたがよいのです。

それから光線の透射を防ぐ爲め、畫の裏面へ白布か、ザラ紙の様なものを張つて置かねばなりません。これを張るには、枠の裏面全體へ糊づけにすればよいのです。

日本畫に志す人々に

○
皆さんが本書によつて、日本畫の大體がわかり、一寸したものが描ける様になつたら、其上は一層寫生を勵み、模寫をしたり展覽會を見たりして、多くの人の作品に就て研究し、修養を怠らなければ、長い内には知らずく腕も上達して先生にかななくとも、或程度へ達する事が出来ます。

併し繪を描くといふても、只形が出来ただけでは不可ません。繪を描く傍ら、必要な本を讀んで、頭腦を作る事も必要です。此修養が足りなかつたら、人物を描いても眞の人物は描けない筈です。修養が足りない人の描いたものは、それは形の上では、如何に巧みに描き現はされて居ても、魂のないお人形と選ぶ所がな

いのです。だから將來人物畫を以て得意とするならば、歴史や風俗などに通じ、解剖學の一通りを知り、動物ならば動物學、植物ならば植物學の一通りを知り、此知識によつてあみ出された畫を、描くやうにしなければなりません。

○
又皆さんが此上先生に就て、深い研究をして見たいと思ふには、美術學校へ入るが一番よいのです。こゝだと、各派の先生が揃ひ、参考書なども完備して居るから、順序よく研究する事が出来ます。併し事情があつて學校へ入れぬ場合には私塾へ入るがよい。それも塾生が澤山居て、互に研究し合ふ所がよいのです。塾生が多ければ多いだけ、多くの人の描きぶりを見るわけですから、それだけ得る所も多いのです。

もし私塾であつたら、先生は一流の大家でなくとも、親切で開放的に教へて呉れる人がよい。一流の先生と云ふものは、兎角弟子任せて、新入生などへは目が

廻りかねるものです。

○
展覽會などへ行つて見ると、誰でも氣がつく事ですが、物の形を非常に正しく描いたのと、これとは反對に、形をくずして、漫畫のやうに面白く描いたのがあります。これはどちらがよいかと云ふに、形が正しいからと云つても、それが上手なわけではなく、又くずしてあるからと云つても、強ち下手なわけでもありません。此形を正しく描くのとくずして描くのは、これは其人々が有する個性であつて、殊更此様な眞似をしても、なか／＼うまく行かないものです。

人が畫を初めて或道程に達すると、形を正しくかくに適するか、くずしたものをかくに適するか、斯うした場合に出會ふものです。これは其人に大切な、個性が出初めたのであるから、此時は躊躇しないで、自分の好む方向へ進むがよい。此個性を發揮すると云ふ事は、一面から云ふと、天才に達する道程であつて、畫

を描く上に、一番大切なものであるからです。

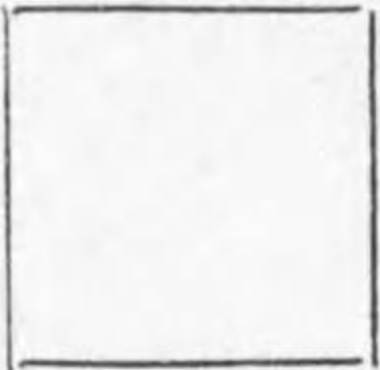
○
苦學して繪の稽古をしやうとするには、異常な根氣と、努力と、強健な體力と、そして相當な畫才が必要です。この四つの内一つでもあやしい所があつたら、畫は止めた方がよい。金がなくて無理な中から畫を習はふとするのに、これ位の武器を備へて居なくて、どうして貫いて行けませう。(終り)

大正十五年六月廿五日印
大正十五年六月廿八日發行

日本畫の描き方

定價 金一圓五十錢

著者



著者 田上翠風

發行者 東京市神田區錦町一丁目十九番地
小川菊松

印刷者 東京市小石川區西古川町二五番地
渡邊一郎

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
電話神田四七一・振替東京六二九四番

誠文堂

(刷印社會式株刷印外中)

